いろは文庫第七編序

虚から出たる實にもあらず、實から出たうそでもなく、正直正路の正史實傳、誠忠義士の外傳の、世になほ普からざるを、拾ひあつめし假名策子、いろは文庫と題號し甲斐に、かの難波津の歌をさへ、習ひおぼえぬ少女子にも、讀めて譯りていにしへの、事實を知らする手引の近道、よしや孝悌忠信の、夫には企及ばず共、亂離の人とならじとのみ、おばし給へと勸むるも、爰に七編しちくどき、例の作者が老婆心切、替らぬ事をくだくだと、述べて綴りて序言に換ふ。

乳房ほど垂れて愛たし實のり稲

豐に取入る米の秋

爲永春水記

第三十七回

彌生の空の定めなく、今まで春和に晴渡りしも、忽地降出す村雨に、開帳參り花見連、或は辻賣小屋掛商、おの〳〵濡れじと押合ひへし合ひ、上を下なる長谷の境内、這所の軒下那處の木蔭と、笠舍する貴賤老弱、空を眺めて口々に ▲「コウ、不宜な時分に降出したちやアねへか、折角の御開帳を无體に爲て仕舞はア」 ●「ホンニサ、途中で降られた程意氣地のねへものはありやア爲ねへ、アレ見ねへ、隨分小當世な娘だが、びッしより濡れた日傘をさして、べた〳〵蹴泥の揚つた足へ、緋縮緬の湯卷が濡れて引ついた所は、さつぱり色氣のねへ容形だ ▲「併しあの娘の事ばかりは言はれねへせ、隨分此身達の風俗も相應に可笑しいから、是と知つたら、先刻堀の若竹で、傘を一本借りて來れば宜かつたに、氣のつかねへ事をしたト言ふとき這方の軒下にては、一三個の女連 ⊠「アレサお喜さん、最う些と其方へ寄つてお呉れでないと、お前の提げてお在の駒下駄の泥が、私の帶へさはるハネ ×「オヤさうお言ひだけれども、是より這方へ寄ると、天滴が袖へかゝるものを、お前もつと然お寄りな ⊠「夫でも爰の隅に犬が寐て居るから、もう是よりか寄られないヨ ×「オヤマア犬ぐらゐが何だネエ、追出してお仕舞ひな ⊠「私やア否、萬一喰付かれて御覽な、大變だハネ、夫だものを何樣して寄られるものかネ ⊠「オヤ〳〵お前達は何を喧嘩をお爲のだへ、サア〳〵私が這

方へ寄つて進げるから、二個が何方も濡れないやうに、和合よく爲ておいでト言はれて二女は氣の毒になりしか　☑「アレサ夫ぢやァお前さんがお濡れだと悪いから宜うございますヨ、サァお喜さん、私が犬の居る方へ入替るから這方へお出で　×「ナァニ宜いよ、私が要心をして、駒下駄の泥のつかないやうにして居るから ト少しの物の言品にて、角め立つのも和合なるも、實に寶言話に買詞とは、よくも譬へし浮世の人情、これ等はつひした事ながら、兎にも角にもお女中方は、温和にしとやかなるが、自と人の目にもつき、奥ゆかしくも見ゆるものなり、浩る折しも向より、中間らしき一個の男、雨具を携へ烏鷺〳〵と、右邊左邊を見まはしながら、多くの人の雨舎りせし軒下へ來て小腰をかゞめ　中間「モシ、少し物が承りたうございます、萬一這處等へ、鷹の羽の紋を付けた黒の羽織を著たお武士が見えは致しましなんだか　▲「アハ、、、、此賑やかな往來だものを、黒の羽織を著た武士は、十人も二十人も通つたから、何れだか分解らねへ、こいつは餘程六かしい尋ねものだ　●「違ねへ、こりやァ這處で聞くより、先の辻番で聞く方が宜からう、ハ、、、ハト言ふ中より一個の男が　㋐「待ちなヨ、鷹の羽の紋と言へば、萬一先刻生酔に喧嘩を爲かけられて困つた武士ぢやァあるめへか、たしか羽織の紋が似て居たやうだッけト言はれて中間は恟りせし樣子にて、其武士の年恰好、大小衣服の模樣まで聞合せて、いよ〳〵驚き　中間「モシ、夫に違はございません、そして其喧嘩のをさまりは何樣なりましたか、御存知ならお聞かせなすッて下さいまし　㋐「ナニ、喧嘩と言つて別でもねへ、近所の惡漢が突つかゝつて物に爲やうと爲たところへ、茶屋の娘が中へ這入つて其武士をば自分の店へ連れて往く樣子だッけ　中間「へ、エ、夫では双方とも怪我もございましなんだか、ヤレ〳〵夫で少し胸が落付きました、そして其娘の店は何所でございますか　㋐「然サ此身も土地の者でねへから、委しい事は知らねへが、たしか奥山の梅本と言ふ茶屋へ出る、お民といふ娘だといふ事だ、併し馥實張の店だらうから、此雨ぢやァ店も仕舞つたらう　中間「左樣でございますか、何に致せ樣子が知れて有難うございます、兎も角も先を尋ねて見ませうト心ならずも中間は、足を速めて走せゆきける。

這所も同じく長谷の境内、その中腰の中程なる何某寺の門内へ、這入れば當世な裏長屋、九尺二間の棟割に或は縫物女圍はれ女、前句の判者陰陽師、茶店へ出づる娘など軒を並べて明暮も、野夫を離れし附合は、舌先で丸めて浮氣でこねる、浮いた暮しか仕出屋の、印の付いた岡持と、損料布團が路次口へ、這入らぬ日もなき榮枯得失、假の浮世に假の宿、借りて世渡るありさまは、盧生が夢の五十年、その邯鄲の夫ならで、魂膽長屋と渾名せし、浩る中にも表圖のみ、節を合せて蓮葉の、濁にそまぬも多かるべし、偖この路次の入口から、はいれば右へ四五軒目、門の印に梅本と書きし障子の其内に、何やら眞な噺聲　湖平太「扨とんだ事からして、種々なお世話になつて、寔に氣の毒千萬な　民「イ、エ、私こそ此樣な穢い所へお連れ申して、寔にお氣の毒でございます、けれども店でお禮を申さうにも、急に雨が降つて來て詮方がないのでございますから、何卒御堪忍なすッて下さいまし、先刻は叔父さんがひよんな事を爲出して、萬一貴公が御了簡なさらずば、何樣せうと思ひましたヨ　湖「イヤナニ全く惡氣でもあるまいが、酒が過ぎての事であらう、併しあゝいふ叔父を持つては、何かにつけて心配で有らうな　民「ハイ有難うございます、斯うまうすと何樣か恥をお隱し申すやうでございますが、那人は私には血脈の叔父さんぢやァございません、けれどもお爺さんが亡死てから、段々不仕合が續いて、詮方なしに私がこんな商賣をするについて、那人が種々世話をして呉れましたから、ツイ叔父さん〳〵とまうしたのを、今では先から叔父顔をして、無理な無心や何かを言ひ

ますので、寔に困りますヨ、是と知つたら初ッから、あんな人の世話にはなるまいものを、その時分には母人も、私も世間の様子は知りませず、質明に信切な人だと欺されて頼んだのが、今ちやア口惜しうございます、世話を爲た〳〵と言ひますけれども、私の方から那人に、出したお金も些ではございませんヨ、ト放心〳〵言ひしが心づき　民「ホ、、、、、、はじめてお目に懸つた貴公に、こんな事までお咄しまして、嘸はしたないものだと思召すでございませうネエ、ト顔赤らめてさし俯向くを、湖平太は程よくうけて

湖「イヤモウ、然ういふ事は世間にま、ある事であらう、扨種々な事で大きにお世話になつた、雨も小降になつた樣子だから、私はもうお暇に爲ませうト言ふをお民が引きとゞめ　民「アレマア、少しお待ちなすッて下さいまし、あんまりお寒うございますから鳥渡一口ト云ふ折しも、豫て云付け置きたるにや、門口より仕出屋が　しだし「へイお　跳　でございます、店が取込んで大きに遲くなりました、ト肴の這入りし岡持と、一升徳利を置いて往くにぞ、お民は手ばやく酒の燗を付け、肴を丁足の膳へ乘せて持出し　民「寔に何にもございませんけれども、ほんのお寒さ凌ぎに、お一盞召欲つて下さいましト言はれて湖平太は當惑せし顔付にて　湖「何樣もこんな心配に預つては、まことに迷惑いたす譯だ　民「アレサ然被仰つて下さいますと、何ともかとも申しやうのない程お氣の毒でございますけれども、折角お燗まで致しましたから、何卒お一盞　湖「イヤ心ざしは辱いが、若い女中とさし向で、斯して咄を爲て居るさへ、何とやら人の思はく、殊に酒宴なぞ致したと申す事が、屋敷へでも聞えては濟まない譯だから、ひらに是はお預けまうさう　民「さう被仰るのを、無理にとはまうしませんが、今に母人も歸つて來ますし、夫に私やア少しお前さんに、お聞き申したい事がございますから、永くとは申しませんからもう少し、お在でなすッて下さいましト思ありて氣に引留められ、流石否とも言ひがたく、囲じ果てゝ居たりける。

第三十八回

折から又もや降出す村雨、車軸を流すばかりなれば、湖平太は今更に歸らんとするに歸りもやられず、殊にお民が何事やら聞きたき事のありと言ふを、聞果てぬも心ならず、其うへ些の酒肴も、心を盡せし饗應なるを、物堅くは言ふものゝ、盃餅にさせんは有翼にて、思案を定めて座に落ちつき　湖「イヤ先刻も言ふ通り、他に人もない家に、お前と私が斯して居ては、どうやら影證いやうなれど、何か尋ねたい事があると言ふを、聞かぬのも道でなく、又此樣に態々取設けなすつた物を、手を懸けないも餘り偏屈なやうだから、田舍堅氣を捨てゝ一盞御馳走にならうかネエ、併し私はとんと此方は不得手だから、何卒酌いでは呉んなさんな　民「オヤさうでございますかへ、寔に左樣被仰つて下さいますと、先刻のお禮が致したさに、這所までお連れまうした甲斐があつて、どんなにか嬉しうございますヨ、常はお欲んなさらずとも、お寒うございますから、お燗のよいところをお一盞お過しなすつて下さいまし、ト是より須臾盃の取遣するうちに、素より飲めぬ口なるゆゑ、湖平太は目の淵をほんのりとさせて　湖「トキニ、思はず欲過して大きに醉ひました　民「オヤねッからお欲んなさりも爲ませんで、ホ、、、、、、それはさうと、斯申しては何樣か不躾らしうございますが、貴公のお屋敷はたしか鹽谷樣でございますネエ　湖「エ、ナニさうでもないのサ　民「なる程、こんな所でございますから、お隱しなさるのも御尤でございますけれども、貴公のお言語つきと言ひ、召してお在でなさるお羽織の御紋と言ひ、どうも他の御方とは思はれませんヨ、萬一貴公が私のまうすお屋

敷なら、お聞きまうしたい事がございますから、何卒實明を被仰つて下さいまし　湖「イヤ、さう委しく知られたうへは、隠しても詮ないこと、實はお前の祭しの通り、鹽谷の家中で森湖平太と言ふものだが、夫について聞きたい事とは、マア一體何様いふ事だネ、ト言はれてお民は押入の、葛籠の中より取り出せし、羽二重の紋付と、袋入の短刀を湖平太の前に差出し　民「アノウ、此品を貴公萬一お見知りはなさいませんかへ　湖「ハテな、此小袖といひ短刀まで、皆鷹の羽の御紋付、これが何様してお前の内にト不審さうに問返されお民は思はずはら〳〵と、こぼす涙をおし拭ひ　民「これにつけては長いお的話、お聞きなすッて下さいましし、元來私のお爺さんは、鹽谷様の御家來で、些は人にも知られたもの、武術のうへの爭から、朋輩に痍疵を負はせ、その儘御暇になりまして、本國を追拂はれ、所々方々と流浪するうち、今の母人と夫婦になり、此鎌倉へ落付いて子供を寄せての手習師匠、おもひのほかに繁昌して暮すうちに私が産れ、此様子で往つたなら、一株にも取りついて、宜い聟取つてどうしてと、思つてお在の其うちに、お爺さんが煩ひつき、五年越のぶら〳〵病、藥も灸も驗なく、私が丁度十四の年、迚も治らぬと思つてか、母人と私とを枕元へ呼び寄せて、他の事は少しも言はず、此小袖と短刀は、殿様から拜領の品、此身が命があつたなら、侍の聟をとり、此二品をも讓らうと、豫ては思つて居たなれど、斯病が重つては、翌の程をもはかられず、息あるうちには望も叶はぬ、此身が死んだ後とても、假令貧苦に逼らうと、此二品は系圖とも、父とも思つて肌身を放さず、ならう事なら鹽谷家の身分は輕い仁にもせよ、心ざしのよい人に其身を任せて末永く、此身の位牌を鹽谷様の、お家へ殘して呉れるなら、此身が歸參をしたも同然、今言ふ事を宜く守り、浮氣な色に迷はされ、他し男に誘はれて、親の名までも汚すなト細々との御遺言、夫が此世の名殘にて、其夜もさらず果敢ない別、夫から心を驚まして、最期に遺せしお言話を、无にせまいぞと思ふ故、山の茶店へ出る度に、男に袖褄引かれるは永いうちには幾度か、其度々に表面では、節を合せて居ながらも、心の錠は外しもせず、多いお客の其内で、鹽谷様の御家中と、見請けるお方がございましても、大かたは御酒のうへか、夫でなくともじやら〳〵と、只最う浮氣なお咄ばッかり、何卒して頼母しいお方にお目に懸つたなら、お爺さんが二君とやら他のお主へ奉公せず、一生清く終つた事を、お噺しまうした其うへでは、御紋付を證據にして、御遺言をも立てたいと、思つて暮す永の年月、何様いふ御縁かぞんじませんが、不思議に貴公にお目に懸かり、最前からの御様子を、見れば見る程お頼母しく、ツイ長々しい過去咄、不便と思つて下さいますなら、お爺さんの存念をト言ひさして又泪ぐむ、心を察して湖平太も、侶に哀れと鼻うちかみ　湖「偖々驚き入つた親公の心體、その遺言を受けついで、无にせまいとするお前の孝心、男の身でもおよばぬ事、夫に就いて私もまた、些と心當りな事があるが、若やお前の親公の名は、里見十右衛門とは被仰らぬかへ　民「夫を何様してお前さんが　湖「ハテ、其里見氏ならば、お前から頼がなくとも、お世話をせねばならぬ義理サト言はれて、お民は何故とも、仔細は知らねど頼母しく、いそ〳〵立つて佛壇より、親の位牌を取りおろし　民「是がたしかな證據でございますト言ふを湖平太受取つて、位牌の表を讀下せば、法名仁譽即是居士、俗名里見十右衛門　湖「フウ、此位牌を見るからは、いよ〳〵義理ある里見氏、とばかり言つても分辨るまいが、私の親は左内と言うて、お前の親公十右衛門さんとは、子供の時から竹馬の朋友、或時同じ家中の侍士、矢居辨助といふ者と、お前の親公が武藝の爭ひ、果は互に言募り、我が手の内を見すべきぞと、お前の親公が拔討に、斫込む脇差受け損じ、辨助は肩先を四五寸ばかり斫破られ、口に似合は

ぬ未練の辨助、痛痍を抱へて逃出すを、おのれ辨助逃さじと、白刃を振りあげ追蒐くる、折しも私の親左内其席に居合せしが、夫と見るより後から、親公をしッかと抱留め、なだめて其場を納めしゆゑ、辨助も命恙なく、無事に濟まんと思ひの外、此事表沙汰となり、辨助は役儀を放され、お前の親公は御勘當、本國を出られしより、其後行方は知れざるよし、親が私へ度々咄し、幸此度鎌倉へ在番に當りしゆゑ、御當地は繁華にて諸國の人の集り所、心に掛けて尋ねたら、回り逢ふ瀬もあるべきぞと、親の差圖に隨つて、夫とはなしに人にも問ひ、種々心を盡せしに、思ひがけなく今日這所で、お前に逢つての物語、永々浪々せらるゝうち、二君に仕へず其うへに、拜領の二品まで、お前に讓つて細々と、遺言されし心ばへ、此事左内が聞いたなら、嘸滿足に思はうに、親の左内も去年の冬、私の留守に本國で亡死つたとの知らせの文通、親と親とは世を去つて、其子と子とが回合ふ、是も不思議の因緣ト過來方を語合ひ、四ッの袖をぞ濡しける。

（卷の十九終）

第三十九回

當下湖平太は懷中より小判三兩取出し、鼻紙にざッと包んで　湖「偖々不思議な御緣でお目に懸り、年頃の本意を遂げて、是程欣ばしい事はございません、親どもの言付には、里見氏の行方を尋ね、今に浪々してござるなら、昔のよしみを忘れぬため、およぶ程は合力して、折を見合せ歸參のなるやう、骨を折つて世話致せと、まうした言葉がございますから、十右衛門さまは居られずとも、其娘のお前のことゆゑ、及ばずながら此末とも御力にもなりませう、就いて是は餘り少しでお恥かしい譯だけれども、今日お目に懸からうとは思ひがけない事だから、持合と云つても纔是丈、又近いうち寛々參つて母公さんにもお目に懸り、往往お母子の身の落付をも御相談まうさうト信實見ゆる湖平太の言話に、お民は嬉しさの身にこたへて、容を改め　民「今日はマア何樣いふ吉日でございませうネエ、ふとお前さんにお目に懸つたのが御緣となつて、さうまで御信切に被仰つて下さるとは、これも大かた信心する觀音さまの御利益か、お爺さんの引合か、私やアもうこんな嬉しい事はございません、併しこんなに大さうにお金なんぞを頂きましては、寔にお氣の毒でございますから、是はマアお返しまうしますヨ、私の願はお金も何にも頂かないでも、末永くお見捨なさらないでさへ下さいますと、夫が何よりか有難うございます　湖「イヤナニ、親々が昔の所緣をぞんじれ

ば、中々麁略に致す存寄は決してないから、お前の方でも纔のものを、彼是と言つて呉んなさると、何分私が氣の毒な譯たによつて、ひらに是は納めてト遠慮するを無理にわたし　湖「トキニ種々のお的話で、歸りの刻限が遲なはッた、まづ今日はお暇に爲ませうから、お母人さんがお歸んなすッたら、私がまうした仔細を委しく咄してお呉んなさいト言ひながら立たんとするにぞ　民「まア烏渡お待ちなさいましョ、雨は止みましたけれども、道がわるうございますから、あのお履物ではいらッしやられますまい、私の處は女ばかりで、お貸しまうすやうな物がございませんけれども、お向の内には何でもございますから、烏渡借りてまゐりませうト立出るを急におしとめ　湖「ナニサ、きつい事もあるまいから、餘所を借りたり、何か心配を仕なさるには及ばない、隨分飛々往かれない事はないノサ　民「イエ〳〵、夫でも御足が汚れてはわるうございますからト云ふとき、門口の障子を明けて中間燈の男　男「モシ梅本のお民さんとは此方でございますかト言ひながら奥に湖平太の居るを見つけ　男「イヤ旦那さま這所にお在なさいましたか、貴君のお在さきが知れませんで、方々とお尋ねまうしました　湖「オ、市内か、大儀〳〵、宜く夫でも這所に居るのが知れたノウ　中間市内「ヘイ先刻大鷲樣へお手紙を持つて參れと被仰いましたから、お屋敷へ立戻りました處が、大鷲樣はお出遊ゆゑ、お在先まで參りましたので、大きに手間どりまして、夫から貴公がお待ちかねであらうとぞんじますゆゑ、急いで參りますと、途中で雨が降出しましたから、お出入の刀屋へ寄りまして雨具を借受け、たしか觀音の本堂にお待ちなすッて入らッしやるやうに被仰いましたから、お堂の内を一遍と尋ねましても知れませず、其内噂を聞きますれば、最前途中で喧嘩の樣子、どうか貴公にお似まうしたやうな咄でございますから、なほ委しく承りまゐすれば、梅本といふ茶店へ出るお民さんといふ娘が、店へお連れ申したといふ事でございますから、奥山中を尋ねましても、那大降で茶店といつては一軒もございませず、夫から段々と尋ねまして、やう〳〵此裏といふ事を聞出しました　湖「夫は別して大儀であつた、此身もとんだ痴漢に出會つて迷惑したうへに、降込められて大きに此家の世話になつた、併し箇樣なことは人の耳に入ると、種々な批判をするものだから、屋敷へ歸つても、喧嘩の事は素より、此家に立寄つた事なぞは、必ず沙汰を致すまいぞ　市「ヘイ、夫は宜くこゝろ得て居りまする　湖「夫では少しも暮れぬうちに、急いで歸る事といたさう　民「オヤ夫ぢやアどうでもお歸りでございますかへ、何卒急度お近いうちト半分言はせず湖平太は、市内が聞くまへゆゑ、言つては惡いと眼で知らせ、挨拶さへもそこ〳〵に、忍んで路次をぞ出行きける。

斯てのち湖平太は折々此家へ歩を運び、お民の母にも對面なし、親の言葉を无にせじと、種々に心をつけ、金銀なぞ合力して、母子が貧苦を救ふほどに、月老の結びし緣にや、お民は湖平太を深く慕ひ、湖平太もまたお民が心の貞節にして、信實あるを憎からず思ふにぞ、終に情通なかとなり、後は母にもうちあけて、夫婦の和合をなすほどに、お民が腹に一子をまうけ、名を兼松と名號けつゝ、一年あまりもおくるうち、兎角して湖平太は、はや在番の年も滿ち、本國へ下るの時節になれば、豫てはお民親子の者を國元へ連下り、表立ちて夫婦にならんと堅く約束せし事なれども、初めての在番に女を連れて戻つては、上向の聞えも宜しからず、一度國へ立歸り、上へ願を達てゝのち、親子三個術をよく本國へ迎へ取らんと、此旨お民に言聞かせ、其間親子の者が不自由をせぬやうにと、餘程の金子を殘しおき、偖湖平太は日を定めて本國へ下りしが、お民を妻に娶らんといふ願をいまだ立てざる間に、鶯谷

家に騒動起り、判官切腹と聞くよりも、忠義無二の湖平太なれば、嬶て大星に一味なし、讐討と心を定めしうへは、親妻子をも見返らじとある、誓詞の面に深く愧ぢて、鎌倉に殘したるお民親子が怨みんとは思ひながらも音信をせず、お民はお家の滅亡を、人の噂に聞くよりも、良夫の身のうへ氣遣はしく、今日は便の聞ゆるか、翌日は音信の知るゝかと、心ならずも待つうちに、母は敢なく此世を去り、悲しき月日を送るにぞ、湖平太より恵まれし金も大かた遣切りしに、強八が非義非道、少しの物をも掻取られ、いよ〳〵貧苦は募りけり。

這所の物語は第六編に著はしたれば、事の前後するにより看官疑ひ給はんが、是等は例の筆癖なれば、言はでも推し給ふべし、湖平太お民が身のをさまりは、是より下に綴り出せば、よく〳〵初をてらし合せて、前後の首尾を見給へかし。

第四十回

偖も森湖平太は亡君の讐を報せんため、大星と倡俱に本國赤穂を立退いて、京師六條の片邊に幽なる家を借り求め、姑く這所に假住居して、鎌倉の様子を窺ふ程に、由良之助は鎌倉より洛中へ入れ置かるゝ、家須義家の間者の爲に密謀を悟られじと、態と身持を墮弱になし、祇園島原は言ふに及ばず、或は墨染撞木町など、世に聞えたる花街を酒興に事寄せ放心歩きて、啞方者の名を取りしが、尚是にても飽足らでや、其頃歌舞妓の女形にて瀬川竹之丞と呼ばるゝ者を大星深く寵愛して、那が男色に心を亂し、日夜に放埒彌增すにぞ、一味連判の輩も、初の程は敵方に油斷をさする計略と、其儘にてさし置きしが、中々當時の爲體、復讐の事なぞは思ひ忘れしありさまなれば、最歎かはしきことにおもひ、心を痛むるその中に、湖平太は大星には別けて恩義を受けたるものゆゑ、何卒本心に立歸らせ、一日も速く亡君の御憤を晴さんものと、人なき折を見合せては、言話を盡して諫むれども、大星は何時とても空吹く風と耳にも留めず、只現なきありさまに、湖平太も力及ばず、さりとて止むべき事ならねば、獨りつく〴〵思案を做すに、今大星が現を拔すは、瀬川竹之丞とかいふ俳優且、那さへなくば大星が不行跡も少しは直らん、其時諫めて本望を達する所存を出させん、不便ながらも讐討のさまたげになるあの妓童、今宵もたしか木屋町の例の二階へ大星が、竹之丞を呼ぶは必定、往來の道は四條河原、歸りを待伏せオ、夫ト嫉及合せて湖平太は、日の暮る、をぞ俟居たる。

名に聞えたる四條の晩景、納涼の頃は取りわけて、河原に夥の茶店を掛け、或は夜芝居辻講釋、おでん燗酒あんばいよし、鰻の骨切り宇治丸の蒲燒嚊ぐ廊なンど、軒を列ねて賑しく、唄女娼妓を引連れてざゞめく一群、あるときは白手拭のぞめき連、押しつ推されつ河原の繁昌、晝の暑さを捨てに來る、實に洛中の金錢は、這所に寄る歟と疑ふまでに、目を驚かすありさまなり、折しも茶店へ寄り來る二個　男「モシイナア、善哉一膳づゝおくれんか、宜う甘うしてヤ、(此善哉といふは、江戸にていふしるこ餅に類せしものなりとは、言はでものことながら、京師のやうすを知らぬ子供しゆの爲にしるす)　茶や「ハイいんま宜うして進げますわいな　男「トキニおすまさん、何ぢややら、莫太美粧てぢやが、今宵は何かお樂でもあると見えるの、畜生め　女「エ、モウお許しぢやアな、私ヤそないな氣せんではありやせんがな、お前んと斯いふ情合になつたを、家内でてツきり氣が付いたやら、母公さんが當事らしいことばかり言うてぢやさかい、私や

最う氣が痛んでならんわいな、夫にお前んは浮氣らしい、此間も備後安（これは揚屋の名なるべし）の裏口から、何樣やらの唄女さんと手々引合うて出なされたを、私や能う知つてちやわいな　男「なんのそないな事して宜いものか、そりやてツきり誰ぞが二個の和合をつゝかうて、言うた事であろぞイ　女「アレまだじやら〳〵言うてちやなア、此春もその唄女さん連れて、太秦へ櫻見物にお出たちやおまへんか　男「アリヤ據ない附合で　女「エ、もう置いてお呉れいな、何の唄女さんに附合が入つたものいなア　男「ハテモウ疑ひ深い女子ちやなア、爰に此樣な美麗しい者を置きながら、唄女ぐるひ爲たからとて、娼女買に往たからという何で面白い事があるもので　女「オ、怖やの、お前さんの其口にかゝつては、何處の女子もみんなころりと爲ますといな、莫太お樂みな事やなア、ホ、、、　男「トキニ此樣な事言うてる手間で、芝居など一幕見て往きんか　女「ホンニ芝居と言へば、竹之丞が宜い評判ちやおまへんか　男「あの竹之丞はたしか山科にお在る鹽谷さんの御家老さんとやらが、きつう贔屓ちやげな、エ、旦那持つて仕合な者ちやなアト咄すを這方に聞き居る湖平太、宵より此邊を立廻り、竹之丞の歸りをば今や遲しと待つ程に、つひした噂ばなしにも、大星が童弱な取沙汰、聞くに無念さ口惜しさ、是みな嫉妬がなす所爲と一筋に思ひつめ、いかで今宵は過さじと、河原に姑く徨めば、兎角する間に小夜更けて、凉みし人もちり〳〵に、自己が家路へ立歸れば、夜店の灯も皆引けて、蒲鉾小屋の灯火のみ僅に殘る眞夜中過、息せき駈來る四手駕を、夫と見るより湖平太は間近く寄つて聲をかけ、駕の内はト問ひかくれば、供に附添ふ送りの者が、竹之丞と答ふるにぞ、矢庭に刀を引拔いて、おどしに四五度振りまはせば、駕軻どもは打駭き駕をその儘うち捨てゝ、ヤレ人殺し〳〵ト供の男も倡倶に、雲を霞と逃げてゆく、爲すまましたりと湖平太は、駕の垂を刎上げて、戰へ慄く竹之丞を駕より外へ引出し、覺悟しやれト振揚る、刀の下に竹之丞は、身を沈ませて飛びしさり、又砍りかくるを右左と、刀をかはす身のこなし、素より那は色子にて、武藝を知るべき者ならねど、習ひおぼえし俳優の業に馴れたる取りまはしに、飛鳥のごとく駈けめぐり、透を窺ひ湖平太が、刀持つ手にすがりつき　竹「アレマア待つて下さりませ、私に何の咎あつてト急度見あぐる嫉妬の顔、折しも出づる月影に、湖平太つく〳〵くうち詠め　湖「てもあつぱれ目元口元、その艶色が其身の仇、咎も怨も無けれども、生けて置いては主家へ不忠、不便ながらも手にかくる、身の薄命と觀念して、成佛爲やれト言ひながら、振り離しつゝ斫らんとする、其手に猶も取りついて　竹「私が生きて居るときは、主家へ不忠と被仰るは、何樣いふ譯か知らねども、定めてそれには種々と、深い仔細もござんせうが、私ちやとても此やうな、卑しい勤を爲ますのも、たツた一人の母公さんを、樂に暮させたいばかり、今宵貴公の手にかゝり、私が死んだと聞かれたら、常から氣弱い母公さんゆゑ、若つきつめてどのやうな悲しい事にもならうも知れず、よし夫までにならずとも、私が亡くば誰を杖、誰を力に明暮の、憂を慰め給はうぞ、死ぬる此身は厭はねど、後へ殘つた母公さんに、歎をかくるがおいたはしい、爰の處を聞きわけて、何卒たすけて見遁してト歎きつ詫びつかき口說くを、つく〳〵聞いて湖平太は、素より慈善心ゆゑ、母の歎と子の赤心を、聞いては非道に斫られもせず、如何やせんと躊躇ひしが、兎ても角ても生置いては、大星殿の身のさまたげ、猶豫は不忠と思ふにぞ、我と心を鬼にして　湖「和女の歎も理ながら、生けて置かれぬ其仔細、今打明けては何樣も言はれぬ、和女を殺したその跡では、我も追付切腹なし、來世へ往つて言譯する、過世の因果とあきらめて、命をたもれト尖き太刀風、既に危きその折しも、忍頭巾に面を躱し、始終の樣子をあなたなる、小陰に徨聞く侍が、夫と

見るより找寄り、持つたる扇に湖平太が刀をはツしと打落し、うろたへまはる竹之丞に、速く逃げよと手で知らすれば、地獄で佛と那侍を伏拜みつゝ、竹之丞は、後をも見ずして走りゆく、湖平太は討留めんと思ふ嫉妬を取逃し、怒に堪へかね取落せし、刀を手速く拾ひあげ　湖「おのれ曲者逃さじと、砍つてかゝるを侍は、再び扇に受けとゞめ　侍「慌りめさるな森氏ト言はれておどろく湖平太が　湖「さう言ふお聲は大星殿

侍「コレト止めて四邊を見まはし　大星「感じ入つたる貴殿の心底、其赤心は知りながら、諫を用ゐず様々に身を放埒に致せしは、敵方の間者まだ洛中に竊み居るゆゑ、最早時節に赴けば、本意を遂ぐるも今須臾、某も遠からず鎌倉へとこゝろざせば、貴殿は先へ那地へ下り、原郷右衛門をはじめとして、一味の者と心を合せ、敵の様子を窺はれよト言はれて欣ぶ湖平太が、斯までに深き所存と知らずして、愚にも疑ひしを今更悔しくおもひける。

是より湖平太が鎌倉に下り、義心をあらはす事より、節婦お民が身の終まで、次の巻に説出せば、よ〳〵前後を見合せ給へ。

（巻の二十終）

正史實傳　いろは文庫　巻之二十一

第四十一回

（這一回は第六編の上の巻と引合せて見給ふべし）偖もお民は兼松が夜討の引揚に出合うて、義士の輩に拯抱かれ、大鷲子葉の短冊と一包の金を貰ひしが、お民は我子を、誰とは知らず拔身の鑓を提げたる人がさらひ行きしと聞くよりも、狂氣のごとく駈けつけつゝ、詫びて我子を貰ひしことゆゑ、何者とも知らざりしが、跡にて段々噂を聞けば、鹽谷家の浪人が、高野の館へ討入つて、本意を遂げたる引揚と、慥に様子の知れしかば、偖は良夫湖平太どのも其うちに在せしならん、敵を討つて切腹するは侍のならひと聞けば、さら〳〵夫を歎きはせねど、息あるうちに今一目、逢つて餘波も惜しみたく、又二ツには兼松にも、那が和子の爺さんぞと、いうてお顔を見せ置かば、成長なつた後までも、心殘があるまいと、それより俄に駕を雇ひ、酒細へと急ぎつゝ、圓覺寺の門にいたり、鹽谷家の義士のうちに森湖平太といふ人あらば、竊に對面爲たきよし折入つて賴みしに、四十七人の其うちには、左様の人はなしと言ふにぞ、お民は忽地望を失ひ、すご〳〵歸る途々にて、速くも夜討の番附とて、義士の名前を書記せしを、聲々に賣歩くにぞ、お民は猶も殘惜しさに、若やと思ひ駕の中より、かの番附を買取りて、繰返しつゝ、諷下せど、森湖平太と云ふ名の見えねば、是にていよ〳〵力を落し、是非なく我家に立歸り、獨つく〴〵思ふやう、湖平太殿

の心だて、斯る時節にいたりなば、他より先に讐を討ち、忠義を顯はし給はんに、圓覺寺での答といひ、又番附の面と言ひ、更に森とも湖平太とも、見えぬは奈何なるゆゑならん、是にて思ひめぐらせば、別れて丁度三年越、風の音信も聞えぬは、もし本國へ歸りて後病死にてもなされしか、然らずば縱令忠義のために、妻子を捨てるがならひとて、此鎌倉に在しなば、最期の節は餘所ながらも、顏見せに來て下さんせうに、其事なきはいつしかに、世に亡人となられしかト思ひかねては樣々に、胸を痛むばかりにて、誰にたよりて此事を、聞く術もなき心の苦しさ、兎角する間に其年も、空しく暮れて立ちかへる、春とし言へど物おもふ、我身は秋の心地して、慰めかねて日を送れば、睦月も夢とはや過ぎて、時に如月初四日（義士の面々四家へ御預けのうへ、切腹仰付けられし日なり）此日は去年世を去りし、お民が母の一周忌の命日に當るにぞ、檀那寺の僧を招き、心ばかりの回向を賴み、日も暮れければ佛壇へ燈明を備へつゝ、宵まどひする兼松を、傍に寂かして只獨り、過ぎつる事など思出し、茫々として居る折しも「お民〳〵」ト門口にて、呼ぶはたしかに良夫の聲と、駭きながら手燭を灯し、門の戸明けて顏見合せ　民「オヤマア貴公、ト言つたばかり、跡は泪にさし迫るを、湖平太は何氣なく、奥へ通つて四邊を見まはし　湖「オ、稚兒奴は最う寐たな、偖永永の此年月、一度の音信も爲なんだに、不實な此身を怨みもせず、お老女の御介抱と、此稚兒めを育てる世話、なか〳〵大體ではなかつたらう、そしてお母公さんは御丈夫か　民「ハイ母公アはト言つたばかり、思はずワツと泣出せば　湖「コレサお民泣いて居ては事が分解ぬ、併し是まで氣を張詰めて居たのを、此身が歸つたので氣がゆるんだから、只歎しくなるのでもあらうから夫は道理だが、一通り樣子を聞かねば、此身も何樣やら安心しないが、其處で母公さんはどうぞなされたか、ト言はれて漸う顏をあげ　民「アノ母公は那所の佛樣の中に居りますヨト言ひかけて又むせかへれば、湖平太も驚きながら、佛壇の側へ立寄り、戒名と年月を讀下して眼をしばたゝき　湖「夫では母公さんは去年此月、しかも今日が其當日、寔においとしい事であつたノウ、併し一周忌の御命日に、思はず此身が歸つて來たも、やッぱり何かの因緣であらう、夫に就いても和女の心勞、此身の方からは音信をせず、母公さんは此お成行、殊には例の强八が、和女の弱みへつけこんで嘸因らせた事であらう　民「ハイ、母公アの亡死た跡は、那叔父さんが無理非道、そのうへ貴公のお身のうへ、お屋敷の大變からは、何樣なさッておいでなさるか、一度の音信も聞えないは、若もの事でもありはせぬかと、安い心は爲ましなんだに、御機嫌のよいお顏を見て、こんな嬉しい事はございません、ト咄半へ兼松が眼を覺して起直り　兼「母公ちやんお乳給べたい　民「オ、兼兒起き爲たか、是がお前のお爺ちやんだから、這所へ來てお辭儀をお爲、行儀の惡い事を云ふとお叱りだヨト母の言葉に兼松は、血筋の緣か嬉し氣に、わるびれもせず駈來るを、湖平太は膝に抱上げ、迫來る泪を笑に紛らし　湖「オ、大さう成長なつたの、中々途中なぞで逢つては見遂へさうだ、是からお爺さんが萬一居なくなつても、母公さんの言ふ事を聞くのだヨ　兼「アイ、言ふ事をきくかヤ、太刀やお鎗買つてお呉へヨ　湖「オ、買つて遣るとも〳〵、ドレ〳〵お膝の上へ立つて見せろ、ヤレ〳〵重くなつたぞ、是ではお乳を呑まうと言つては、些少をかしいのアハ、、、　民「ホホ、、、貴公お見遂へなさる筈でございます、此子が漸うつかまり立をする時分、お別れなすッたのでございますものを　ト言ふうち兼松は自分の持遊箱の中より、金の短冊を取出し　兼「兒、此間餘所のお仁ちやんに此樣な物貰つたヨト自慢さうに見するにぞ、湖平太は手に取つて短冊の面を見れば、山をぬく力も折れて松の雪、大鷲子葉ト記しあるにぞ、是は正しく大鷲文吾が討入の夜に鎚に付けしを、俺にも見せし短冊と、

おもへば今更口惜しく、忠義に二ツはなけれども、大星どの、差圖を守り、取殘されて期に合はぬは、この身の不運と言ひながら、思へば無念とわきかへる、親の心を夫ぞとも、知らぬが佛兼松が　兼「兒は此短冊をお鎧につけて、讐討の眞似を爲て遊ぶヨ　湖「ナニ讐討を爲て遊ぶとか、オ、〳〵出來す〳〵、手前は此身より餘程生れ勝つたものだノウ、トキニお民此短冊を兒が貰つたとは何樣いふ譯だか、此身にはとんと分解ないが、和女は定めて知つて居やうな　民「ハイ是は去年の暮、鹽谷樣の御浪人衆が、高野の第を引揚のとき、兒が途に遊んで居たのを、可愛い子だと抱きあげて、二三町も連れて往きましたから、私やア然言ふ譯とは知らず、素足で跡を追つかけて、漸うのおもひで取返し、住居へ歸つて見ましたら、此短冊と其他に、一包のお金を貰つて居りましたト言ひかけしがふッと氣がつき、俄に容を改めて　民「私は貴公が御機嫌よく、お歸んなすッたのが嬉しさに、心も付かずに居りましたが、何樣も私には合點がまゐりません、貴公はマア今日まで何所にお在なさいましたへ　湖「エ、ナニ此身か、オ、それ〳〵、アノ何に居たのサ　民「何にでは分解りません、併したらはぬ女の身で、此樣なことをまうしましたら出過ぎた口を利く奴だと、定めてお腹も立ちませうが、亡死つたお爺さんが、常々私へ申しますには、和女も侍の女房になる氣なら、忠孝が第一ぢや、侍は二君に仕へず、女は兩夫に見えずとは賢いお方の被仰つた事で、假令良夫が主人の爲に命を落す事があらうと、忠義ゆゑとあきらめて、他の男に身を任せず、生涯清く終るのが、良人へ貞節主人へ忠義、爾すれば親へも孝行ぢやと、幼稚いときに聞きましたのを、今に忘れは致しません、此冊兼松が短冊を貰つて參つたとき、鹽谷家の浪人が讐を討つた引揚と、人の噂に聞きましたから、貴公も定めて其中と、我と心で自慢して圓覺寺まで參つて聞けば、然いふ人はないとの答、もし夫ともにと辻賣の、番附まで買ひましても、貴公のお名がございませんから、夫では大かた本國で、御病死でもなされたか、嘸御無念であつたらうと、思ひつゞけて居りましたに、今宵貴公が何氣なく、お歸りなさッた其時には、日頃戀しい〳〵と、思ひ込んだ迷から、御機嫌のよいお顏を見て、只嬉しいと思ひましたは、私のたらはぬ故、貴公に限つて御主人の、御無念を餘所に見る思召はあるまいと、今日迄おもつて居りましたが、是には何ぞ又他に、深い仔細でもあつてかト問ひかけられて湖平太は、胸にギックリ燒鐵を押當てられし心地して、須臾言語もなかりけり。

第四十二回

案下湖平太思ふやう、驚き入つたるお民が赤心、人は性より育といへど、其諺に引きかへて、貧しき中に生立ちながら、昔を忘れぬ那女が本性、遠は里見の娘なれ、其美烈さを見るからは、我本心をもうち明けて、一世の別を報知せんかトロまで出しが、イヤ〳〵〳〵、思ひつめたる那女が顏色、今宵限の命ぞと、明白に言ふならば、倡に死なんと言ふは必定、さすれば不便や兼松は、誰を力に成長たん、白痴者になりおほせ、那女に愛想をつかさせて、術よく離別をするならば、我亡跡にて恨まうとも、那等二個が始終の爲、まだうら若きお民故、年月の立つうちには、去る者は日々に疎しと、終には他に身を寄せて、母子の者が行末は、世に出る事も有りぬべしと胸を定めて莞爾と笑ひ　湖「コッお民、和女は少し逢はないうちに、きつい野夫助になつたノウ、尤主人に忠を盡すは、侍の道とは言ふもの、、當世は夫ではゆかぬ、先さし當つた處で言へば、大星はじめ四十七人高野の屋敷へ討入つたのは、何樣やら立派なやうなれど、既に今日四

家において切腹仰付けられて見れば、言はずと知れた天下の咎人、お屋敷の騒動から、去年の極月の十四日まで、寐る目も寐ずに苦労した、とゞのつまりへ往つた所で、痛い腹を切らされてはつまらない咄さノ、其所を此身が考へたから、最初は大星に一味して讐を討たうと思つたが、中途から思案を替へて身の落付を尋ねた所が、天道人を殺さずで、さる田舎の大盡が、浪人の此身を聟養子に貰ひたいと言ふ相談だから、先の様子を聞いた處が、金は澤山あるうへに、娘の容貌が宜いと言ふから、早速返事をするのだけれども、一應は和女にも咄さないでは寐覚が悪いから、今夜態々來た譯だが、斯言つたら心持を悪くするか知らないけれど、和女だと言つて表向の女房ではなし、此身が他に女房を持つても言分はあるめへ、よしまた眞の女房にしろ、氣に入らなければ離縁をするといふ事も、世の中にない譯でもないから、何れにしても是迄の縁だと思つて呉れるがいゝと、斯言つたら兼松を連れて往けと言ふだらうが、和女だツて可愛い子を繼母の手にかけて、いぢめさせる氣もあるまいから、稚兒は此儘和女に遣るから、少し手足が伸びたなら、年季子位にでも出すがいゝ、夫でなくとも和女の容貌なら、一個ぐらゐの連子を爲ても隨分貰人があるだらうから、御勝手次第に御縁付きなさるがいゝト言はれてお民は興ざめ顔に、呆れて言話も出でざりしが、急度容を改めて　民「モシ湖平太さま、貴公はお氣でも遊ひさしたか、お家の大事を餘所に見て、逃躱れをなさるやうな、ふがいないお心とは、今日まで知らずに居りましたに、金持の聟になり、一生人に後指をさゝるゝのが御本意か、素よりたらはぬ私故、お氣に入らぬと被仰るのは、さら〳〵無理とはぞんじませんが、可憐さうに兼松に、年季奉公させろとは、宜くむごだうに言はれた事、貴公は天魔が魅入りしか、お情ないお心ト怨みつ泣きつかき口説くを、實に理と思へども、態とそしらぬ顔付にて　湖「偖々分解ない女ではあるぞ、敵討の一件は濟んで仕舞つた跡だから、今さら何と思つても、相手のない喧嘩もなるまい、是からは身の落付が肝要だ、和女も此身のやうな痩浪人にそつて居ては、互に自滅するばかりで、仕出したことにも往きは爲まい、夫だによつて此身は此身で身をかたづけ、和女は和女で相應な良人を持てば、互の僥倖と言ふものだ、今夜は寛々這所へ泊つて、積るはなしも爲て往きたいが、何分先を急ぐから、夜の中に鎌倉を立つて田舎へ返事に往かねばならない、其田舎も十里二十里、そんな手易い所なら宜いが里數もたしか十萬億度、さういふ遠い處で見るも、もう此世では逢はれまいから、隨分息災で兼松をトうちしをれしが氣を取直し　湖「邪魔なら他に呉れて遣れト心強くも身を起し、往かんとすれば兼松が　兼「アレお爺ちやん兒も一處に往きたいト取りつく我子に湖平太は、胸を裂かるゝ心地せしが、爰ぞ忠義と振りはなせば、忽地ワット泣出す兼松、お民も今はたまりかね　民「そりやあんまりなトすがりつくを　湖「ナニ爲やるぞト突きはなし　湖「是が手切ト何やらん、紙に封じゝ一包を、お民が目先へ投出し、後をも見ずして出往くを　民「アレマア待つてト駈出せど、四日の月ははや落ちて、黑白も別かぬ闇なれば、影さへ見えぬ良夫の行方、何國迄もと思へども、内には我子の泣入る聲に、心は二ツ身は一ツ、詮方なさに立戻り、泣く子を膝に抱きあぐれば、側に落ちたる以前の一封、手に取り見れば上書に、兼松が養育金並に書置と認めあるにぞ、お民は再びうち驚き、手速く封を押切れば、三十兩の金の他に一通の遺書あり、ひらき見れば其文に、

一筆殘し申し、我等事兼て大星氏と一味合體致し、亡君の讐高野殿をつけねらひ、既に去冬十四日義士の面々侶俱に、讐の門前迄は赴き候へども、由良之助殿の遠謀にて、萬一讐の親族方より、後詰の

人數を出され候ては、討手の難儀なれば、一ッには是に備へ、又二ッには、四十七人戰危く見え候はゞ、二の手を立てゝ討入るべし、若先隊にて本意を遂げなば各命を全う致し、亡君の御菩提を永く弔ひ申されよ、進むも退くも忠義に隔は候はず、後詰の備堅固ならねば、先隊の働き自由ならず、是第一の忠勤ぞと、一老の教訓默止がたく、相守り候うち、果して先隊は本意を遂げ、俺們は在るに甲斐なく、弱れども心は四十餘人に變るべくも候はねば、餘人は知らず我等においては、存命候所存曾てこれなく、本望は俱に致さず候へども、死は俱にせんと思込み候へば、今日四十餘人の面々切腹と承り、我等事も御菩提所圓覺寺において切腹を遂げ申し、そもじどの御事は、何卒良家に再緣致し、吳々も兼松が事賴み入り申し、此金子三十兩は大星氏より討入の用意に配分致され候へども、最早要なき金子ゆゑ兼松にあたへ申し候、其元預り養育の足にも致されべく候、若し突詰候心より自害など致され候はゞ、此うへの怨にぞんじ候、申殘し候事

只是のみに候しもし

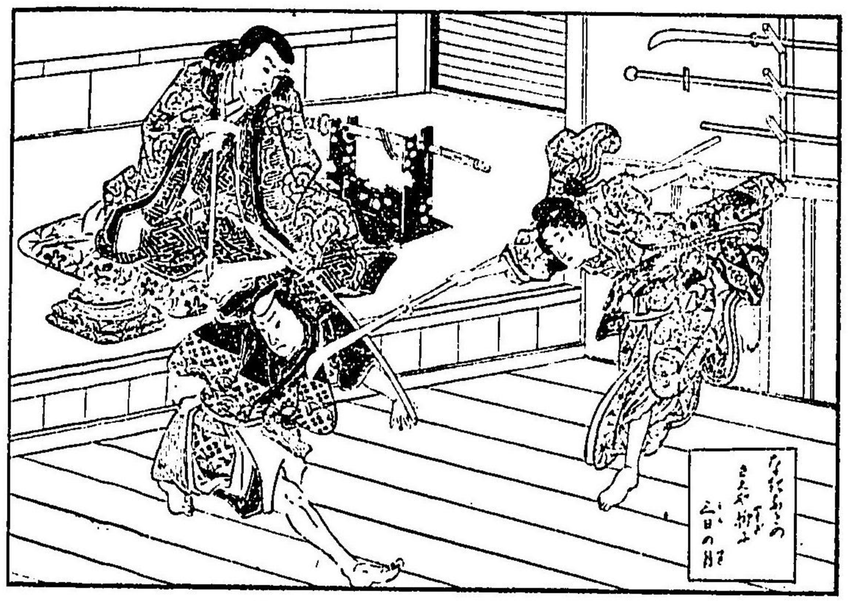
森湖平太

おたみどのへ

お民は始終を讀下し、略と一聲叫びしが、何おもひけん兼松を肌にしッかと抱き込み、身輕に帶を引きしめて、親の讓の短刀と、湖平太が遺書を携へながら駈出せば、叫びし聲と此物音に近所の人々起出て、お民が樣子の只ならぬに驚きながら問ひ寄るを、答へもやらず止むる人を押退け振切り、一さんに南の方へと心ざし、息を限りに走行きける。

作者曰く、湖平太お民が全傳は這編中にて綴り果てんと、豫ては腹稿しに、言語餘つて丁數盡きたり、因て姑く筆を止め、第八編の卷端にて、其終身を全からしめ、且なほ自餘の義士の別傳いまだ江湖に專らせざるを考正して編出し勸懲の一助と做せば、看官高評を給へと言ふ。

（卷の二十一終）



いろは文庫第八編序

聞くまでのひと夜は長し郭公

這は予が舊友、稻の家美津喜ぬしの詠にして、今編の出版を待詫びしとの一章なり、斯くは愛顧を蒙るものから、素より不學の筆鈍く、外題の名におふいろは文字に、寫しおきたる舊記をば、文庫の底より選出し、抄錄做したるまでにして、初音めかせど時鳥、八千八事も追々に、著述し、其中で、一事なりとも看官の、御目に止らば僥倖と、阿民湖平太が全傳を、この輯中にて編果てつ、更に大星延清が、外傳をなん説發し、續いて自餘の義士のうへを、綴り次ぐべき腹稿あれば、猶山鳥のながゝしくとも、團圓ときまで相替らず、いよ〳〵笑覽を願ふにこそ。

梅も櫻も青葉して
かの一こゑの待たるゝ夜

爲永春水誌

第四十三回

其宵もいつか小夜更けて、星もまばらにかき曇り、空さへ暗き雨催ひ、折しも來かゝる一個の男、四邊うろ〳〵見まはしながら、歩みよりつゝ向より息せき駈來る辻駕に、行當りつゝへらず口　男「エ、氣の利かねへ駕屋ぢやアねへか、目を明けて通りやアがれへト言捨てゝ行かんとするを、駕の中なる客人が挑灯の火にすかし見て　客「コウ、そこへ往くなア强八ぢやアねへか

客「コレサ、若旦那かでもあるめへぢやアねへか、何にしろ咄があるからト言ひながら駕をおろさせて、中より立ちいで　客「コウ駕屋、濱の宿までと頼んだけれども、些此男に用があるから、爰切りで歸つて呉んねへ、是で酒代もあるだらうト包みし金を渡すにぞ　駕「へ、、、是は毎度有難うございます、左樣ならばお靜にト言ひつゝ駕屋は戻りゆく、跡見送りて强八が　强「モシ若旦那、仇九郎さま、今夜ア些氣のせく事がありやすから、私へのお咄なら、何卒明日のことにはなりやすめへかネ　仇「コレサ、また株を言出すせ、何時でも手前に逢ふ度に、ヤレ明日だの明後日だのと、解らねへ返事ばかり、人を馬鹿にするも程があらアな、長い咄をするでもねへが、自己も元は鹽谷の家老矢居曳右衛門が獨息子、なに不足のねへ身の上も、一昨年主家の大變から、親父も自己も浪人したが、忠臣は二君に事へず、貞女兩夫にまみえずとか、

子曰にはあるだらうが、欲得づくなら二君はおろか、三人五人の主取も爲めへものぢやアねへけれども、差當つて宜い口もなく、其處で親子が相談して、今では八谷の新宿で、手前も知つてのあの商賣、ところが親父がやかましやだから、女房も持たねへ仕儀ヨ、夫に就いて頼んだのは手前の姪のお民が事、那女は自己が屋敷に居るとき、森湖平太といふ奴が淺房近所に囲つて置いて、子まで出來たといふことを人の噂に聞いたから、勤番者の其癖に、熟くするなと思つたばかり、氣にも留めずに居たところが、自己が浪人した當座、苦形堂の此方で、ふいと見かけた中年増、身なりはやつれ果しても、恂りする程美しい容貌にぐツとはまりこみ、段々様子を聞いて見れば、那湖平太が其以前、囲つた娘が其女で、今ぢやアさツぱり便もなく、強八といふ叔父の世話で、暮して居るとのことなれば、夫からおぬしに手を入れて、頼めば直に安請合、あの〳〵ものゝと言ひかけて、五兩三兩渡したのも、度々なれば積つたら、些の金でもあるめへぜ、夫だけ譯をつけて置き、さアお民はといふときは、早晩でも返事はお定まり、一寸逝れに三年越し、引きづられちやア了簡ならねへ、全體初手から薄のろく、出たのが這方の見そこなひ、成らう事なら愛敬を、失ふめへとは思つたけれども、小馬鹿まはしに込められちやア、男ばかりか懐の勘定づくが立ちかねらア、お民の事が出來ねへなら、是まで渡した金の高、一厘一毛踟躕なく、耳を揃へて今返せ、さア何様する　強「なるほどお腹も立ちやせうが、那お民めが強性には私もあぐみ果てやしト腹立聲、強八は額を撫で

た、併し今夜ア那女の事で、ちつと耳寄な事を聞出しやしたから、夫で氣がせいてなりやせん、何れ明日はどつちの道、お前さんのお貌の立つやうに爲やすから、今夜のところは何分にも　仇「御勘辨をといふのだらうが、其言譯も聞倦きた、さうして耳寄な事といふなア、大方他に旦那でも出來懸つて、那女を世話にてもさせやうといふ山事があるのだらう、あんまり呆れて物が言はれねへやア　強「モシ、お前さんも胸障なことを被仰るものだネ、そんなに惡推をおきはしなさるなら、念晴しに今夜の理窟をお咄しまうしやせう、實は斯いふ譯合さト四邊見まはし耳に口　強「ネ、ネ、何と解りやしたらう　仇「フウ、夫ぢやア那湖平太がお民の住居へ忍んで來て、言つた事をば何もかも　強「すツぱり門で立聞いたから、先へ廻つてお民めが、湖平太の跡を追ひ圓覺寺へ往く途中に待伏せ、兼松が養育金にと遣して往つた三十兩を奪取やうといふ魂膽、斯いふうちにもお民めが、そろ〳〵其處等へ來るかも知れねへ、氣のせく譯は此通り、何卒今夜のところをば　仇「なるほど然いふ理窟なら、まんざら野暮もいふめへが、夫に就いて自己もまた、おぬしに些咄がありやす、今聞きやア湖平太は、今夜圓覺寺の墓場へ往つて腹を切つて死ぬぢやアねへか、さうして見ると那お民は、此先便のねへ身のうへ、其處等の處から持込んで、口說落りといふやうな、何と理窟はあるめへかの　強「そりやア被仰る事だけれども、並々の女なら隨分其手で往きやせうが、是迄三年越しといふもの脅したり賺したり、手のこつぽうを摺つてせへ、思ふやうにはならねへ婦女、今其亭主が腹を切つて死なうとする場合だものを、自己も同樣に死ぬ覺悟で、住居を出たには違ねへ、それを彼是言つたところが、迚も咄はおつ付きやせん、お前さんも男だらう、一旦斯と思つた女を、思もとげずに仕舞つちやア口惜いのも其筈サ、私もまたお前さんから那程までに頼まれて、出させた金も有る譯だから、此まんまでは濟されねへ、毒を喰はゞ皿までだア、寧のくされお民めが、今にも爰へ來たならば、この暗まぎれを幸に、無理往生にひつつらまへ、思をおはらしなせへやし、さうしたうへで遠國へ連れて行つて、遊女に賣つても年一ぱいの身の代なら、まんざら野暮でもありやすめへ、さうかういふうち向から、あれ〳〵人の來る足

音、大かたお民に違はあるめへ、此邊へ忍んで斯してト囁き示せば、仇九郎も白者なればうち點頭き、俱に小蔭に立躲れて、埋伏するとも毫知らぬ、お民は網に湖平太が、かの遺言にうち駭き、良夫の赤心知るうへは、息ある中に今一目、逢うて言ひたいこともあり、最期の程をも見まほしと、家のうちをば駈出せしが、四日の月ははや入りて、空さへいとゞ曇り勝、足元とても見え分かぬ、馴れぬ夜道も女の一念、心一ツを勵ましつゝ、南をさしてゆく程に、更行く風の肌寒く、脊中へ入れし兼松が眠りもやらで泣出すを、ゆりあげながら母親が　民「オ、寒からうノウ、今にもう些往くとお父さんのおいでのところだから、おとなしく脊中へ推付いて居るのだヨ　兼「坊強いから泣きはちないヨ、其替りお父ちやん處へ往つたら差してお在の脇差を貰つてお呉へヨ　民「オ、貰つて遣ることは遣るけれど、あの脇差でお父さんはト跡言ひさしてせきあぐる、泪と共にさし込む癪、ウント一聲伏しまろべば　兼「アレなにを泣くのだへ、坊おとなちくしゆから早くお父ちやん處へ連れて往つてお呉へヨウ、ト脊負はれながら首さし伸べ、母の泣顔覗く子は、死に往きたる父親を、知らで案じる心根を、思へばいとゞ悲しさと、又苦しさに稍須臾、起きもあがらで居たりしが、恁ては良夫の息のうちに、追付く事もなりがたしと、癪をおさへ脊の子を、すかしながらに立ちあがり、我と心を勵ましつゝ、一町行きては息をつき、二町行きては胸を撫で、歩み〳〵て道の程、はや二里ばかりも來りしが、まだ其頃は鎌倉も、繁華ながらも家並の、今のごとくに揃はねば、此邊は人家も絶果て、茂き木立と高草の生茂りたるのみなるに、眞夜中なれば行通ふ、人足さへもあらざれば、心細さも嘸ならんを、良夫の一生懸命と、思へば怖さもうち忘れ、猶も往かんとする折しも、小蔭を出る以前の强八、お民の前へ踏みはだかり　强「ヤイ、この婦ア見かけに寄らねへ大膽事を爲やアがるな、常々自己が待ちこがれてのろくなつて居る野郎が先刻忍んで來たことを、ちらりと我が見付けたから、今夜アてツきり欠落と、白眼んで跡から付けて來た、是まで母子を喰はせて置いた其勘定を立ても爲ねへで、此生馬の目を拔いて、づゐとくじを遣られちやア、强八樣の腮が干らア、幸今夜手前をば、世話を爲て遣らうと被仰る旦那も一處にござつたから、是非其方へ遣らにやアならねへ、夫に就けても邪魔な小坊主、小兒奴は我が預るト駭くお民を推居ゑて、脊中に入れたる兼松を、抱取るはづみに手にさはる、財布を俱に引出せば、アレマア待つてとすがりつく、お民の後へ仇九郎が拔足爲つゝ、忍びより、抱きつかれて又恟り、コリヤ何事といひながら、ふりはなさんにも男の力、詮術もなく見えにける。

第四十四回

當下强八さし寄つて　强「コウお民、今も言つて聞かせた通り、これまで喰はせて置いたのも、其處にござる旦那から調賦で貰つたお蔭だア、それだによつて先頃ッから、旦那のお世話になれ〳〵と、口を酸くして那程まで、割ッつ口說きつ勸めても、得心爲ねへのみならず、自己が勝手に駈出されちやア、第一旦那へ我が濟まねへ、今から心を切替へて、旦那のお世話になるならよし、まだこの上にも性を張りやア、旦那への言譯に、此兼松めを捫り殺すぞ、ハテ殺したとて我が甥、何處から點の打人もあるめへ、返事が遲いと斯するぞト泣叫ぶ兼松を小脇にしッかと搔抱き、榮螺の如き拳を堅め、打たんとするに堪りかね　民「叔父さんそりやアあんまりな、私が今夜駈出したは、欠落どころの事ではない、湖平太さんのお命の、終らぬうちにと氣のせく途中、その子を奪ひ財布まで、手込にかけて取るのみか、つひぞ見馴れぬ此人に、世話になれ

とは何事ぞ、其子は遣らぬ殺させぬト走り寄らんと身をもがくを、猶もしッかり抱きすくめ　仇「コレサ、おぬしも野暮な者だゼ、是程までに思つて居る我の心にしたがへば可愛いお主の子だものを、敵たせて無言て見て居るものか、那子を不便と思ふなら後ともいはず今爰で、何様して呉れるト引寄せれば、お民はあまりの口惜さに、跡先思はぬ必死の覺悟、かねて準備の短刀を、抱かれながらも引きぬきて、最う此上はト言ひつゝも、突いてかゝるを仇九郎は、刄の光に身をかはし、その手を取つて捻ぢあげつゝ、難なく白刄をもぎはなし　仇「得心させてと種々に、和語く言ふ程つけあがり、女の癖に刄物ざんまい、斯なるからは這方もるこぢト手込になさんとする折しも、木立の陰に立忍びて、最前よりの有様を、殘らず洩聞く一個の武士、あまりの事に見かねてや、をどり出でつゝ、仇九郎が襟がみ摑んで引起し、どうと投出す拳のはたらき、夫と見るより强八は、小脇にかゝへし兼松を、其儘其處へ打捨て、腰に準備の長刀を、拔く手するどく砍りかゝるを、彼武士は事ともせず、那處這處しばし遣違はして、持ちたる刄を蹴落しつゝ、胸ぐら取つて引居うれば、這方に倒れし仇九郎が、落ちたる刄を拾ひとり、物をもいはず後より、打つてかゝるを引外し、また突きかくるを身をさけて、利腕しッかと取りとめつゝ、右と左に惡漢を引付けながらに冷笑ひ

武士「汝等かゝる往來にて、女子をとらへて無法の段々、二個ともに搦捕り急度懲議もする奴なれど、我とて事を好むにあらねば、品に寄つては用捨も致さう、汝等命を惜しく思はゞ、奪取りたる財布の金を先此女中へ返せしうへ、非義非道のわびいたせ、爾なくば決して許さじト言はれて强八苦しげに　强「そんなにきつく締められちやア、息がつまつて物が言はれぬ、金も命があつてのうへ、惜しいものだが三十兩、返して遣るはト投出す財布、武士は見てお民にむかひ　武士「女中定めて驚きつらん、怪我がなくして先は重畳、取返したる其財布、中改めて請取られよトいふにお民は嬉しさと、辱さに手をあはせ　民「側國のお方かぞんじませんが、危いところを此樣に御救ひなさつて下さるとは、何とお禮をまうさうやら、私事は淺房遊に幽に暮して居りまする、賤しい者ではございますれど、良夫と賴むその人は、鹽谷樣の御浪人で森湖平太と喚ばるゝ人、大星さまの御内意にて、討入の夜は加はらねど、四十七士の方々に、忠義の心は爭でか劣らん、今日彼義士の人々に切腹仰付けらるれば、假令主君の讐は討たでも、おくれを取らぬこゝろざしを、死して主君に報知まゐらせんと、今宵圓覺寺に赴きつゝ、切腹なして相果つると言ふ此遺書にうち駭き、命のうちに今一度這世の名殘ををしまんと息せき駈來る途中にて、此人達の手込に合ひ、思も遂げぬのみならず、身も穢されんとせしところを、貴君のお蔭で恙なき、母子の者が怡は何に譬へんやうもなし、斯いふうちも良夫の命、如何あらんか氣遣はし、何卒貴君のお名前をお聞かせ被成て私をば、此儘お許しくださらば、良夫に一ト目逢うたうへ、今宵のお禮はお屋敷へトいふに此方はおどろきて　武「偖は女中は鹽谷の御家來森氏の内室とな、此度義士の面々の世に比なき忠心は、適れ武士の鋭にて最羨ましく存せしが、夫にもさら〳〵劣なき、湖平太殿の眞忠義心、其内室の和女に料らず逢ひしは武士の面目、拙者事は何某が藩中小織左膳と喚ばるゝ者、以後はお見知り被下べし、夫に就きても湖平太どのゝ、最期に逢はんとせらるゝならば、心の急迫は理ながら、女中の足にて酒繩まで、走り着かんは覺束なし、某ぞんずる旨あれば、姑く我等に任されよト言ひつゝ這方の二個に對ひ　武「汝等命も取る奴なれども、今我言葉に從はゞ聊用捨致して取らせん、いよ〳〵命を惜むなら、仇九郎は女中を脊負ひ、又强八は稚兒を大切にかき抱き、我と一處に酒繩なる圓覺寺まで供いたせ、若少しにても疎略あらば、二個が命なるべき

ぞト言はれて否ともいひがたく、嬶てお民と兼松を、仇九郎と強八が脊中におぶひ肌に抱き、はじめの勢引替へて、阿容〳〵として先に立てば、左膳は是を追立て〳〵、すでにして圓覺寺の大門まで來りしかば、お民は速くも脊中を下りて、かの兼松を抱き取れば、強八と仇九郎は思はず一息ホットつき、跡をも見ずに逃行くにぞ、左膳は寺門をうち敲き　左「火急の事にて參りたれば、役僧がたにお目にかゝらん、先此門を明けられよトいふに門番眼を覺し、格子窓より顔さし出し　門番「今夜は少し仔細あつて、何樣いふお人がござつても、必ず門を明けるなと、番僧方から嚴しい言付、用があらば翌日ござれ、葬禮ならば貫もあれど、錢三文にもならない事に、度々今夜は起されて、此寒い夜を寐かしも爲ねへ、ヤレうるさやと口小言、すげなく窓を引きたてるを、左膳は猶もおし返し　左「番僧の言付で明けぬとならば是非もなし、然らば問ひたき事のあり、今宵鹽谷の浪人にて森湖平太といふ者が此寺へは見えざりしか　門番「されば、その湖平太が今より二時程以前、火急の用事で庫裏まで通ると、熟く欺して門を明けさせ、鹽谷殿の墓の前で、腹を切つて死んだゆゑ、寺の内は大騒ぎ、それだによつて又他から、腹でも切りに來る人があつてはならぬと、番僧が嚴しく私へ言付けて、六時が鳴らねば明けさせぬト聞くに駭く左膳より、お民は身もよもあられぬ思、ワット一聲ひれ伏して、生體もなきありさまは、哀れにも又道理なる。

恁て小織左膳は門番を種々と諭し、かの番僧を呼出して猶も仔細を尋ねしうへ、お民が事をも報げしかば、由緣の者とあるからはとて、漸う門を開かせしにぞ、お民は墓所に赴きて、良夫の死骸に抱き付き、返らぬ事など繰りかへす、愁歎もさぞなるべけれども、くだ〳〵しければ爰に漏しつ、看官よろしく推すべし、其時お民が心では、おなじ道にも消果てたきを、那遺書に思返して、其場にて髮を切り、良夫の骸と倡俱に圓覺寺の中に葬りて、跡念比にぞ弔ひける、斯て後左膳が主人何某侯より兼松を召され、初は扶持など賜はりしが、成長のうへ家臣にせられ、再び森の家名を立てしは、左膳が取持なりとはいへども、是併しながら湖平太とお民が忠節故ならんと、其頃噂したりとなん。

（卷の二十二終）

正史實傳 いろは文庫 巻之二十三

第四十五回

爰に大星清左衛門と喚ばるゝは、近江の國司佐々木姓の家來なりしが、後に鹽谷家に懇望せられて、終に高貞の臣となり、又是義士の一個なり、始め近江にありし頃は、百二十石賜はりて使番を勤めしが、兩親ともに世を去りて、いまだ妻さへむかへざるに、清左衛門は生得正直無慾の人なれば、世帶向の事などには、聊心をとめざる故其家究めて貧しけれども、夫等の事は苦にも思はず、小丁稚一個を召仕ひ、是に勝手の事を任せて、其身は明暮武道にのみ心を盡して居たりしが、折しも年の終とて、世間は煤取餅搗なんど、春のまうけの賑しけれども、清左衛門はそれさへ構はず、破障子に破蠶、切張ひとつ爲るでもなく、安然として居る程に、はや大晦日になりぬれば、大勢の掛取が臺所せましと居並びて　掛取「へイ旦那さま、當年は盆から少しも頂きませず、當季は何分お拂を、へイ〳〵お願ひ申上げます　清「いかさま長々迷惑をかけて、近頃氣の毒千萬だが、我も武器の入用で、是まで追々勘定方の役人から内借をいたした故か、當節季の物成は格別もないやうだといひつゝ、這方を見かへりて　清「コレ惣七（これは此家の召仕なるべし）此間うけ取つた御藏前の渡り金が、挾箱の中にあるであらう、夫を殘らず持つて來て、掛取どもに渡すがよいといふに丁稚は心得て、有丈の金と錢を挾箱の蓋に乘せ、主人の前にさし出せば　清「サア〳〵掛取ども、遠慮はないからみんなが受へすゝみ出て、此金をよいやうに配分をして取つて呉りやれ、大かた是では不足であらうが、足らない所は此後に物成を頂藏するまで用捨を賴むト言つたばかり、幾兩あるやらかの金を其儘先へおし遣れば、掛取どもは手をもち〳〵　掛「へイ、旦那さまへ申上げます、此間御勘定の御書付をさし上げてございますから、何卒貴君さまから、銘々にお渡し被成て下さいませねば、何樣も手込に頂きます事は　清「ハテ苦しうないは、銘々に遣る程あれば何も仔細はない事だが、何れ不足と思ふから、皆の者でよいやうに分合せて返るがよいはサ　掛「左樣にまで被仰る事なら、まづ此お金の高を拜見致すでございませうト件の金の數改め　掛「是は七兩三分と、錢で壹貫三百六十三文にございます　清「何樣でも宜いは、持つて往きやれ　掛「イエ、左樣でもございませうが、御不禮ながらお物なりは最う是切でございますか　清「いかにも、只今出させた他には、身に貯とまうしては、はや一錢も所持いたさぬハ、ハトうち笑ひ、貧苦を少しも氣に懸けず有丈の金子をば差出したる潔白に、掛取どもは顏見あはせ、何と應へもならざりしが、中にも米屋が進み出で　米「皆の衆、那を聞かしやッたか、町人の心と違ひ、御武家樣の思召は又格別なものではないか、先和主衆のお拂ひ高をざッと積つて見たうへで、また相談もあるだらう、さア誰からでも言はッしやいト十六艘取つてはじき懸れば　まき屋「エ、私のは炭薪で壹兩二分と五貫八百十六文　米「おつとよし〳〵　酒屋「私の方は酒醤油味噌鹽油一式で十三貫二百七十三文、金に直すと斯だから、きッちり二兩と爲て置きやせう　しちや「扨私のは勘定が些込入つて居りますが、お流になる口の利足が百三拾五匁六分、其處で、此間差上げましたお社祢と、お熨斗目をお返しになりますればお利分で濟みますが、お出切になるときは、元利で壹兩と十二匁、都合壹兩と百四十七匁六分と相なります

ふるて屋「手前かたの〆高が、去年からの引殘を入れて五兩壹分と三匁　さかなや「お肴の掛が壹貫六百八十文　やほや「青物で五百と二十　ぱゞ「扨角ッこに居りますのが洗濯屋の婆めでございます、日外旦那の御不斷召と、おみ袷の洗張、又男衆の布子の仕立、据廻も足し、紬も私の方で買つて置けと被仰付でございますから、殘らずの御勘定が大枚二朱と十六文　米屋「さア〳〵是で濟んだかネ、ト十六盤の玉をあちこち遣りて　米屋「エ、トお前方の〆高が金九兩三分二朱と銀で百五十匁六分と錢が八貫と三十六文、これに私のお拂を四兩壹分と入れて見ると、ざつと十八兩ばかりになりやす、其處へ七兩三分と壹貫三百六十三文のお物成を配分したところが、半金にも足りない譯だが、爰にひとつの咄がありやす、假令六兩でも七兩でも、旦那がお頂戴のお金を、一文も殘さないで持つて往けと被仰る思召が有難いから、半金には不足だが、此お金を配分して、當季のところは濟せやうといふところだが、さう爲て仕舞ふと正月になるといふのに、旦那の御小遣が三文なくッても濟むめへぢやアあるまいか、夫にまだ餅もお搗きなすッた御樣子もなし、門松も立つて居ねへでは、元日にもなられめへ、皆の衆の心は知らねへが、此身が思ふところでは、七兩三分の金のうちを、二分が旦那のお小遣、壹分で餅を搗かせやす、扨門松と注連飾、數の子が一袋に鹽引の鮭の一本もあつたら、正月は出來るであらう、是をざつと壹分引くはサ、夫から肴やさんと八百屋さんと洗濯婆さんの掛は、高が低いから此身等と一所にはなりやすめへ、是は殘らず拂切つて殘金の六兩二分許を、古手屋さんをはじめ此身等が五人で戴いては何樣であらうネエ　まきや「なる程米屋さんの言はれる通り、旦那はあゝいふ結構なお方だからノウ質屋さん　しちや「さうとも〳〵、御自分の事は些もお拂ひ被成ないで、此身どもに持つて行けと被仰るのだから、些たア遣方からお小遣位は氣を付けて進げるが宜いノサ、へイ〳〵旦那さま、只今御聞き遊ばす通り、お金を配當いたしまして有りがたうございます、此上何なりとも御入用のお品もございますなら、御預りの内からお間に合せますでございませうふるてや「手前方へも御用もございます事なら、お拂の義は何れにも差繰りまして、隨分と御恰好なお品を御覽に入れますやうにいたしませう　さかや「旦那は御酒は呑らないが、屠蘇酒は態とはなくばなるまい、後程までに宿から持たせて進げませう　やほや「お雑煮の菜や鰒の大根は、小僧どん此身が店へとりにござらッしやい　米や「左樣ならば旦那さま、此二百疋はさし上げます、跡二百疋が御餅と諸入用、是は小僧どのに預けて置きませう、扨いたゞきましたお金高面々お請取にいたして御覽に入れませう　清「イヤ、おの〳〵の信志は別して辱いが、拂方にも不足の金子を、箇樣に致して呉れてはいよ〳〵氣の毒ぢや、心配なしに取つて呉りやれ　米や「イエ〳〵、夫では私どもが家業に對して濟みませんから、それはお納め被下まし　「コト殘りし金を分取つて、おの〳〵受取の書付をしたゝめてさし出せば、中にも薪屋は四邊を見廻し　「コウ小僧どん、御玄關からお座敷まで、大分お障子が破れたやうだ、新しい紙と言つても今一寸仕方がないが、此身の持つて居る帳面の尻に、白いところが餘程あるから、これで切張でもするが宜い、ナニ粘をこしらへるのが面倒だ、貴樣も旦那の御家來丈、不性な事を言つたものだ、即飯を練つても知れたものだ、今日が大晦日でないものなら、此身が張つても進せるけれども、目が廻る程いそがしいから、切張までは手が屆かない、せめて穴でもふさいであると、御年始のお客樣のお見懸が宜いぢやアないか、それ〳〵紙は爰へ置くト帳面の尻紙を外して丁稚に渡しつゝ、猶跡々の事なンど、入らぬ世話までやきちらし、皆うち連れて出行きしは、只一向に見る時には、白癡し事のやうなれども、義理には慾をうち忘るゝ、是等が御國

魂なるべし。

第四十六回

恁て其年の大晦日は、掛取どもの世話になり、安々と春を迎へて、正月もはや中旬になりしが、或日大星が同役なる、笹浪志賀蔵といへる者久しぶりにて來りしかば、清左衛門は一ト間へ誘ひ、四方山の物語など姑く時を移す程に　志賀蔵「イヤトキニ大星氏、如何な事を承るやうだが、御自分様も米屋市兵衛方から飯米をお入れさせなさるかな　清「左様サ、彼は年來出入をさせますが、何ぞ仔細でも　志賀「イヤ、その市兵衛事について些お咄がありますが、貴公様は何と御妻女をお貰ひなさる思召はござるまいか　清「是はまた何事かと存じたら、御信切のおすゝめ、千萬辱うございます、何れにいたせ獨身では居られますまいから、相應なものもある事ならと思つては居りますが、それを市兵衛がどうぞ致した譯かネ　志賀「然ればサ、那者は我等方へも別懇に出入をいたしますが、此間參つてまうすには、那大星様は寔に結構な旦那でございますが、惜しい事には御勝手向が御不都合の御様子、夫と申すが御獨身ゆゑ、何事もお費が大いと察はれますから、何卒御内室さまをとぞんじましても、那物堅い旦那だから、私からは言出しにくい、何様か貴君の御口からおすゝめ被成て御覽じてはと、思入つてまうしますゆゑ、私も其許さまとは御同役とまうし、殊には格別御心易く致すなか、何卒御相應な御縁女もあるなら、お世話をもいたしたいと思つて居るところなれば、なる程其方のまうす處理に聞えるが、然して誰ぞ心當りの女中でもあるのかとまうしたら、爾ればでございます、大星様の御内室には、並々の女ではなか〳〵お氣には入りますまい、其處で種種尋ねましたが、幸當國堅田の郷士に淺田藤内といふ人の娘、歳は十七で容貌も美く、仕度も相應にあるとの事でございますが、其藤内といふ人が武術の達人で、娘御にも幼稚ときから薙刀を教込んだ所が、今ぢやア親公にも負けない遣人になつたといふことでございます、其處で親公の言はれるには、假令先は困窮でも、娘と立合つて打勝つ程の男をば、聟に爲やうと言はれるさうでございますから、娘御の容貌を見込に、我も〳〵と名乘つて往つて、聟にならうとする所が、幾人往つても打負けて、まだ縁付かずに居るとまうす事でございます、高くはまうされませんが、這方の御家中様からも、お二個ばかり立合に御出のお方もあつたさうでございますが、其方も負けてお歸ん被成たと薄々承りました、夫丈手利の娘御でも、那旦那の御手の内なら、何の造作もあるまいと察はれますから、夫で御縁が結ばれば、寔に一對の御夫婦と思はれますが、是は奈何でございませうと申しますから、私も幸の御縁とぞんじた故、實は其事で參つた譯サ　清「ハテネ夫は珍らしいお咄でございます、縁談の事は兎も角も、娘に夫だけ薙刀を仕込んだ藤内とやらの武術の程、嘸かしと思はれますすれば、私事も御存知の通り、武道は執心の譯故、何卒知己にでもなつて置きたいものでございます　志賀「然言ふ思召なら市兵衛を呼んで、猶また先の様子を委しく承つたうへで、近日御沙汰を致しませうト其日は別れて歸りしが、恁て五六日程すぎて、志賀蔵は再び來り、先へも段々咄せしところ、明日御出あるやうにと市兵衛より申越せば、某も早朝より御同道致さんトいふにぞ、清左衛門も承知のよしにて、次の日兩個うち連立ちて淺田藤内かたへ赴けば、豫て言入れたる事故、一間の中を揉拂ひて爰に二個を通しつゝ、軈て主の藤内も出て對面する程に、これかれの挨拶など辭ずくなに終りて後、志賀蔵すこし座をすゝみて　志賀「此程米屋市兵衛より申入れたることにつ

き、是なる大星清左衛門に委細まうし聞かせし處、御縁の義は兎も角も、尊公の御武道に御鍛錬なるを聞き何卒おん目に懸りたしとて、則ち同道仕りし ト言ふに藤内うち笑ひて　藤「是は又思ひ寄らぬ其お言語、拙者も武道は好きますれど、世にいふ下手の横好とやら、併しながら娘には何卒武道の心懸のある男が持たせて遣りたいと、娘の不都束は餘所にして、聟を選むも烏滸がましいと、定めて人は笑ひませう、夫はさし置き大星氏には武術御執心と 承りましたが、お一手拜見はなりますまいかな　清「イヤナニ、拙者も人並らしく武道の事は論じますが、業はなか〳〵出來ませぬ、とはいへ何も修行でございますれば、仰にしたがひ、御教諭をも蒙りたい義でございます　藤「是は〳〵痛入つた其仰、私事もお相手にと申したい處なれど、年老いて行歩も叶はず、未熟ではございますれど、娘と一太刀お手合をトいふに側から志賀藏が　しが「なる程其義も市兵衛から 承つて居りますれば、いざ大星氏、御息女と一試合いたされよトすゝめられて否とも言はれず、素より物にとんぢやくせぬ生得ゆゑ、清左衛門は主の辭に隨ひしかば、藤内も欣びて、廳て稽古場へ伴ひつゝ、娘にも仕度させ、試合の場所へ連來り、かの兩個に引合せて　藤「是が則ち手前の娘、名を綾と呼びまして田舍育の我儘者、お目懸けられてト言ふ程に、清左衛門も志賀藏も、お綾も俱に初對面の挨拶も終りしかば、藤内は若黨に白木作の薙刀と、おなじ木太刀を取り出させ、程よき處に組合させて、卒勝負をとの辭のしたより、清左衛門とお綾とは一禮なしつゝ立對ひ、這方は上段、彼方は下段、じり〳〵と詰寄せつゝ、互に透を窺ふ程に、お綾は顏さへ姿さへ最優しきに引替へて、自然と備はる身の搆に、清左衛門は竊に駭き、侮りがたしと思ひしかど、たかの知れたる處女の痩腕、何程のこともあるべきかと、ヤット懸けたる聲倡俱に、眞向目がけて打込む太刀を、お綾ははツしと受けとゞめ、裾を拂ふをかひくゞる、飛蝶のごとき働に、武術手練の清左衛門も、爭でか及ぶ事を得ん、未十合にいたらずして、お綾が爲に打ちまくられ、終には負におよびしかば、志賀藏は市兵衛がよしなき言葉を取持して、かゝる不覺をとらせしを最氣の毒には思へども、今更に詮方なく、暇乞さへそこ〳〵に、清左衛門を引連れて屋形へ歸る道々も、是等の事を詫しけれども、清左衛門は打負けしを些のみ恥とも思ふ色なく、不思議の處女もあるものかなと、お綾が手並を譽めけるが、夫に就きても清左衛門は其身の未熟を深く歎き、廳て一通の願書を認めさし出す其文面には、

私儀此程、堅田の郷士淺田藤内娘綾と申候者と、武術の試合仕候處、存外に打負け不覺を取候段、全く不鍛錬故と口惜しき次第に御座候、夫に付恐入候願上事に御座候へども、只今より三ヶ年の間、御暇被下置候はゞ、心ざす方にて修行致し、有がたき義と存し奉り候、此段御上向よしに御執成、偏に賴上奉り候、以上。

月　日

諸士頭衆中

斯の通りに願ひしかば、諸士頭より家老の手を經て、主君の前にさし出せば、主君佐々木何某殿にも件の願書を見そなはし、こは珍らしき願なり、我兼てより清左衛門を麁忽者ぞと思ひしが、並々の者ならば、女ごときに打負けしをおし隱して居るべきに、明白に願出でしは、身の非を飾らぬ潔白にて、人の及ばぬ處あり、奈何にも渠が望に任せ、身の暇を取らせよとの仰によりて、諸士頭より清左衛門に達するにぞ、大星深く欣びて、家財は親しき人に預け、旅の仕度もそこ〳〵に、日ならず近江を出立して京都の

大星清左衛門

方へぞ赴きける。

（巻の二十三終）

正史質傳　いろは文庫　巻之二十四

第四十七回

偖も大星清左衛門は三ケ年の暇を乞受け、本國近江を出立して程なく京都に赴きしかば、三條小橋の邊なる香女屋と言へる旅籠屋に五七日逗留なし、那地の様子を聞合するに、其頃京都に名の高き劍道の名人に、澤路谷之進と呼ばるゝ者東軍流の師範をなすよし、今京都にて這人に肩を竝ぶる者もなく、門弟許多ありといふこと、本國に在りしときより聞及びたることなれば、傳手をもとめて弟子となり、澤路が家に寄宿して一日片時も怠なく稽古に心を盡す程に、多くの弟子の其中にて免許を得たる者といふとも、清左衛門と立合うて勝を取るもの稀なる程に上達はなしたれども、谷之進は奈何なる故にや清左衛門に奥義を許さず、然るに主君に願ひたる三ケ年もはや終れば、一ト先國へ立歸らんと、谷之進をはじめとして、門弟どもにも暇を報知、嬢て近江へ戻りしかば、最早是程修行を爲たれば、那處女と立合ふとも、最初のやうにはあるまじと、再び堅田に至りて藤内に對面して、某先年御息女と試合の上にて打負けしこと此身の未熟とぞんせし故、三ケ年のその間主人より暇を貰ひ、是まで修行いたしたれば、今一試合願はんため、態々推參いたせしといふにぞ、藤内は異議もなく、お綾に斯と言聞かせて再び勝負に及びし所、三年跡に立合ひしより、お綾の手の内いよ〳〵するどく、這回も十合にいたらずして初のごとく打負けしかば、清左衛門は呆

れはて、我三年の其間、寐目も寐ずに修行して、我身ながらも劒術は上達せしと思ひしに、今この娘と立合うて、最初に變らず不覺を取りしは、是まで心を盡したる修行も全く化骨を折つたるなるかと身を悔み、茫然として物いはず、さし俯向きて居たるにぞ、藤内は打笑みて、大星氏のお手の内、御修行なされしほどありて迚れの御上達、娘が以前の手並ならば、及ぶ事にはあらねども、娘事も三ケ年宿にて出精致させたれば、貴殿に劣らず上達して、勝を取りたるものならんと、いひつゝ、此日は清左衛門に、酒など出して款待すにぞ、大星も實もと思ひ姑く餘事の物語して、其日もすご〳〵立歸りしが、獨つく〴〵思案をなすに、我三年の修行のうち、彼娘も又三年の修行をせしと聞くからは、打負けたるも道理ながら、是ひとへに我出精の足らざる處なるべしと、再び主君へ願を出し、又三年の暇を乞うて、澤路が家に赴きつゝ、今度は初に彌增して、命かぎりに稽古せしかば、二稔ばかりの其内に、師匠の谷之進さへも手を置く程に上達爲たれど、いまだ免許の沙汰もあらず、又一年の修行を積みて、はや追願の三年も終る頃になりたるとき、或日澤路は一間の中へ大星を招き入れ、東軍流にて秘すところの微塵の位をはじめとして、其他奥義を悉く皆傳なしつゝ扨いふやう、其許の御手練にては、敵にも是等の傳授をも致すべき筈なれども、貴殿の本國堅田の里には、淺田藤内が娘にて、其名をお綾といへる者、薙刀をよくつかひ、凡そ近國に名高く聞えし鎧劒術の達人も渠に勝つ者稀なるよし、貴殿も古郷の事なれば、若かのお綾と試合をして、萬一不覺を取られしとき、谷之進が門弟にて奥義を究めし者なりと、人の口端に懸る時は、貴殿と我等が恥のみならず、流義の名をれと思ひし故、是迄態と一流の秘密を授けぬ拙者が心底、嘸訝かしく思はれつらんが、偏に流義を重んずる我赤心を察し給へ、今は貴殿の修行も滿ちて、假令鬼神なりとても恐るべきにあらざれば、今日則ち皆傳なす、猶此上にも心を練つて、那一大事の秘密をば、輕々敷な思はれそと、最念比に示されて、清左衛門は惣身に、おぼえず冷き汗をかき、恐れ敬ひ居たりしが、姑くあつて首をもたげ、段々との御教訓謹んで承る、夫に就きて一ッの御願、その仔細は他ならず、今先生の仰ありし淺田藤内が娘事、此邊まで名の聞えし、さる名人とは毫知らず、先年拙者が同役にて笹浪志賀藏と申す者、竊に拙者へすゝむるには、堅田の郷士藤内といふ人、武道に秀でし男にて、娘に薙刀ををしへ込み、試合のうへにて誰にても娘に打勝つ者あらば、其人の妻にせんといへども渠に勝つ者なし、御身もいまだ無妻なれば、那娘に打勝つて妻になさるゝ、心あらば、某媒立なさんといふにぞ、拙者は素より武を好めば、薙刀の一手なりとも知つたる妻を娶らん事は望ましき處なり、假令少しの手並ありとも、高の知れたる女の痩腕、つひ一太刀と心に輕んじ、渠と試合に及びしところ、物の見ごとに打負けたれば、其よし主人へ願出で、三ケ年の暇を乞うて先生に隨身なし、心を盡して修行せしゆゑ、自己獨の了簡にては天晴上達したりと心得、中頃古郷へ歸りし時、淺田が家に赴きて再び試合に及びしところ、初に替らず打負けしかば、又三年の暇を願ひ、今度は命に替へてなりとも、此一流の奥義を究め、是非今一度かの娘と勝負をなさんと思ひつめ、前後六年の修行にて、かの一大事の秘密まで授けられたる欣は何に譬へんやうもなし、斯言へばとて彼娘の色香に愛て、我妻になしたきとのみ思ふに有らず、主人の耳へも入れたる事故、奈何にも一太刀打たざるうちは武士の一分立ちがたし、願とまうすは爰のこと、今奥義まで傳授のうへは、然る輕々敷振舞をなすべき譯にはあらねども、思込んだる拙者が念願、何卒件の淺田が娘と、今一度試合の義をおん許を蒙りたし、若夫ともに渠に及ばず、這回も不覺を取るならば、其場において切腹

なし、御流義に疵を付けたる申譯を仕らん、此義偏に御聞濟、といふに澤路はうち頷き、我等も兼て貴殿の出精、並々ならずと思ひしゆゑ、倘や淺田が娘なンどと立合にてもせらるゝかと、今のごとくに申せしところ、思ふに違はぬ貴殿の心底、最早夫まで御修行あれば、渠と立合ひ給ふとも、見苦敗義はあるまじければ、隨分ともに大切にお試合有つて然るべし、若其上にも那娘に打負け給ふ事あらば、御切腹は宜しからず、速く我等に報知られよ、拙者近江へ立越えて、渠と勝負を決せしうへ、我さへ渠に及ばずば、師として指南を受くるとも、武道に取つて恥かしからず、かならず短氣を出し給ふな、と吳々も教戒めつゝ、猶も他流と立合ふ時の心得にもなるべき事など、最細やかに說示し、はや大星の出立も程近しと聞くにより、夫より盃の準備をさせ、心ばかりに餞別の名殘をこゝにをしみける、斯て二三日程すぎて、清左衛門は師匠をはじめ甲乙の門弟にも、是まで永々世話になりたる挨拶を演べ、暇を告げて再び京都を立去りつゝ、本國近江へ赴くにぞ、此度こそは淺田の娘を只一太刀に爲負かして、六年越の思をば晴さんものをと大星は、心いさめば自ら足もすゝみて程もなく、我屋敷へぞ立歸りぬ。

第四十八回

偖大星は本國へ立歸ると其儘に、歸府のよしを主君をはじめ家老諸士頭へも屆けしかば、家中の者も聞知りて、何國の浦でも蔭言に、我八難は棚へ揚げ、人の七難言觸らすが、總て浮世のならひにや、爰に集る四五人の、中にも一個が聲高に　▲「トキニ貴公のお隣の、桃栗先生は昨夜歸つたぢやアないか　×「桃栗先生とは誰の事だネ　▲「ハテ隣に居て何樣いふものだ、那清左衛門のことだはな　×「なる程、大星は歸つた樣子だが、那男が何時桃栗と改名をいたしやしたネ　▲「ナニ改名は爲ねへけれども、ソレ桃栗三年柿八年といふ事が有るだらう、那男も三年め〳〵に歸つて來ちやア淺田の娘で恥をかくから、其處で桃栗三年恥かきねんと言ふ處から、桃栗先生と名を付けたが何樣だ肝心だらう　●「アハヽヽヽ、とんだ地口が出來やしたネ、併し那桃栗も餘程辛抱の宜い男サネ、いくら女房が貰ひてへと言つて、女のねへ國ぢやアあるめへし、一度試合に往つて負けたら、いゝに爲ればの事だに、三年といふもの修行をして、汗みづくになつて歸つて來て、また負けたと言ふ事ぢやアねへかネ　×「然サ、夫もあゝいふ野呂間だから詮方がねへが、二度も立合つて負けたら速く思切つて仕舞へばい、事に、又三年追願を出して稽古に往くたア何のことだらう　●「夫でも自分ぢやア名人になつて來た積だから、何でも歸つたら淺田の宅へさア往かうといふ氣だらうヨ　▲「大江山ときて居るの　みな〳〵「ナゼ〳〵　▲「ハテ、さいかう往生又負の面サ　●「賴光保昌渡邊の綱の口合かネ、こりやア些附會過ぎるゼ　×「然はいふものゝ、お綾といふ娘は恂りする程美麗ものだゼ、此身ア劍術の方ぢやアお間だが、男振と口前の宜い處で、ころりと言はせて遣りてへものだが、然味くは往くめへか知らん　▲「オット皆まで賜ふな、其處は此身が素敵いから、先刻口を懸けて置きやした　×「夫ぢやア私より先を越された譯だが、其處で相談が出來たといふ理窟かネ　▲「マア半分は咄が究りやした　●「コウ、そりやア正實のことかへ　▲「實正でなくツて嘘を言ふものかネ　×「こいつは些氣の揉める咄だが、そんなら娘は得心したか、親父が承知爲ねへとかい ふ譯かネ　▲「ナニ然でもないのサ　×「そして咄が半分究つたとは、何樣半分究つたのだへ　▲「私の方が究つて先が究らねへから、其處で半分究つたといふのサ、何と味い咄だらうネ　×「何の事だ、夫ぢやアやツぱり出來ねへのだア、面白くもねへ、ハヽヽヽ　●「ハヽ

ハ、、此身も大方大詰は、其位な落だらうと思つた　▲「コウ、そんなに笑つた物でもねへノサ、マア此身等ならこんな事を言つても人が承知も爲て呉れるが、あの大星が野暮飛切といふ男の癖に、あんな美貌娘を女房に爲やうと思付いたのが、全體推が強いのだ　×「其事も元は志賀藏がすゝめたのださうだが、那男も入らんお世話に口を出して、今度の試合に負けでもすると、大星は素より、志賀藏も人中へ顔向が出來ねへ譯サネエ　●「ナニ那言ふ面の皮の厚い手合だから、そんな頓着はあるめへヨ　×「頓着は爲めへが溫石の燒けたやうに眞赤になつて引込むだらうと思ふと、側で見る目が氣の毒だト手前の樁にならざる事を、隣の病氣を頭痛に病む、噂咄もとり〳〵なるを、かの志賀藏は傳へ聞き胸安からず思ふにぞ、大星方へ走行きて　しが「イヤ大星氏、先は御堅勝で御歸國と承り祝着にぞんじます、是まで永々の御修行、嘸かしとお察しまうして居りますが、定めて御上達でございませうな　清「イヤモウ御存知通りの不器用者、爾のみにもございませんて　しが「是はしたり清左衛門さん、其お辭は他人向、實は私もとんだお世話を爲かけて、今では大に後悔を爲て居りますが、何でも今度の試合には、是非〳〵勝つてお呉んなさらないでは成らないが、其お覺悟が失禮ながらございませうかネ　清「是はまた改つた其仰、勝負は時の運とまうせば　しが「ハテ時の運では濟みません、何でも急度勝つてお呉んなさらないぢやア、私も生きては居ない覺悟サ　清「そりや又何故にネ　しが「イヤ何故の釜のぢやアございません、最う斯成つては艶を言つては居られないから、お氣に障るか知らないが、眞正直なお咄を爲にやア分解りません、最初私の了簡ぢやア、貴公樣の御手練なら、淺田の娘を打据ゑて、御内方になさる程のおたしなみはあらうと存じたから、お世話もいたしたもの、、最初の試合はあの通り、夫から三年御修行をなすツて、二度目のときも面白くなく、又三年のお暇で、昨夜お歸んなすツたと言ふものだから、何處へ往つても其評のお噂ばッかり、実につい御世話をした私の名まで引出されて、宜く言ふ者は一人もありません、爰で一番味くやつてお呉んなされば、私の顔まで立つといふものだが、貴殿が三年修行をなされば、お綾も三年修行を爲て見ますと、何だか今度も覺束ないやうで、實もつて氣が揉めますから、篤と御思案をなすッたうへで、迚も勝てまいと思召すなら、人の口端にかゝらないやうに、止になすッた方が宜からうかと思ひますネ　清「眞に御深切の御意見、千萬辱　うは御座いますが、拙者の所存は些相違いたして居るやうでございます、尤はじめの了簡では、今度娘に打勝たずば、切腹をも致さうと思ひ究めて居りましたが、師匠の教訓かた〴〵を、勘辨いたして見ますれば、縱ひ此度勝たずとも、是まで修行を致したのが、此身に取つては得といふもの、併し殿へもお聞に達し、修行を願つた事であれば、負けたい心はございませんが、世間の人の口なぞと、夫しきの小細な事はお構ひなさるに及ばぬ事サ　しが「イヤ〳〵、其許のやうな物に構はぬお人は夫でも宜いか知りませんが、人の口には戸が建てられぬと、種々な事を言觸らされると、第一身分にも拘る事が出來やうも知れません、とは言ふもの、其許の御氣質、止になさいと言つた處が、止まる御所存はあるまいから、此上は宜うござる、今度貴殿が負と見たなら、お綾が咽へ喰付いてゞも、死ぬ氣で拙者もお供致さう　清「是は又仰山な、それには決して及ばぬことサ　しが「イエ〳〵、是非とも然致さねば、拙者も武士が立ちません　ト止めても聞かねば詮方なく、次の日兩人同道にて、又かの淺田が家にいたり、對面したき旨ありとて、二個が名前をまうし入るれば、取次の者立出て、いざ這方へといひつゝも、例の一間へ誘ひしが、待てどくらせど主は出でず、餘りのことに志賀藏は、取次に出し若黨を呼出しつゝ催促なせば、今姑くとて奥に

入り、何やら囁く樣子なりしが、また半時程待たせ置きて、漸く主藤内は出來りしのみ、會釋もせず

藤「今日入來の姓名を大星氏とは聞きゐたれども、是まで二度まで試合に來て、恥面提げて戻られたおん身が、よもや來られんとは夢にも心づかなんだ、笹浪氏さへ同道にて入來の仔細は何故ぞト常に異りし挨拶ぶりに、志賀藏はは早忿氣と爲しを、大星目顔で推ししづめ打笑みながらすゝみ寄り　清「いかにも只今仰の通り、御息女との立合に二度迄不覺を取りし事、全く此身の未熟故と、又三ケ年修行致せし擧の程を試みたく、再三ながら推參致した、お相手には足らずとも、今一度御息女と何卒試合を願ひたしト言はせもあへず冷笑ひ　藤「愧といふもの知らざれば、此世に恥はなしとやら、娘が欲しさに二度三度、恥をかいても愧とせず、面おし拭つて來るやうな白癡な男では、迚も拙者が聟にはなられぬ、又候娘と立合うて、恥の上塗爲やうより、とツとと立つて歸られよ、今日は拙者も繁用にて、お構ひ申す暇がない、扨氣の毒な人かなトにべなき辭に清左衛門は、腹の中に思ふやう、三年跡に來しときには、不覺を取りし某に、酒まで出して歡待せしに、夫とは打つて替りたる今日のそぶりぞ心得ねと、須臾思案にさし俯向き、辭途切れて居たりける。

是より後大星が淺田藤内を說和らげて、三度の試合に及ぶことより、人の及ばぬ清左衛門が心の活達なる事の、世にまだ專ら聞えざる傳記を甲乙抄錄して、第九編の卷首に出せば、看官愛顧を賜へといふ。

（卷の二十四終）

いろは文庫第九編叙

後世忠臣の龜鑑となりし、四十七士のうへはしも、何れにおろかはなきものから、尙今の世に緯あるとき、自餘の四十六士は得る共、一個良雄は得がたからん、と某侯の宣はせしは、現に君たるの見識にて、良雄の前に良雄なく、良雄の後に良雄なからん、然れば大星が傳においては、諸書にも載せ及口碑につたへて、俗多くは是を知れり、自餘の義黨に至りては、耳新しき傳はあれど、世にもて專とせざることあり、僕這書を綴るのはじめ、史傳によりて見たる事、故老の話說に听きたること、洩さず書記し置きつるなかには、最哀れなる譚もあり、袂を握り齒を切嚙り、遺憾に堪へざる條もあり、或は奇說怪談あるを、幷をしも這に演べんとすゝに、才鈍ければ如意ならで、艶なき筆頭のくだ〳〵しきは、尙高免を被らんのみ。

東都戲作者　爲永春水誌

正史實傳 いろは文庫 巻之二十五

第四十九回

再説、清左衛門は、案に違ひし藤内が取つても付かれぬ返答に、並々の者ならんには、忽地恐を起すべきを、大器量の大星なれば、更に面の色をも變へず、莞爾と打笑ひ　清「何さま御老體のお腹立御尤にはぞんじますれど、拙者事も前後六年、身命をなげうつて劔術修行致したも、何卒して御息女の今一度御相手に御立合をば願はんため、只今御繁用とならば、御用の濟むまで御稽古所の隅になりとも差控へ、相待ちまするでござりませう、何分ひらに今一度トいふに藤内頭をうち掉り　藤「ハテサテ貴殿も聞分のない、迚も試合はむだでござる、其うへに女兒事は然方に緣談整ひ、夫ゆゑの大取込、氣の毒ながら斷り申すト言ひかけて座を立たんとするを、須臾とばかり引止め　清「ナニ、御息女には緣談のはや整ひしと被仰るか、左樣ならば御息女に試合に勝つた者でもござつて　藤「イヤナニ、さうした譯でもござらぬ、拙者も是まで女兒の爲に武術に秀でた聟をと思ひ、種々尋ねましたれども、兎に角女兒に勝つ者なく、可惜盛の年頃を過さするのも不便ゆゑ、俄に思案を改めて、娘の心に愜ひなば、武藝は假令未熟でも聟になさんと思ひさだめ、幸媒するものあつて、今日相談をと、のへまするれば、家内もはなはだ混雜いたす、御免なされト言ひつゝも又立ちかゝるを、志賀藏が側から見かねて急度詰めかけ　志賀「コレ淺田氏、藤内殿、心得がたきその儘、最初貴殿のお言葉には、女兒と試合に勝つ者ならずば、聟にはせぬと言はれしならずや、爾すれば試合に勝つ者ありて聟にされしと言ふ譯なら道理に取つて聞えたが、然もなき者と緣談のある程ならば這方は先口、大星氏の聞かるゝ手前媒爲かけた拙者が濟まぬ、武士の言話は金鐵同前、中しかゝつた御息女なれば、刀に掛けても此方へトいふを止めて清左衛門　清「笹浪氏のお言葉も御道理には存ずれども、拙者が所存は左樣でござらぬ、御緣邊は兎もかくも、何れへなりとも御勝手次第、望むところは一手の試合、倘此度も打負けなば、御息女のお弟子となり、猶も修行をなしたき了簡、只管最一度立合をト身をへりくだりて賴むにぞ　藤「偖も〳〵そこ許等は聞分のない人ではある、夫程までに言はるゝからは、ツイ此儘では歸られまい、彼是の問答に間どられては迷惑故、益なき事とは存じながら、今一度の立合はお望み通り致させまうさう、早々準備致されよト言ふに歡ぶ清左衛門、裸をとつて肩に綾どり、袴の褪をつまばさめば、此間に藤内は女兒に斯と報知たりけん、お綾は身輕に打扮ちて、稍稽古場に立出れば、清左衛門も續いて下立ち、雙方互に對合うて、倆に一禮をはると其儘、お綾は例の薙刀をとり、大星は又小太刀をとつて、呼吸を合せて立ちあがれば、清左衛門は前後六年必死となつて修行せしも只此試合に勝たんがためと、思へばすこしも精神亂れず、お綾もまた大星が以前に替りし身の備に、侮りがたしと油斷せず、しばし透間を窺ひつつ、齊しく聲を掛合うて一上一下と斫結べば、勝負奈何にと見物なす、藤内よりは志賀藏は、此一試合に大星が倘や不覺をとりもせば、阿容〳〵屋形へ立歸り人に面を向けがたしと、額に青き筋を出し、惣身汗に成るをも記えず、瞬もせず控ふれば、這方の二個は秘術を盡し、半時許も戰へども、いまだ勝負も判かざる程に、清左衛門は些もたゆまず、お綾が焦つて籠む薙刀を、右手にはツしと受流し、透もあらせず

打込む太刀は、東軍流にて秘すところの、微塵の一手に爭でか堪ふべき、迚のお綾も請損じ、右の腕をしたゝか打たれて持ちたる薙刀取落し、ひるむを得たりと飛込んで、猶打居ゐんとする折しも「ヤレ待ちたまへ大星氏、勝負は見えたト言ひつゝも、一間の襖おし明けて立出る其人は、京都において師と頼みし澤路谷之進なるにぞ、うち驚きつゝ木太刀を投げすて　清「思ひがけなき先生には何故あつて此家にはト怪み問へば莞爾と笑ひ　谷「その御不審は御道理、仔細をお咄しまうすべければ、まづ〳〵是へト言ふ程に、清左衛門は座に登れば、お綾も倶に端折をおろし、父の邊に居直るにぞ　谷「偖大星氏、是までは態と御沙汰を致さなんだが、是に居る藤内は拙者が爲には實の兄、夫故にこそ兩度まで、貴殿とお綾が試合の事も、兄の方より申越し、就きては貴殿の人品骨柄、眞の武士と思はるれば、ならう事なら那やうな婿が欲しいと兄の念願、幸不思議な御縁にて、我等方にて御修行あれば、此よし兄へ申遣はし、偖六年の其間貴殿の樣子を見るところ、武術のうへは言ふに及ばず、平日の立振舞まで適れと見受けし故、流義の奥義をお傳へまうせし事の序に、恁々とお綾が事を餘所ながら言出せしは、兼てより兄藤内と示し合せ、おん身を聟に做さんがため、是に仍つて某も竊に京都を發足いたし、昨夜此家に到着して貴殿の入來を相待ちしに、今日お綾とお立合のお手の内をば拜見いたし、拙者に於ても視着いたす、寔に珍重〳〵ト言へば藤内語を續いで　藤「夫に就きても某が最前よりの爲體を、合點行かずと思しめさんが、他より絲談整ひしなど事を設けて種々に、不禮の言葉を出せしも、猶も貴殿を試さん爲、然るに尠怒の色なく、只武事にのみ傾かるゝ、その御心底を見るのみか、今の試合のお手の内、假令女兒は打ちひしがれ、片輪になつても苦しうござらぬ、娘に勝つた聟をとれば、年來の拙者が願望、此上は笹浪氏、以前の亀言は御用捨あつて、おん嫁を賴入るト二個が言葉にうち駭く、清左衛門より志賀蔵は、我を忘れて小踊なし　志賀「望むところのお嫁致さいでなんとせう、拙者も實に此の立合に、大星どのが不覺をとらば、生きて再び歸らぬ覺悟、今打勝たれたその時には、命をひとつ拾うたやうで、眞實嬉しく思うたに、猶其上におの〳〵方の御心底を承り、此御縁談が整へば、屋形へ歸つて朋輩どもに、某迄が肩身も廣く、是にうへこす歡なしド咄のうちに藤内は、お綾に囁き示すにぞ、豫て準備の酒肴を所狹きまで取出し、客も主もうちくつろぎて盃をめぐらしつゝ、猶四方山の物語にその日も昏に及びしかば、大星笹浪兩人は暇を告げて立歸り、偖吉日を選みつゝ、志賀蔵が媒にて、お綾を立派に粧はせ、大星かたへ迎へしかば、始謗りし輩も案に相違の思をなせしが、爾るにてもお綾事は、近江一國に竝びなき美人と仁の評判せしを、武骨者と呼ばれたる清左衛門が妻となさんは、嫉ましき事限なく、その婚姻の夜に臨み、樽入なさんと言ふもあり、又は石打して呉れんと、さゝやき合ふもありしかども、お綾は名におふ武術の達人、夫を打伏せ妻となしたる清左衛門が手練の程も、なか〳〵もつて料りがたきを、なまなかなる事爲出して、倘も手ひどき目に合はゞ、敗を叩いて蛇を出すの譬に洩れぬ事もやあらんと、思ひ直しつその儘に、阿容〳〵として止みにける、是によつて清左衛門は首尾よくお綾と婚姻整ひ、夫婦の和合も最睦じく、幾千代までもと契るなるべし。

第五十回

恁て月日を經るほどに、當屋形佐々木殿は專茶道を好み給ひて、あらゆる茶器を集め給へば、上を學ぶは

下の做、一家中の青侍まで皆此道に心を入れて、今日は口切翌日は爐開、這處の會席彼處の返茶と、只管流行したりしが、或時廣間に詰合せし侍どもが三四人 ▲「トキニ各方は、相替らず御出精と承りやしたが、嘸御上達でございませう、好山氏はたしか此程眞の臺子までお濟み被成たと申す事だネ ●「ナニ私なぞのはほんの茶をかきまはして呑むとまうすまでサ、併し閑暇の節には隨分宜い樂サネ ×「宇治右衛門先生のお手前は、吃茶亭で花月のあつたとき、拜見を爲たまんまだと思ひやすが、何樣でございます、一席宅で催しやせうかネ ▲「それは何卒お招に預りたいものでございます、茶を致すと、兎角道具屋めいた事が申したくなる物でございますが、何ぞ珍らしい御道具がお手にでも入りやしたかネ ×「イヤ夫に就いて、おの〳〵方へ些御鑑定を願ひたい品があつて、實は是まで持參いたしましたが、御覽下さいませうかネ ●「鑑定とあつては恐入りやすが、夫は何だか拜見を願ひたいものでございますトいふうち、唐更紗の風呂敷に包みし箱入の茶碗を取出し ×「モシ、此品でございますが、箱書付の樣子と申し、隨分出來た茶碗のやうに思はれやすが何樣でございませう、ト此うち這方の兩人は茶碗を取つて打ちながめ ▲「ハヽア、高麗の曆手でございますネ ●「內外の樂の味合、何樣も言へやせん、殊に石州殿の箱書、是はなか〳〵御道具でございます ▲「然して此品は御所持のでございますか、又は賣物とでも言ふやうな ×「左樣でございます、さる道具屋が先日持つて來て見せやしたから、先置かせて見ましたが、頃合の茶碗で欲しくないでもございませんノサ ●「何樣致して餘程出來が面白い、そのうへ時代もあるやうだし、道具屋が持つて參つたら、五十金では離さうとは申しますまいネ ×「ヤ是は駭いた御鑑定、私もその位な直段なら當事不用の品だから、具足を質入致しても、取つて置きたいとぞんじて居りますが、些夫よりも登りますから、先考へて居るところサ ●「ハヽア、そしてどのくらゐとまうしやすネ ×「一向に引けない處で七十兩といふのでございます ●「なる程その位な直うちはないでもございませんが、五十金を越しては些と御勘辨物かネ ▲「併し此位の茶碗を持つて居れば、客をしても隨分恥かしくないネ ×「然ればサ當時此通り流行で、誰しも宜い道具を欲しがつて尋ねて居るところでございますから、私が手に入れかけた茶碗を買ひおくれて、他にでも買はれると殘念にもぞんじますから、其處で各方へも御相談を致して見たものサ ●「なる程それは被仰る通りサ、私なぞも金子さへ手まはれば、假令七十金でも欲しくない事はないのサネ ×「ナニ好山さんなんぞは、御親父の代からなさるお茶だから、今新にお求めなさらないでも、結構な御茶器が澤山にありやすノサ、此節でもやッぱり三八にお釜日をなさるのかネ ●「イエ、親どもが亡くなつてのち、引續いて妻が產をいたし彼是の取込で、宅の釜日は先見合せて居りやす ×「いかさま、そんなお咄も承つたやうでございました、イヤその妻で思出しやしたが、那清左衛門はとんだ女房を貰ひやしたネ ▲「左樣〳〵、六年幸抱をして貰つたとは根氣の宜い男サ ●「併し淺田の女兒といつちやア、隨分這頭までも評判の聞えたものだが、あんな男を亭主にするとは這女も餘程茶人の方かネ ×「ナニ茶人なら咄せるが、美くしい顏をして氣の利かねへ武藝なんぞをやらかすとは、野暮飛切といふ婦人と見えやす ▲「何樣して、そりやア大違のお咄サ、那見えても琴三絃は言ふに及ばず、踊下方香茶の湯、何でも女一通りの藝道なら、出來ねへことはないと言ふ噂だが、何にしても大星には過ぎた女房サ、全體清左衛門といふ男が、若い者のやうではない、無句附合を知らねへ者サ、是程流行る茶の湯をば見向いて見やうともせず、役にも立たねへ劍術なんぞに、五色の汗をたらして苦むとは、あんまり智慧のねへ事サネ、實は日外婚禮の晩に些いたづゝ寄つ

下の做、一家中の青侍まで皆此道に心を入れて、今日は口切翌日は爐開、這處の會席彼處の返茶と、只管流行したりしが、或時廣間に詰合せし侍どもが三四人▲「トキニ　各方は、相替らず御出精と承りやしたが、嘸御上達でございませう、好山氏はたしか此程眞の臺子までお濟み被成たと申す事だネ●「ナニ私なぞのはほんの茶をかきまはして呑むとまうすまでサ、併し閑暇の節には隨分宜い樂サネ　×「宇治石衛門先生のお手前は、吃茶亭で花月のあつたとき、拜見を爲たまんまだと思ひやすが、何樣でございます、一席宅で催しやせうかネ　▲「それは何卒お招に預りたいものでございます、茶を致すと、兎角道具屋めいた事が申したくなる物でございますが、何ぞ珍らしい御道具がお手にでも入りやしたかネ　×「イヤ夫に就いて、おの〳〵方へ些御鑑定を願ひたい品があつて、實は是まで持參いたしましたが、御覽下さいませうかネ●「鑑定とあつては恐入りやすが、夫は何だか拜見を願ひたいものでございますトいふうち、唐更紗の風呂敷に包みし箱入の茶碗を取出し　×「モシ、此品でございますが、箱書付の樣子と申し、隨分出來た茶碗のやうに思はれやすが何樣でございませう、ト此うち這方の兩人は茶碗を取つて打ちながめ　▲「ハヽア、高麗の曆手でございますネ　●「内外の藥の味合、何樣も言へやせん、殊に石州殿の箱書、是はなか〳〵御道具でございます　▲「然して此品は御所持のでございますか、又は賣物とでも言ふやうな　×「左樣でございます、さる道具屋が先日持つて來て見せやしたから、先置かせて見ましたが、頃合の茶碗で欲しくないでもございませんノサ　●「何樣致して餘程出來が面白い、そのうへ時代もあるやうだし、道具屋が持つて參つたら、五十金では離さうとは申しますまいネ　×「ヤ是は駭いた御鑑定、私もその位な直段なら當事不用の品だから、具足を賣入致しても、取つて置きたいとぞんじて居りますが、些夫よりも登りますから、先考へて居るところサ　●「ハヽア、そしてどのくらゐとまうしやすネ　×「一向に引けない處で七十兩といふのでございます　●「なる程その位な直うちはないでもございませんが、五十金を越しては些と御勘辨物かネ　▲「併し此位の茶碗を持つて居れば、客をしても隨分恥かしくないネ　×「然ればサ當時此通り流行で、誰しも宜い道具を欲しがつて尋ねて居るところでございますから、私が手に入れかけた茶碗を買ひおくれて、他にでも買はれると殘念にもぞんじますから、其處で各方へも御相談を致して見たものサ　●「なる程それは被仰るぞは、御親父の代からなさるお茶だから、今新にお求めなさらないでも、結構な御茶器が澤山にありやすノサ、此節でもやッぱり三八にお釜日をなさるのかネ　●「イエ、親どもが亡くなつてのち、引續いて妻が産をいたし彼是の取込で、宅の釜日は先見合せて居りやす　×「いかさま、そんなお咄も承つたやうでございました、イヤその妻で思出しやしたが、那清左衛門はとんだ女房を貰ひやしたネ　▲「左樣〳〵、六年辛抱をして貰つたとは根氣の宜い男サ　●「併し淺田の女兒といつちやア、隨分這頭までも評判の聞えたものだが、あんな男を亭主にするとは這女も餘程茶人の方かネ　×「ナニ茶人なら咄せるが、美くしい顏をして氣の利かねへ武藝なんぞをやらかすとは、野暮飛切といふ婦人と見えやす　▲「何樣して、そりやア大違のお咄サ、那見えても琴三絃は言ふに及ばず、踊下方香茶の湯、何でも女一通りの藝道なら、出來ねへことはないと言ふ噂だが、何にしても大星には過ぎた女房サ、全體清左衛門といふ男が、若い者のやうではない、無句附合を知らねへ者サ、是程流行る茶の湯をば見向いて見やうともせず、役にも立たねへ劍術なんぞに、五色の汗をたらして苦むとは、あんまり智慧のねへ事サネ、實は日外婚禮の晩に些いたづ

爲てやらうかと、近所で相談をした事もありやしたけれども、那いふ無法者だから、どんなことを爲ッて知れないと思つて、まア見合せて置きやしたが、何ぞ事があつたら、早晩ぞは恥をかゝせて遣らうとかんがへて居りやすノサ　●「イヤ夫には丁度宜い事がありやす、今日は大星が當番日だから、軈て出勤をするでございませう、其とき今の茶碗を出して目利をさせて見やせう、那通りの武骨者だから、是には當惑するでございませう、其尾についてなぶつて遣るは何樣でございますネ　×「これは一入思召つき、宜いなぐさみでなかばへ清左衛門が、何心なく廣間にいたり皆夫々に挨拶をはれば　●「イヤトキニ大星さん、此間は御新婦をお迎への御樣子、まだお歡びにも出ましなんだ　清「これは御挨拶　忝うぞんじます　×「へゝエ、それでは好山氏はまだ清左衛門さんの御内室に、御知己におなんなさらぬへのかネ、是はまた何樣したものだ、先當時御家中で一と言つて二と下らない御容貌サ、殊に鎧先の高名ではないが、木刀の先のお手柄でお貰ひなすッたのだから又格別な譯さ、ネエ清左衛門さんトなぶりかゝれど大星は、只莞爾と笑ふばかり、更に言話に取合はねば　×「ヤこれは拙者のまうし過り、御氣に障つたら御勘辨下さい、夫はさうと宇治右衛門さん、先刻の品を大星先生にお目利を願つたら何樣だらうネト眼で知らすればうち點頭き　▲「なる程此目利は清左衛門さんなら間違はありやすめへ、何卒大星さん、一寸折紙をつけて下さることはなりやすめへかネ　清「目利とまうしては及びもないことでございますが、武器は素より好むところ、然して私に見ろと被仰るのは何か刀劍の　×「ハテそこ許も野暮な事を仰せらるゝものだ、當時殿をはじめとして、家中一統茶の湯が流行するに就いては、今の世に入用のない武器などは賣代なしても、高金の茶器を求めたい時節、お手前さまは諸道に達してお在なさるやうに承つたから、定めて茶道のこともお心得があるでございませう、其處で此茶碗のお目利を願ひたいと申す譯サト以前の茶碗をつきつけられ、清左衛門は呆れはてしが爲あらぬ體にてうち笑ひ　清「是はまた何かとぞんじたら、茶碗の目利でございますか、私ことは生れついて箇樣な事は大不案内、此義は何分御用捨を　▲「へゝエ、夫では大星さんは茶の方は一向御心得がないと被仰るのかネ、そりやア啞だらう、あんな美しい御内方をお迎へなさるやうな風流第一のそこ許が、御存じなからう筈がない、何卒御面倒でも鳥渡御鑑定を願ひやす　清「イエ實もつて存じません、茫つて仰下さると甚迷惑いたします　▲「ハゝア夫ぢやア實正に御心得のないのかネ、イヤハヤ是は呆れたものだ、當時殿さまにも御好み遊ばす茶の湯で見れば、偖も御前へ召されたとき、お茶を下さらうとあるまい物でもない、然いふ時節に茶の呑みやうも御ぞんじなかつたら、夫こそ大きな恥かき道具、とサ斯言つたらお氣に當るか知らないが、朋友のよしみだからお咄しまうす、是から些と我々方へお出なせへ、薄茶の呑みやうでも敎へて進せう、併し茶の湯をするには、なか〳〵物の入る譯だが、失禮ながらそこ許のやうに御内困では六ケ敷からう、先さし當り此茶碗から御傳授を致さうからお聞きなせへ、是は高麗燒で暦手といひやすが、是で代金七十兩サ、何と肝が潰れた物だらうネ、そこ許の目から御覽じたら五郎八茶碗も同樣に思はれるであらう、ハテサテ笑止千萬な、何れも方御覽なせへ、斯いふ咄になつては、遉の大星先生も御返答が出來ぬと見えて、指をくはへてお在なさる、アハゝゝゝ〳〵　●「いかさま武道の事では宜く口をお利きなさるが、箇樣な器になると一向お目が見えぬとは、德久利同樣な譯だネ　▲「なる程口ばかりで目がないから其處で德久利か、是は宜く出來やした、德久利ならまア貧乏德利の方だらう、イヨ、イヨ、德久利先生、アハゝゝゝ〳〵ト寄つ

てたかつて嘲弄なす、這段いまだながけれども、丁貝妥に盡きたれば、この一條のをさまりは次の卷に委しく說くべし。

（卷の二十五終）

第五十一回

復說件の青侍等は、言はるゝまゝに清左衛門がおし無口て控へ居るを、臆面したりと思ふにぞ、猶もいよ〳〵調に乘りて、種々嘲弄爲たりしが、中にひとりが找みいで　×「是はしたりおの〳〵方、その樣に被仰るけれども、諸道に達した大星氏、是しきのお目利ぐらゐが出來ない事は決してない筈、イヤナニ清左衛門さん、貴公があんまりお卑下しなさり過ぎるから、何れも方がつひまアあんなことをも仰せられるやうなものゝ、是といふが常々お心安い御朋輩の中と申すものサ、夫だからそこ許も、御遠慮なさるには及ばない、實はさる道具屋が持つて參つた此茶碗、至極心に愜ひましたから、重代の鎧を質入致しても、求めて置きたいと存じますが、何をいふにも高金の品ゆゑ、直段丈の品であらうかと、其處をあやぶんで皆さんに御相談を致して居りやすが、何卒卑下なさらないで、お目一ばいの處を被仰つて下さるまいか、エ、コレサ、是は何樣だ、人にばかり物を言はせ、貴公は啞でもござるまい、ハヽア聞えた、夫ではいよ〳〵茶の道は、何れも方の仰の通り、御存知ないと見えますな、假令茶道は御不案内でも、是程までにお尋ね申すを、御返答のないは奈何な事、サア御目利をなさるとも、夫が出來ずば出來ないと、我等が前に手を下げて、御閉口をなさるが宜い、その替りには以來とも、自己は諸藝に達して居ると大きな面をさッしやるな、アハヽヽ、

ト高笑ひ、清左衛門はこのときさでも手をこまぬきて居たりしが、急度思案の腹を居ゑ　清「再三辭退をいたしても、たつてとあれば是非がござらぬ、然らば目利をして見せうト言ひつゝ、茶碗を引きよせて、携へ來りし鐵扇にて、忽地はツしとうちくだけば、微塵になつて飛散るにぞ、靑侍は仰天なし、呆れて辭も出でざりしが、餘りの事に堪へかねて、以前の一個が膝すり寄せ　×「コレ大星氏、清左衛門どの、大枚七十兩といふ此茶碗を、粉小微塵に打割られたは、本氣の沙汰とは思はれぬ、狂氣でもめされたか、血迷はしッたか大星どの、ト顏うち守れば冷笑ひ　清「イヤ、拙者よりおの〳〵方が氣が違つてござると見える、ハテ何故と言はッしやい、足利殿の武德によつて、斯太平には治まれども、まだ血腥い今の世の中、なか〳〵武術は廢てられませぬ、治に居て亂を忘れずと、古人の語もあるものを、倘萬一の事あつて、すは出陣といふ時に、茶の湯が役に立ちますか、此茶碗とてもたかが土くれ、よしや鐵扇で打たずとも、過つて物に打當て碎くるときは此通り、斯る無益の器を買はんと、先祖重代の鎧まで手放さるゝことは沙汰の限り、本氣な事とは思はれませぬ、尤茶道は東山殿（足利義政）深く好ませ給うてより、世間に專ら行はるれば、致さるゝなといふではなけれど、まだ壯年の御自分方、腰に兩刀をたばさみながら、家業の武術は餘所にして、無益の所爲に日を費し、無益の器に財を費す、拙者が眼から見るときは、寔にもつて歎かはしい、この土くれを求める價で、武器のひとつも買はるゝか、茶の湯に心を入れる丈、武道に出精致されたら、まさかの時の御用にたち、御家のお爲であらうものを、よしない事が流行致し、箇樣な品を道具屋などが持つてまゐる夫故に、當家の武器が他家へ渡り、是等の取沙汰ある時は、下の恥辱は上の御恥辱、其處に心が付かぬと見えて、遠て目利を爲ろとある故、茶碗を割つて善惡の目利を致してお聞かせさうす、茶碗の價は某が道具屋方へ辨へさすれは、此先ともに拙者が前で茶道のお話御無用、トしつぺがへしに言込められ、靑侍等は一句も出でず、赤面しつゝこそ〳〵と一個たち二個立ち、成その座をぞ逃げさりける、斯りし程に清左衛門は、其日の當番果つるとその儘我家に立歸りしが、七十兩といふ金を貯へ持つべき身ならねば、餘儀なく妻に仔細を語るに、竝々の女なら呆れもすべき筈なるを、道は淺田の女兒にて、夫の心底を深く感じ、其身の衣類櫛簪まで質代なして、道具屋へ茶碗の價を償ひしは、又珍らしき賢女なりけり、恁て此事誰いふとなく一家中の評判となり、太守佐々木殿の聞に達せしに、此君暗君ならんには、我好道を誹謗せしなど立腹もあるべきを、素より仁義の君子なるゆゑ、横手を打つて感じ給ひ、我茶を好むはつれづれを慰めんとの所爲なるを、家中一統是を見習ひ、武道の衰とならんとは心もつかで居たりしが、後悔これに過ぐることなし、既に古人の敎戒にも、上仁を好むときは下かならず仁を好み、上暴を好むときは下また暴を好むとあるを、忘れたるにはあらねども、坐に茶道に心を寄せしは、君たる者の所爲にあらず、家中の者の過は我一人の過にて、他家の批判に預るべきを、幸にして清左衛門が價尊き茶碗を打割り、家中の者に武道をはげまし、我に諷諫なしたる事、遁れの忠臣なりとて是より茶道を止め給ひ、武道に心を入れ給へば、家中の者も自から、茶の湯をしては何とやら上の聞も宜からず思ひ、はじめ大星を嘲弄なしたる靑侍等にいたるまで、竹刀をかつぎて稽古場へ立入るやうになりしかば、夫と聞くより清左衛門は歡ぶ事限りなく、言甲斐ありと思ひしが、此とき大守も大星に加增をも申しつけたく思はれぬにはあらねども、斯ては家中のその內にて猜む輩もあらんかと、夫等の事をも介意し給ひ、須臾は其沙汰なかりしが、次の年佐々木殿には鎌倉參勤あるにより、夫とはなしに清左衛門を供の中に加へられ、廳て鎌倉へ召連

れられ、那地において加増をも申しつけべく思はれしに、不思議の事より清左衛門を鹽谷家に懇望せられ、佐々木殿にも最惜しき家來とは思はれしかども、鹽谷とは一方ならぬ交深き佐々木家なるに、殊更判官直々に、殿中においての賴ゆゑ、佐々木殿にも辭みがたく、終に鹽谷家へ送られしとなり、此大星が鹽谷に懇望せらるゝ仔細といふは、或とき佐々木殿の仰を受け、鹽谷家へ使者に行きしが、折から判官對面ありて、其口上を聞かんとあるに、奈何にやなしけん清左衛門はさし俯向きて言葉を出さず、倘病氣にても起りしかと、近習を以て問はせらるゝに、清左衛門は頭をあげ、申上ぐべき御口上を全く失念仕れば、恐ながら御次にて思案のうへにて申しあげたし、須臾の御猶豫願上ぐると、いふを判官聞召して、ゆるゆる思案致すべしとて座を立たせ給ふにぞ、清左衛門は姑く考へ、やう〳〵思ひ出せしかば、再び判官の目通を願ひ、口上の首尾つまびらかに辯舌よどまず申上ぐれば、判官深く感じ給ひ、並々の者ならば、忘れし事をもおし隱し、當座の首尾を合すべきに、尠僞り飾る事なく實體なる致しかた、麁忽には見ゆれども、用に立つべき者とあつて、扨懇望はせられしとぞ、是によつて清左衛門は判官の恩義を忘れず、討入の夜に至りては、衆人に先立ちて比類なきはたらきせしは、道は判官の目利なりけり、恁てまた女房お綾は清左衛門に嫁してより、女の道を守るのみ、武道の事は口へも出さねば、鹽谷家へ抱へられては、いよいよ深く隱せし故、誰あつてお綾の手練を知る者更になかりしが、清左衛門が義士侶俱に吾妻へ下るその以前、夫婦別に及ぶとき、

しら梅や雪の中にも花の意地　綾女

ト書きて送りしにて、夫の所存を夫ぞとは、たしかに見拔きしものと見えたり、後に由良之助も此句を聞きて、通れの賢女かなと、同盟の義士の中にて語り出して賞められしとぞ、其後お綾は親里なる淺田が家に立歸り、夫が本意を遂げしうへ、切腹なせしと聞くよりも、綠の髮を切捨て、菩提の道に入りけるが、其時お綾に一子あり、その名を瀨平と呼びつゝも、僅に五歳なりけるを佐々木家へ召出され、大星の家名を立てられしより、今猶近江に清左衛門が子孫は榮えてありとなん。

編者云く、尙此外にも清左衛門が別傳ありといへども、世俗の宜く知る處ゆゑ、夫等は總て爰に洩しつ、是より後の物語は、牛尾田政之丞が父牛尾田主水が實傳より、政之丞が鹽谷家に仕ふるの美談を綴りし最花やかなる一段と知るべし。

第五十二回

偖說く牛尾田政之丞は、鹽谷家譜代の家來にあらず、奈何なる故にて此家に仕へたるぞと諸ぬるに、政之丞が父主水といへるは、伊勢の國松坂の城主古田何某殿の家臣にて、高三百石を賜はりつゝ馬廻を勤めしが、今年二十二三歳、その容貌の美麗しきこと、女子にしても見まほしきまで最優姿なる生なるに、心はさながら柔弱ならず、文武兩道に丹練なる中にも別けて劒道は、神免二刀流の奥義を極め、當時古田の家中にて主水に竝ぶものなしと、其頃噂せられしとぞ、然るに主水は病に侵され、しばらく出仕もせざりしが、或人の勸むるには、貴殿の如き病症には、醫者の藥を呑まんより、這處より左のみ遠くもあらねば、有馬に至りて湯治をなさば、全快疑あるまじと、言はれし辭を道理と思へば、癮て主君へ願書を出して五十日の暇を乞受け、素より忍の旅なれども、三百石の身分なれば、若黨鎚持草履取の三人を召連れ

て、彌生の下旬に伊勢の國松坂を發足なし、日ならず津の國有馬に到りて、家名を藤屋と呼ばれたる湯宿に姑く逗留なし、專ら療養したりける、什麼〳〵有馬の溫泉は、日本第一の名湯にて、その賑も大かたならず、湯宿に夥の女を置きて是をば湯女と名付けたるが、夫が中にも差別ありて、年長けたるを大湯女と唱へ、年まだ若きを小湯女といひて、湯に入る客の世話をもしつ、酒の相手に呼ばれもして、旅寐の伽をなせる事、那道中の旅籠屋なる飯盛妓とかいふ者に似たり、閑話は休題て、牛尾田主水は去る頃より、五廻餘の日數をば、這處にて湯治せし程に、實に名湯の驗はありけん、病全く癒りしかば、近きに古郷へ歸らんと、心構をなしつゝも、此日もまた例の如く湯場にいたりて浴しつ、濡れたる體を拭ひをはりて、浴衣を着んとする折しも、勝手の方より庭傳ひに那方の座敷へ行かんとて、通りかゝりし一個の弱女、年紀は十七八にや、素顏ながらに色白く、眼元で男を殺すまでにぱッちりとして最涼しく、鼻筋とほりて口元やさしく、飜るゝばかりの愛敬なるが、主水と顏を見合せて、莞爾笑うて行過ぎたる、婀娜めく姿を見るよりも、這の主水も心動きて、跡見送りつゝ居たりしが、餘りの事に思ひかねてや、傍に居たる湯女に對ひ　主「コウ、おつなことを聞くやうだが、今通つた那娘は、是までつひぞ見かけないが、身形の樣子では客とも見えず、ありやア一體何處の處女だの　湯女「ハイ、あの嬢は近所の娘でございますが、内がひどく貧乏だのに、たつた獨の老母に大さう孝行でございますから、宿で聞しい時には、手傳に呼んで使つて遣りますがネ、那嬢は淨瑠璃がとんだ美聲で、時々はお客の御座敷へ呼ばれて、御祝儀なんぞを戴くさうでございます　主「ハテな、何にしても美麗しい者だノウ　湯「左樣でございます、寔に愛敬のある、そして氣の優しい嬢でございますヨ　主「ヤ、夫に就いて些内々にて和女に賴みたい事があるが、何樣だらうの　湯「ア

ノ私にお賴とは、夫はまた何のお賴が　主「サア、然改まつて言はれては申しにくい譯だが、實は今の處女の事だがの　湯「ヘ、エ、夫ぢやア旦那も那娘に　主「イヤサ、自己も生れてから此樣な事を口外するのは初めてだが、旅の恥はかき捨とやら、今聞けば折々は酒の相手にも呼ばれて出るといふ譯なら、隨分咄の組きないでもあるまい、何卒和女のはたらきで、執持つては呉れまいか　湯「夫は最う、何よりお安い事でございますと申したい所だが、何樣いふ譯か那嬢はあゝ見えてもとんだ堅藏で、これまでお客がお目をお附けなすッて、やれこれと被仰いましても、御座敷ばかりは勤めましても、とんと其方は得心を爲兼ねるので、中へ這入つて困る事が幾度もございますヨ　主「なる程然聞いては至極六ケ敷さうだが、物堅い娘と聞いては猶もつて好もしいやうだ、何卒骨折代は隨分多分に遣はさうが、其處を枉げて得心をさせる事はなるまいかのト言はれて須臾うち案じ　湯「夫ぢやア貴君斯なさいましな、迚も私等がまうしては得心する事ではございませんから、まア何となく御酒のお相手にお呼びなすッて、其上で直付で被仰つて御覽じましな、其處は女でございますから、男の口から言出されちやアすげなく否とも言はれませんものサ、殊には那嬢が今這處を通りながら、貴君のお顏をじッと見て、莞爾笑つて往つたやうすは、何樣か貴公に心でもありは爲ないかと見えるやうに思はれますから、思ひの外の譯になるかも知れませんヨ　主「ナニサ、そんな事もあるまいけれども、折角心をかけた處女の事だから、そんなら和女の辭について、假令こゝろに從はぬまでも、せめて酒の相手でもさせて見やうヨ　湯「まア然なすッたうへでの事になさいまし、その時は私が宜いやうに御座敷を持ちますから、まア何にしろ那嬢を呼んで御覽じるとなさいましョ　主「そんならば先夫と究めやうが今日直にといふ事には往くまいノ　湯「ナニ他に呼ばれたお座敷さへなければ、直でもよろしうございますか

ら、那嬢に鳥渡聞いて參りませう　主「夫ぢやア萬事頼むから、倘も處女の方にさし合がなくば、酒肴の準備をも宜いやうに言付けて呉んなョ、併し此ことが供の者の耳へ這入つてはならないから、那奴等の知らないやうにこッそりとして貰ひたいものだ　湯「そりやアお氣遣には及びません、幸貴公のお座敷はお二階、お供の方は下でございますから、其處は何樣にも知れないやうに致されます、夫ぢやアまア那嬢の樣子を聞いて參りませうト言ひつゝ湯女は急ぎ往くにぞ、主水はそゞろに心嬉しく、其身の座敷に趨きて、返事奈何にと待つ程に、姑くあつて件の湯女は酒肴を携へつゝ、主水の座敷に入來り、首尾よく娘をいひこしらへ伴ひ來りしよしを報知れば、娘も續いて一間に來り辭ずくなに挨拶も、最うい〳〵しく見えけるが、此處女の名をお艶とて、正の年は二十年のうへを二ツか三ツか越えたるなれども、愛敬深き生なるに、その粧裝の未通風なれば、誰が目に見ても十七八と思はざる者はなく、最前ちらりと見し時さへ心の動くばかりなるを、今また側へ引きつけて親しくこれを見し事ゆゑ、其美麗しさも十倍にて、年に似合はず物堅いと、評判うけし主水なれども、繼は思案の他なるにや、魂坐に身に添はず、まだ盃も取らざる先より、酔へるが如き心地して、お艶の顔をうち守り、頻に獨うち笑むのみ、果敢〳〵敷は物さへ言はぬを、湯女がひたすら執持ちて、輕口なンど言ひちらし、酒をすゝめて座をもつ程に、主水も最早ほろ酔機嫌、よきしほなりと思ふにぞ、湯女は程よく座を立つて、きてん利かして外し往く、此場の首尾は奈何ならん、次の卷を見て知らん。

（卷の二十六終）

第五十三回

跡は二個が差向の、須臾辭も途切れつゝ、主水が才智の勝れしも、かゝる事には疎ければ、何と言出し宜からうかと、手持無沙汰に見えけるが、思ひきつて側へより　主「アノッ、和女の名はたしかお艶と言ふさうだのト初心らしく問ひかくれば　艶「ハイ　主「そして年は何歳だエ　艶「ハイ十八でございます　主「なる程此身も其位であらうと思つた、夫は然と最う一ッ呑むから酌いでくりやれ　艶「ハイト言ひながら酌ぎにかゝる、その手をしッかり握りしむれば　艶「アレモウ御戯事を被成ては宜けませんョ　主「イヤ〳〵決して戯に致すのではない、大眞實だが、何と今宵は這處へ泊つて呉れる事はなるまいかのト言へどもお艶はさし俯向くのみ、回答なければさし寄つて　主「是はしたり何樣致したものだ、其やうに無口て居つては譯がわからぬ、武士たる者が恥を捨て此やうにまうすのは、よく〳〵な事だと推量して、何卒得心をして呉れまいかト言はれてやう〳〵顔をあげ　艶「私のやうなたらはない者を、御酒の上の御戯言にも爲ろ、今のやうに被仰つて下さいますのは、寔に嬉しうございますけれども、何樣も此事ばかりは御挨拶がなりかねますから、御免なすッて下さいまし　主「フウ、夫ぢやア何處ぞに深く言交した男でもあつて、他の男には肌が許されないとでも言ふやうな事かの　艶「イヽエ、最うそんな事は夢

さらありは致しませんヨ　主「夫がなくば何も仔細はありさうもない物だが、夫ともこんな田舎侍は否だとでも思ふのか　艶「アレモウ、そんな勿體ない事をぞんじますものか　主「何様もさッぱり譯がわからない、何故また挨拶が出來ないのだか、夫を咄して聞せるが宜いはな、其上でなる程道理な事だと思つたら、無理な事も言ふまいからの、コレサ何も恥かしい事はない、さア〳〵分解るやうに言つて聞せな　艶「そんならまうしますがネ、お腹をお立ち被成ちやア否でございますヨ　主「ナニサ、夫しきの事で腹なんぞを立てるやうな此身でもないノサ　艶「アノウ、眞正は私も恥かしい事でございますが、先刻お前さんにちらりとお目に懸つたときから、及ばない事とは思ひながら、あんなお方に一生連添つたら、女に生れた甲斐が有つて、嘸嬉しからうと思つて居ります所へ、そんな優しい事まで被仰つて下さるのでございますから、心は飛立つやうでございますのを、じッと辛抱して居ますのも、何をお隱しまうしませう、私にはたッた一個の母がございまして、何卒末始終母を大切にして呉れるやうな男があるなら、親子の身を任せたい、夫も妾、側女では末が覺束ないから、假令先は貧窮でも、心立のよい人で、眞正の女房にして呉れる人で無ければ、母が安心するやうな事には往きませんから何卒然いふ人をと尋ねて居ります、その替りには私の身もつゝしんで、浮氣なことは爲ますまいと、心に錠をおろして居りますから、不便な者と思召して、御堪忍なすッて下さいましヨトいふに主水は感じ入り　主「いかさま、和女の物堅いといふ事も、親孝行といふ噂も湯女の咄で聞いては居たが、夫程までとは思はなんだに、寔に見あげた心意氣だ、そんなら此身のやうな者でも生涯見捨てまいと言へば、女房になるぞんじよりか　艶「夫は最う萬に一ッも然いふ事になりますと、どんなにか嬉しうございますけれども、夫は迚も及びもない事だとあきらめて居ますヨ　主「イヤ和女さへ得心ならば、まだ定まつた妻とてもない事故、國許へ母子倶呼取つて、母をも安樂に暮させやうが、何様だやッぱり不承知か　艶「アノ、そりやア眞正でございますかへ　主「ハテ疑深い者だ、此身も斯見えても勢州松坂の家來牛尾田主水とまうして、三百石を頂戴致す者、啌僞なぞを言つてなるものか、承知とあれば國許の同家中を賴み、假親をこしらへて直に女房の弘めをするはな　艶「眞正に然だと身も命も入らないやうになりますがネ、あんまり結構過ぎて何だか夢の樣な心持が爲ますヨ　主「なか〳〵夢なんぞにしてなるものか、夫でいよ〳〵得心なら、今夜から女房になる稽古を爲ても宜からうの　艶「ホ、、、、、夫でも貴公そんな事が　主「ハテサ、互にかう約束をして見れば、浮氣な色戀ちやアなし、誰が何とまうするものか、エ、コレサ、そんなに其方を向いて恥かしさうな顏ばかり爲て居ては咄がならない、併しあんまり長咄を爲て居て、供の者にをかしくでも思はれるとならないから、そんなら斯して呉んな、いよ〳〵和女が得心なら、一遍道處を歸つて、今夜四時の鐘の鳴る時分に、下の者の氣の附かないやうに忍んで來て呉れないか、其時言殘した咄もあるから、ゆつくりと爲やうはな　艶「そんなら今被仰つた事を母にまうしても宜しうございますかへ　主「ア、宜い段ではないから、とッくりと相談を極めて來るがいゝ、夫とも老母が不承知でも言ふやうだと困つたノウ　艶「何樣致しまして、貴公の事を咄しますと、ころ〳〵してどんなに歡ぶか知れませんヨ　主「然聞いては安心だが、其處で今言つた今夜の事を欺しちやアいけないせ　艶「貴公こそ忘れてお睡つてお仕舞ひなさると聞きませんヨ　主「何樣して寐られるものかな、眼を丸くして待つて居るせ　艶「ホ、、ホ、、左樣ならば後ほどト辭殘して出て往く、此とき主水が若黨の六内と言へる者、何心なく二階に來るに、常に替りて女の聲の一間の内に聞ゆるにぞ、合點ゆかずと訝しみ、小蔭に隱れて最前よりの二個が咄

を洩聞きつゝ、お艶が出て行く跡より、俱に二階を下りんとせしとき、主水が何やら手を打つて、六内〳〵と呼ぶ聲に、何くはぬ顔付にてその儘一間に赴けば　主「イヤナニ六内、其方を呼んだのも他ではない、知りやる通り五十日のお暇の日數も最う纔に成つたのに、此身の病氣も全快に及んだやうだから、近々此地を發足して、松坂へ歸らうと思ふから、此地の餞別心で、コレ見やれ常には用ゐぬ酒ながら女子どもに言付けて二三盃呑んで見たが、呑めぬ酒は何時でも呑めぬもので、此通り酩酊致した、是を其方等に遣はすから、此うへに何ぞ口に合つた肴を取添へて、草履取の七助、鑓持の鎌平にも心祝の積りで、今宵は許すから、隨分過して休むやうに言うて遣りやれト言はれて六内は歡を演べ、件の肴のそのうへに、二種三種肴を添へ酒をも增して、二階の下なる供部屋へ携へ往き、七助鎌平を呼集め　六内「サア〳〵、今夜は此身が驕だから呑んだ〳〵　鎌平「ハテナ、常には客嗇のお若黨さんが、何と思つてこんな事を爲なさるのだか、こいつは何樣も合點が往かねへ　六「啞方めへ伊勢の松坂から此有馬まで履いて來た一足の草鞋を、又歸りにも履かうと思つて取つて置くやうな此身が、手前達に酒を振舞つてつまるものか、是は旦那が斯々被仰つて此地の名殘に呑めと被下つた酒ヨ　七助「おいらも大方そんな事だらうと思つた　六「何樣してめつたな事を言のある事だが、是は放心は言はれねへ　鎌「譯とは何だか言つて聞かせなせへな　六「イヤ、夫にもまだ譯ふと、此身のしくじり道具だから、まア何にしろ呑むとするが宜い、ト是より三個車座にて盃の遣取するうち、鎌平が件の譯を只管に聞きたがれば、六内も今は早やほろ醉機嫌になりし事故　六「ハテ、うるさく聞きたがるぢやアねへか、併し貴樣にしろ七助にしろ心を知つた中だから、極内で咄して聞かせるが、實は先刻何の氣なしに二階へ揚つたら、十七八の婀娜ッぽい娘が來て居て、旦那とさし向のこそ〳〵咄サ、何でもこいつは怪しいと思つたから、立聞をして居ると、聞きなせへ、旦那は日頃から武張つた事ばッかり被仰る堅藏かと思ひの外、とんだ淫事師で、とう〳〵その娘を口說落して、今夜四時の鐘の鳴る時分に忍んで來ると言ふのだから、こてへられめへぢやアねへか　鎌「ハテな、そりやアおつりき妙不思議な噺だが、そして其娘はやッぱり湯女でゞもあるのかノウ　六「ナニ素人の處女で、寔に親孝行だと言ふ處が旦那の氣に入つて、國へ連れて歸つて奥樣になさるといふ騷だヨ、ト最前二階で洩聞きし、その荒增をさゝやき示し　六「斯言ふ譯だから、其處で此身等に酒を下すッたのも、醉はせて速く寐かさうといふ算段に違ねへノヨ　七「コウお若黨さん、そりやア實正の僞のと現在此身が立聞をして知つて居るのだが、貴樣もまたひどい惚りの爲やうぢやアねへか　七「惚り爲ねへで何樣するものか、こりやア大變になつて來た　六「コレサ何樣した物だ、そんなに顏色まで變へて騷ぐ事もねへ、サア〳〵　七助「咄は置いて最う一盃呑まッし　七「此身ア酒は否だヨ　六「夫だつて折角旦那の下すッた酒だらうぢやアねへか　七「旦那の下すッたのだから猶否だ　六「ハテな、何が氣に障つてそんな事を言ふのだらう、手前は腹立上戸の筈はねへが、ハ、ア聞えた、今夜旦那がその娘を抱いて寐るといふ咄を聞いたので他嫉妬か、よせ〳〵むだな事だ、夫よりおぬしも氣に入つた湯女でも呼んで樂むが宜いやア、エ、コレサ、何樣したのだト言へども七助は返事もせず、腕を組んで考へ居るにぞ　六「アハ、、、、こいつは大笑だ、好々腹を立つ奴は立たせておいて、さアサア鎌平、おぬしと二個でやらかさう　鎌「ハ、、、、なるほど七公の腹を立つたのばッかりは一圓合點が往かねへ、そんな事を言はねへで、機嫌を直して呑まねへか、エ、是はしたり餘程腹が立つたと見えて、無口込んで仕舞つたア　六「ナニサ、こんな馬鹿野郎に構ふ事はねへから、遣らう〳〵ト是より二個さし向にて、

ざしつさゝれつ呑むほどに、果はその座に酔倒れて、前後も知らず寐入りける。

第五十四回

かくてその夜も小夜更けて、程なく聞ゆる四時の鐘、主水は二階に只獨り、今にもお艶が忍び來るかと臥房の裡にありながら、寐もやらずして待つほどに、下には下奴の七助が、主人を思ふ忠義者、最前若黨六内が咄の様子にうち駭き、直さま二階に赴きて主人に諫言なさんかと思ひしかども、イヤ〳〵〳〵、日頃からして物堅い旦那が、夫ほど思込んだはよく〳〵な事であらんを、生若輩な身をもつて、意見立して倘ひよつと用ゐられずば詮ない事、夫より今宵その娘が、忍んで來るを途中に待受け、何でも旦那に逢はせぬやうに、有無を言はさずその場から、追返すのが近道と、獨思案を定めつゝ、那六内と鎌平が酔倒れしを幸に、竊に部屋を忍出で、まさかの時の爲にとて、準備の一刀脇ばさみ、二階階子の眞中に、どッかり腰をうち掛けつゝ、今や遅しと待つところへ、お艶は斯とも毫知らず、忍び寄つたる二階の口、掛行燈の薄灯に、見れば階子の只中に、かの七助が踏みはだかり、這方を白眼んで扣へし様子に、お艶は思はずぎよッとして找みかねたる有さまを、七助は見て眼に角立て　七「ヤイ、此二階は此身が旦那の借切のお座敷だのに、案内もなく揚りにかゝる、一體和女ア何處の者だ、トねめつけられて口籠りしが　艶「ハイ、私やア些と主水さまにお目に懸つてお願ひ申したい事があつて參つた者でございます　七「ナニ、旦那にお目に懸つてお願だ、願があるなら晝間來い、まだ生若い女の癖に、灯も持たずに夜宵中、旦那のお獨でお在なさる處へ往くたア、第一不躾だア、用があるなら夜が明けてから來るが宜い　艶「イエ、今夜で無ければならない事でありますから、此事は旦那も御承知で入らッしやる譯でもあり、何卒そんな事を被仰らないで　七「イヤイヤ、そりやア嘘だらう、此身が旦那は物堅い御氣質で、夜中に女にお逢ひなさる事なんざアお嫌だア、そのうへ敏にお睡眠なすッたから、今夜の事にやア迚も往かねへ、夫とも火急の願なら此奴が取次いで、お目の覚めた時分に申しあげて遣るべい　艶「アレサお前はんに取次いで貰つて濟むやうな事なら、内外の人に氣兼をして、忍んで來やア爲ませんハネ、そんな意地の悪いことを言はないで其處を通してお呉んなさいヨ　七「何だ意地の悪い事を言ふ、コレ宜く聞けヨ、开己が今夜來た譯も敏から夫と知つては居るが、女のことだと思ふから、成丈手荒い事を爲めへと、和に言やアつけあがつて、其處を通せも宜く出來たア、十七八に化けて來ても、尻に毛のねへ古悪婆めへ、好くも物堅いお旦那をたぶらかさうと爲やアがつたな、此七助がお附きまうして、开己等の手事に乗る物かい　艶「オヤ否にお言ひだネエ、私やアお無垢の素人だヨ、夫を旦那がやれこれと被仰つて、夫婦約束まで爲て見れば、今にもお國へ往つた日にやア、何どか其處に名が付いて、不躾な言分だが、私の草履はき物まで、直さにやアならないお前だらう、あんまり口ぎたなくお言ひでない、とサ言つちやア何様やら角が立つて、お互に宜くないハネ、夫よりかお前はんには、私が美麗しい湯女さんをお世話をして進げるから、私をも旦那のお側へ行かれるやうにしてお呉れなネエ、エ、モシ、こんなに仔細を言つて頼んでも解らないのかへ、何卒拜むから、ヨウ奴さん　七「エ、囂しいハイ、何だ旦那と夫婦約束をしてお國へ往くと、ヘンお臍が茶を沸さア、そりやア旦那も御酒のうへだやア、そんな御戯言も被仰つたか知らねへが、夫を間に受けるといふのが全體間抜だア、縱令旦那は何と被仰らうとも、此奴さんがならねへと言つたらならねへは、ぐづ〳〵言やア踏殺すぞ、ト左右の袖を握り堅めて飛びかゝるべき

勢に、お艶は遁に女ゆゑ、口かしこくは言ふもの、、那が様子に恐怖をいだき、尚此うへに言募り、家内の者の耳に入らば、宜からぬ譯もある事ゆゑ、詮方なくも七助に、言込められてすご〳〵と、頓てその場を立去りける、これより先に主水は又お艶が音信いかゞやと、臥房にありて待つほどに、俄に何やら聲高に人の爭ふ様子なるにぞ、何事やらんと訝りて階子の口まで來て聞けば、那七助とお艶とが、問答最中なりしかば、流石に家來の手前を恥ぢて、その場へ顔も出しかねしが、爾るにても七助が、奈何なれば那やうに人も頼まぬさし出所爲、我妨げをば做すやらんと、心中竊に怒を含み、何とかせんと思案の内に、お艶はすご〳〵歸りし様子に、いよ〳〵主水は、憤の、胸に餘れば堪へかねて、七助を一間に呼びつけ　主「ヤイ七助、其方は這處を何處だと思ふ、夜中といひ殊にはまた、何か女を相手にして、聲高な今の振舞、旅人の入込むこの湯治場で、倘間違でも出來た時には、上のお名まで出るといふ、其處に心も付かずして、法外な致しかた、左様な者は家來に置かれぬ、此場よりして暇を遣る、きり〳〵其處を立ちをれと、戀の邪魔せし腹立まぎれ、日頃に似合はぬ一言と、思へば這方はいと〻猶、落つる涙をおし拭ひ　七「貴君は天魔が魅入れたか、お情ないそのお言話、這處を何處だと被仰つた貴君が何處だと思しめす、つひ假初の旅の空、素姓も知れぬ女をとらへ、おん戯かは知らねども、身元もしかとお糺しなく、お國へ連れゆき奥様になさらうなぞとはそりや何事、倘夫等から間違生じ内外の耳に入るときは、人の入込む繁華の場所、古田の家來牛尾田主水が、女に溺れて恁々の騒動ありしと取沙汰あらば、貴君ばかりか殿さまの、おん名の汚といふことは、よもお忘却はなさるまい、其處を思うて下郎奴が、御立腹をば覺悟して、女が來るを途中に待受け、有無をいはせず追歸したは、貴君のお身を大切と、思込んだる故のこと、夫をさうとも思しめさぬとは、餘りといへばお情ないト心の眞實うち明けて、主人を諫むる七助が、此ものがたりいまだ盡きねど丁數爰に限りあれば、其は編を替へ卷を改め第十編に委しく說くべし。

（卷の二十七終）

いろは文庫第十編叙

舌講師が机を敲きて、次話は明晩の後講にと、美談ところで幕を切るも、跡を引かする方便にて、稗官者流が卷の終に、开は後回の分解を听けと、逃げるも服はおなじこと、爾はさりながら這史は、誰もしつたる忠臣蔵、聊自作は加ふれど、後を引かせて斯してと、倆伎るほどの條もなく、虚實を込めし二ツ玉、鐵砲疵には似たれども、正しく刀でゑぐつた疵と、倘看官の御目利ありとも、淀鳥羽伏見と出たらめに、綴りなしたるめつぱふ彌八、夫は六段是は十編、見て來たやうな啌さへも、上乎に吐かれぬ作者が鈍筆、辻講釋の一口ものにも、劣りて味なからんのみ。

爲永春水誌

第五十五回

牛尾田主水は七助が主思なる一言に、はじめて夢の覺めたる如く、恥ぢたる顔を揚げかねてさし俯向きつつ居たりしが、姑くあつて吐息つき　主「ア、我ながら過つたり、倆が居らずば既にして渠が色香に心を奪はれ、身の一大事に及ぶべきを、主水が武士の棄らざりしも全く倆の赤心ゆゑ、夫をさうとも思はずして、暇を遣るの法外のというたが今更面目なく、言解く辭はさら〳〵ない、許してくりやれ七助トいふに這方は飛びしさり、はツと許りに平臥して、嬉し泪に稍しばし、貌もあげ得ず沉入りしが　七「エ、有難うございます、お心廣い旦那さま、數にも足らぬ下郎めが、申しあげた一言をお取りあげ下さつて、慮外の辭をおとがめもなく、反つてお譽のお辭は、千萬兩のお金をば頂戴いたより有難いト言ふ顔つくゞうち守り　主「聞けばきく程倆の心底、思ふになか〳〵腹からの下賤の子とは思はれぬ、かぞへて見れば七稔あと、わが門前に倒伏し病勞れたる旅の小童、道伴とても見えざれば、不便に思ひ我親人が、屋敷の裡へたすけいれ、種々介抱ありしゆゑ病の早晩本腹なし、如何なる者ぞと尋ねしに、生國は伊豫なれども兩親共に世を去りて、頼なき身といふによりその儘家に止めおきて、草履つかみになしたりし、その小童は倆にてそのとき十一歳とやら、素生を委しく語らねども、立振廻のまめやかさ、長の旅路に尾羽うちからし、

身形は賤しく見えながらも、下賤のもの、孤とは、その時よりして思はざりしに、恩義を忘れぬ今宵の仕方、いよ〳〵もつて最床し、爾の親は何者にて、奈何なる故にかくまでに、賤しき身にはなりつるぞ、仔細具に物語らば、我また心の及ばん程は、力となりて得さすべし、つゝまず語れト問ひかけられ、須臾回答にさしつまりしが、胸をさだめて小膝を找め　七「十一歳の春からして、親旦那さまの御恩を被り、是まで手足を伸したる、御恩報じもせぬうちに、我が身のうへを斯々と、申しあげなば此うへにお心遣ひを掛けんかと、思ふがゆゑに今日までも、深くつゝみし下郎が素生、かくまで仰せ下さるからは、今は隠すにかくされぬ、實我等が父とまうすは、伊豫の國宇和島家の藩、浪崎宮内と喚ばれし者、その頃おなじ家中の侍沼澤傳五左衛門といふ者、父に遺恨の條ありて、主君にさま〴〵讒言せしゆゑ、終に罪なき咎を被り、敢なく切腹なしたるにより、母も歎の餘りにや、病の床に臥して後、幾程もなく世を去りて、跡に殘るは我身のみ、本國伊豫を追放せられ、身族とてもあらざるに、殊更僅に十一歳、稚心に父のみか母さへ斯るなりゆきも、咸沼澤が做す所爲と、齒がみはなせど小腕のかなしさ、怨を復さん力もなく、すごすごとして故郷をはなれ、那方這方とさまよふうち、かてて加へて此身の病氣、命も既に危きを、貴君のお家へ救ひとられ、此年月の御厚恩、今まで口へは出さねども片時忘れぬ父の仇、討取ることは慥はずとも一太刀なりと恨みんと、思ふ心は絶えねども、受けた御恩を報じもせず、親の讐が討ちたしとて、お主を餘所になすべきならねば、深くも素生をつゝみしは、斯る仔細のある故ぞト涙ながらに物語れば、主水はきつと形容を改め　主「我が推量に違はず、偖は爾は宇和島家にて由緒ある武士の子なりしか、世が世のときであらうなら、我が草履など撫むべき身のうへにてはあるまじきを、下郎とまでになりさがれど、父の恨が報いたいとは、遁れ見あげた武士のたましひ、其一言を聞くうへは今より兄弟の義を結ばん、我をば兄とおもふべし我また爾を弟と思ひ、力をそへて父の讐沼澤とやらを討ちとつて、かならず本意を遂げさせん、心安かれ七助ト言はれてはツと驚くまでに、這方は頭を壁にすりつけ　七「重々厚きそのお恵、爾はさりながら旦那さま、下郎の我等と兄弟とはお情過ぎて何とやら　主「ハテ苦しうない去りながら、餘所の聞も憚あれば時いたる夫までは、互の心は兄弟にて、表向はやはり下郎の七助、かならず人に洩すなトことばのうちに小夜更けて、寐よとの鐘の聞ゆるにぞ、主水は臥房へ、七助も暇を告げて自己が住む下座敷へぞ退きける、斯てその次の朝俄に旅の用意をなし、有馬の温泉宿を發足なすにぞ、主水も遁にお艶がことを、その儘にしてもうち捨ておかれず、以前の湯女を竊に招き、金五兩をば渡しつゝ、戯れ事に言紛らし、綽隠密に濟せしとぞ。

長持うた「坂はなア引てる〳〵鈴鹿は曇るなアエ、引　合の土山雨が降るヨなアエ、引

人足「アゝどツこい何様だイ、馬が物いうた鈴鹿の坂だイト下上りする旅客の、往來途絶えぬ都路や、爰も名におふ近江なる、その水口の驛路の、脇本陣に駕を建てさせ、今貴休の牛尾田主水、かの若黨の六内が

六「オイ鎌平、今がた爰の棒鼻で摺違つて通つた行列は、陪臣者と見えたが大さう幅をして通る奴ぢやアねへか、何でも五六百石も取るといふのが頭で駕が三挺往つたノウ　鎌「然サ具足櫃に宇和島家中とみんな書いてあつたから四國侍だらう、道中も那くらゐな人數で爲たら面白からう、鎌ばツかりが六七本も往つたせ　六「イヤ、その鎌で氣がついたが那七助は何様したらう　鎌「此身も先刻から氣にして居るノサ、石部の宿で、腹が痛くツて歩行かれねへから歸り馬でも雇つて乘つて往くから、些の間旦那のお草履を持つて

呉れろ、其替りにはお鑓は此身が馬の上でかついで往くと言つたから、那奴に鑓を預けたが、何でも昼休までには追着くと言つたにしちやアあんまり遅いなア　六「那奴も小ばしッこいやうな口は利くけれども、此様ときになるとぐづ〳〵するので困らせきらア、何程日が永いと言つても、昼休に半時の餘も懸つちやア、泊までにやア夜に入るかも知れやア爲ねへト言ふ時、石部の方よりして追々來かゝる旅人が、通りすがひの咄聲　▲「コレ今の喧嘩は大變な騒になつたぢやアねへか、可憐さうに那鑓を持つた奴は打殺されるだらう　×「さうサ、憎ていな侍が大勢かゝつて責めるのだから堪るものぢやアねへ　▲「併しあの奴は鑓をかつぎながら馬の上で居眠をするとは、あんまり宜い氣な男ではあるめへかト噂咄も何とやら心ならねば六内が、その旅客にうち對ひ　六「モシ〳〵、今のお咄は何處であつたお咄でございますネ　×「ナニ此跡の松原で、たッた今見て來た喧嘩サ　六「へゝエ、そして其奴と被仰るのは、何歳位の年恰好で、どんな顔付の男でございますか、些と此方にも心當りがございますから委しくお聞かせなすッて下さいまし　×「ナニ、私等も中途から見たのだから、何だか譯は知らないが、馬に乘つて來た奴が宇和島の家中の御へ、かつで居た鑓を突込んだとか云ふやうな事で、その侍がおそろしく服を立つて、大勢かゝつて踏んだり蹴たりする様子サ、その奴の年頃は十七八で色の白い小作りな男でござりやしたト言ひ捨てゝ通過ぎれば、又跡よりも追々に通りかゝりし旅客が、とり〴〵の噂咄も、正しく七助に紛なければ、六内も鎌平も、うち驚くのみ術なさに、主水に斯と報知るにぞ、一ト間の裡に休息なしたる主水は聞くより仰天して、その侍が宇和島の家中とあれば若萬一、日頃敵と付けねらふ傳五左衛門ならざるか、何は兎もあれ我がもち鑓を携へたりし家來をば、見殺しにせんやうもなく、殊には渠とは有馬にて、殊約し辭もあるなるを、須臾もうち捨ておくべきならずと、忽地思案を定めつゝ、六内は跡に殘して轎荷物の類を守らせ、鎌平ひとりを召連れて、飛ぶが如くに那方なる並松原へぞ走往きける。

第五十六回

夫より先に七助は石部の宿へ來りし頃、持病の癪のさし起り、ほと〳〵惱に堪へがたければ、鎌平に草履を頼み、其身は鑓を預りて、宿はづれより馬を雇ひ、荷鞍の上に跨りながら、片手には鑓をかつぎ、片手に痛む胸先を、おさへて苦痛を忍びつゝ、既に石部と水口の、その間なる松原へ、さし掛りたる折こそあれ、向より來る武士の行列　先ばらひ「ヤイ馬士、馬を脇へ引け、エ、氣の利かねへ馬士だト持つたる杖をふりあげて、馬の尻をばしたゝか打てば、件の馬は駭きけん頻に踊り狂ふにぞ、此時までもさし俯向き、胸を押へし七助が、此形勢に恟りして、鞍の上にも堪へがたくや、眞逆さまに落つる時、持つたる鑓の石突にて、通りかゝりし侍の乘りたる駕の窓を破りて、内へぐさとぞ突入れたる、其とき駕の裡よりして、戸前を確と蹴ひらきて、顯れ出でたる暴戾武士、額に疵を受けしと思しく、流るゝ血しほを拭ひもあへず、怒れる聲をふり立てて　武士「者ども其奴を取逃すなト烈しき辭に家來の面々、馬より落ちて七助が、うごめくところを取つておさへ、持ちたる鑓さへ奪ひとりて、那武士が目通りへ有無を言はせず引居ゑたる、此形勢に七助は呆れ惑ひつ更にまた、言解く辭もあらざれば、只忙然たるばかりなる、其とき件の武士はいよ〳〵怒れる聲ふり立て　武「ヤイ下司奴の分際で、我が乘物へ鑓を突込み、武士たる者の面體へ疵を付けても濟まうと思ふか、鑓をかついで居るからは偏も主人があるだらう、主人といふのは何者だ、夫から先へ

白狀をれト言はれて七助頭をあげ　七「そのお腹立は重々恐入りましたが、全く馬が驚きました故、箇樣な麁相もいたしましたのでございますれば、寔の怪我の過と御了簡遊ばしまして、此場のところは御勘辨を、へイ〳〵お願ひ申します　武「ヤ、這奴がこやつが、武士の額に生疵を付けながら、御勘辨とは何の事だ、儞等がやうな下司下郎を相手には致さない、他のことは聞くには及ばぬ、主人の名前を速く言へ、主人に逢うて掛合つたうへでは、了簡の爲やうもあらうが、まア夫までは儞は素より、鑓も返すことはならないぞ　七「サ、左樣ではございませうが、下郎めが不調法ゆゑ主人の名まで出しましては、何分濟まぬ事でございますれば、奴めを何樣にも貴公のお腹の愈ますやうに、御存分に遊ばしまして、何卒その鑓はお返しなされて下さいましト言ふうち迫々同伴の、武士どもが裃より下りて、おの〳〵這處へ寄集り、此爲體を見るよりも　みな〳〵「イヤ沼澤氏手ぬるい〳〵、裃へ鑓を突入れるとは法外な素丁稚奴、殊更疵を受けられながら長問答には及ばぬ事、主人の名前を言はずとて言はさいでおくべきか先我々がト三四人、七助ひとりを取りかこみ　みな〳〵「さア眞直に言つて仕舞へ、言はずば斯だト立ちかゝり、踏むやら蹴るやら敲くやら、遠慮會釋もあらくれ武士が、手込の責に七助は、髮は亂され衣類は破れ、顏も體も血まぶれに許多の疵は付けられながら、爰ぞ一世の大事と思へば、眼を閉ぢてたじろかず、此形容に責めあぐみし武士どもは呆れはて、須臾猶豫の體なるにぞ　七「ア、モシ旦那さまがた、私の麁相は此上もない不調法ではございますれど、是程までに私を御存分に遊ばしましたら、大かたお腹も愈ましたらうから、何卒其鑓はお返しなされて下さいまし、御慈悲でございますお情でございます、コレ拜みますト手を合せ、詫びつ口說きつ種々に、泪ながらにかこちても、爭何聞かぬ侍ども　侍「エ、强性な素奴め、朋輩の面體へ生疵を付けさせながら、つひ此儘で濟せては、宇和島家の恥辱となれば、沼澤氏は許すとあるも我々が承知いたさぬとても用捨はならぬ、四の五のと面倒だ、一寸だめし五分だめしに、這奴は爰でなぶり殺し、又鑓の主が此鑓を自身に貰ひに來たならば、渡すやうにして渡して遣らう、奴め斯ても主人を言はずば、もう是までだ覺悟せよト刀の柄に手を掛ければ　七「ア、申しお侍さま、只今ちらりと承れば、宇和島の御家中で沼澤氏と被仰るは、若や傳五左衞門さまとは貴公ではございませぬか、ト問はれて這方は訝し氣に　沼「主人の名をも言はずして人の名を聞く白痴者、爾りながら知られたうへはつゝんで詮なし、奈何にも我は宇和島の家中沼澤傳五左衞門だが、我が名を夫と知つたには何か仔細がなくては愜はぬ、今討ちはなす奴なれども、譯を聞かぬも殘多い、きり〳〵ぬかせト白眼ゆれば、七助屹度形狀をあらため　七「偖は汝が傳五左衞門、斯いふ我を誰とか思ふ、汝がために讒せられ、敢なく非業の最期をとげし浪崎宮内が一子たる七助なるを知らざるか、今は恁まで零落るれど、片時忘れぬ父の讐、一太刀なりとも恨みんと思ふ心の屈きてか、測らず汝が面體へ疵付けたるは天の賜物、汝も武士の數ならば、卒此場にて勝負せよ、豫て此身は斫死と、覺悟は既になしたるを、爰で死ぬるは身の本懷、怨の刃受けて見よト身はさん〴〵に打居ゑられ、腰さへ自由に立ちかねるを、よろめきながら立ちあがり、準備の一刀拔きはなし、沼澤目がけて斫つて蒐れば、すは狼藉と侍ども、伴當なんどが立ちかゝり、裃の杖をばふりひらめかし、矢庭に刀をうち落し、またさんざんに打居うれば、憐むべし七助は、惣身すべて血にまみれ、息もたゆげに臥轉ぶを、怒に任せて傳五左衞門、立蹴に儘と蹴返しつゝ、から〳〵と打笑ひ　沼「扨は宮内の奶よな、儞が父はそのむかし、犯せる罪のある故に命を捨てたは自業自得、人を恨みん條はなきを、我がせしやうに思遣へ、讐呼はり事をか

沼澤「イヤ捕者

しい、親の因果が子に報い、今その形貌になりながらも、猶も悟らぬ愚者、爾はさりながら夫程まで、我を敵と思ふなら、さア立ちあがつて勝負せよ、是丈いうても立得ぬは、我が威勢におくれが來て、不便や腰が拔けたのか、口程もない臆病者、夫でも元は武士の子かト飽まであざける惡口雜言、這は口惜しと七助は齒がみをなせど許多の人に、打居ゑられて身うちは動かず、年頃日頃心を盡せし父の仇たる沼澤を、今目の前におきながら立合ふことも悔はぬとは、よく〳〵武運に盡きはてし、此身のうへを何とせん、父には孝をつくし得ず、主人の爲には持鑓を、他家へ取られし不忠の罪、夫も誰故傳五左衞門、假令此儘死ぬるとも、生替り死替り、恨を晴さで置くべきかト遺恨の眼尻血ばしるまでに、那方を急度見あぐれば、又からからと打笑ひ　沼「此期に及びてよしなき雜言、いはせて置けば種々と、耳障しいよまひごと、もう宜い程に苦んだら、此世の暇をとらせて呉れん、念佛なりと題目なりと、勝手な物を唱へよト言ひつゝ刄を拔きはなし、既に斯よと見えし折しも、息せき走來る牛尾田主水、斯と見るより聲ふり立て　主「ヤアお武士姑く待たれよ、須臾〳〵ト おし禁むる、聲に見返る沼澤が　沼「慮外をいたした下郎奴を手討に做さんと致すをば、禁め召さるゝ其許は誰人なるぞと咎むれば、主水は故意と莞爾やかに小腰をかゞめ手を下げて　主「某事は古田の家來牛尾田主水と喚ばるゝ者にて、是なる下郎は拙者が下奴、奈何なる不禮を致しました、仔細は一向ぞんじませねど、たかゞ下奴の事でござれば拙者が代つてお詫いたす、はや御了簡下さるまいかな　沼「然らば貴殿が此者の御主人と仰あるか、身どもは宇和島の藩中にて沼澤傳五左衞門と呼ばるゝ者、此下郎奴が我が怒へ持ちたる鑓を突入れて箇樣な疵を負はせしのみか、我をば父の仇なりと、不禮過言の許しがたさに、見らるゝ通り斯の仕合、既に唯今息の根をとめて呉れんと爲たところ、家來に代つて其許が詫せられんとあればとて、一通りでは聞濟ならぬ、下郎は勿論此鑓なども、取り返したく思はれなば、刀に掛けて取らッせへ、小分ながら傳五左衞門、お相手に罷りならう、下郎と違つて貴殿も武士、實があつて面白い、さア拔かッせへ牛尾田氏、何とでござるト無法の返答、這方は猶も手を下げて　主「是は又變つた仰、只今もさうす通り、たかゞ下奴の麁忽故、主人と主人が及を交へ爭ふもおとなげなし、拙者に於ては幾重にも只々お詫つかまつる、緯糅便のおはからひ、偏に賴み入りたしト言はせもあへず頭をうち掉り　沼「イヤ〳〵其義は決して慥はぬ、それとも刀が拔かれずば、下郎は身どもが心任せ、又此鑓も此儘に返す事は相ならぬト言ひつゝ傍を見かへりて　沼「おの〳〵那を聞かしッたか、見かけ斗は立派さうに腰に兩刀は指されてだが、斯いふ場所へ臨んでは道に命は惜しいと見える　みな〳〵「左樣〳〵、一體鑓持を馬に乘せるといふのからして、第一主人の不心得といふものだ、イヤナニ牛尾田氏とやら、貴殿も家來を手込にあひ、持鑓までも奪はれては、武士道が立ちますまい、我々とても沼澤とは朋輩のよしみゆゑ、品に依つては助太刀致す、近れぬところと覩念して、疾々勝負をいたされよ、爭何〳〵ト口々におどしかけつゝ、威を見する、渠等が過言もいと憎きに、當の相手の沼澤は、下奴ながらも兄弟の義を結びたる七助が、父の敵と知るのみか、其七助さへ手込に合ひ命も既に危きを素より見逃すこゝろはあらねど、故意と辭を和らげて斯懲懲になしつるも、渠等に飽まで非法を言はせ、そのうへにてと始より、深き思慮ある事成れば、今ははや是までと思ひさだめし牛尾田主水が、其返答は爭何ならん次の卷を讀得て知らん。

（卷の二十八終）

正史實傳 いろは文庫 巻之二十九

第五十七回

爾れば主水は那者どもに、飽まで過言を言ひ募らせ、道に心中怒を含めば、今は斯よと胸をさだめて、沼澤等にうち對ひ　主「イヤナニ各位、しからば何程まうしても、お聞濟はござらぬとか、このうへは是非に及ばぬ、那方這方の用捨はない、一個〳〵は面倒だ、咸惣がかりに蒐らッせへト袴の股立爪挾み、下緒を取つて襷に綵どり、刀の鯉口くつろげつゝ、立ちはだかりたる勇士の身構、はじめ卑下せし容子とは、うつて換りし形勢に、すは又喧嘩と見物が、かたづを呑んで扣ふるにぞ、相手を一個とあなどりたる、武士どもは我先に、討つてとらんとひしめくを、沼澤制して冷笑ひ　沼「丈の知れたるへろ〳〵侍、各位の御加勢を被る程の事でもござらぬ、拙者が手練を御覽に入れんト徐々と找み出で　沼「詮方なさに命を提出し、立合はうとは殊勝〳〵、氣の毒ながら其處許の、五體は忽地微塵にならう、觀念あれト立對へば　主「その高言は跡でのこと、卒まづ勝負と言ひつゝも、刀をすらりと拔きはなせば、這方も俱に拔合せ、一上一下と斫りむすぶ、互に手練の切先は、電光稲妻水の月、須臾雌雄も判かざりしが、古田の家にて一人と、音に聞えし主水が手の内、雷光石火と討込む刀を、受損じたる傳五左衛門、右の腕をうち落され、ひるむを得たりと付入つて、拂ふ刀に又左の、膝の番を斫落せば、ウントばかりに仰さまに、仆れたる儘動き得

ず、夫と見るより同伴の侍どもはうち驚き、心に五分の衝はいだけど、今目前に朋輩を討たせて見遁すべきにあらねば、沼澤が伴當もろとも、各刀を拔連れて、主水が前後左右より、おつとりかこみて斫蒐るを、主水は更に臆する色なく、茅花のごとき白刃の中へ、面もふらず討つて入り、左手に指添拔持ちつつ、宮本無三四が傳ふるところの、所謂神免二刀流の秘術を盡してはたらくにぞ、或は胴斫からたけ割、又は首を失ふあれば、手足を落され遁くあり、近寄る者は一人だも、淺疲深疲を負はぬはなく、ばッたばッたと伐倒され、多勢を頼みし侍ども、又沼澤が伴當も、咸さん〴〵に討ちなされ、多くは开處に命を落し、逃げんとせしも重疵に苦み、那處這處に伏轉び、命から〴〵落延びしは一二個に過ぎざりけり、主水は多勢と敵ひながら、少疵一箇處負はざれば、思ふが儘に斫りなびけ、四邊に近づく者もあらねば、刀を拭うて鞘に收め、此ときまでも松蔭に、打惱まされて苦みながら、はや片息なる七助を、抱き起しついたはりて　主「コレ七助、さぞ殘念に思ふであらうが、爾の親の敵と聞く、沼澤の罪は大半自己が討ちとつて、和主が恨も晴したを、其處で見物爲たであらうな　七「ハイ〳〵旦那さま、有難うございます、私はもうお蔭で思が晴れましたから、思置くことはございません、是が此世のお暇乞でございます　主「ア、コレ〳〵、そんな氣の弱いことを言つてはならぬ、爾の息のあるうちに、まだ此うへの本望を遂げさせて遣ることがある、かならず心を落さずに、氣を慥にして待つて居やれト用意の氣付藥を口に含ませ、猶さまざまにいたはりつゝ、這方に倒れし沼澤が、手足は斫落されながら、死も得やらず居たりしを、襟がみつかんで引きずり來り　主「コレ七助、是こそ爾が父の敵、沼澤傳五左衛門だぞ、思ひの儘にさいなんで、日比の遺恨を晴すがよいトさしつけられて七助は、はや片息になりながらも、餘りの事の嬉しさにや、我を忘れて

起上り、腰なる一刀引拔きて、沼澤にのしかゝり　七「いかに沼澤傳五左衞門、最前もいふ通り、倆がために讒せられて、罪なく命を落されたる父の怨母の無念、今御主人のお情にて、一時に復す七助が、遺恨の切先受けて見よト刄を目先に突きつくれど、手足を既に斫落され、弱り果てたる沼澤が、物いふことも愬はぬにや、頻に眼を見はるのみ、返す辭もあらざるを、七助飽まで詈り懲して、胸のあたりを三刀まで、拳も通れと刺しつらぬくにぞ、さしもの傳五左衞門も、須臾はもだえ苦みしが、はや息絶えし形狀に、忽地心やゆるみけん、俱に絶入る七助が、伏重りてぞ死したりける、主水は不便とおもひながらも、又詮術もあらざれば、石部水口兩驛の宿役人等を招寄せ、綽の仔細を物語り、我は古田の家來にて、牛尾田主水といふものなり、夥の人をあやめしも、據なき次第なれば、定めて宿の捉もあらんが、我も主用あるものゆゑ、這處に久しく止まりがたし、此事につき其方どもが迷惑いたす條もあらば、本國伊勢の松坂へ、何時なりとも申し出でよ、宿の落度にならざるやうに申し取りて得さすべしとて、七助が死骸をばあたりの寺へ葬りつゝ、嬢て其地を發足して松坂に立歸りしに、幾程もなく古田の家に、思ひかけなき凶事ありて、其家斷絶したりしかば、主水も浪々の身となりて、須臾あちこちさまよふうち、山城の國伏見の里にて、又一條の物語あり、その赴を尋ぬるに、伏見の里より道の程遠くもあらぬ深草野邊、はや小夜更けて亥の刻過、廿日あまりのことなれば、まだ月代も出でやらで、星の光をしるべにて、露の道芝踏みわけつゝ、辿り來りし二人連、男は歳まだ十七八の、前髪さへも剃落さぬ、雪を欺く美少年、女は是に二ツ三ツ、年増ならんと思はるれど、化粧榮する顏立の、ぞッとする程美しく、もと此女は撞木町の八文字屋と喚ばれたる娼妓屋の抱にて名を濱菱ともてはやされ、許多の客のその中にて、新之丞とその名を呼ぶ、是なる若衆に馴染めて互に深くなる儘に、又去りがたき仔細ありて、今宵廓を欠落なし、這處へは徨ひ來りしなり　「新さん　新「エ　「オヤマア、氣のない返辭を爲てサ、何だらうネエ　新「氣のある返辭も出めへちやアないか、爰で死なうといふのだものを　「夫ちやア死ぬのがそんなに氣がないのかへ、宜いヨ、否だとお言ひのものを無理に死んでお呉れとは賴まないから、お前はいつまでも長命をして又何處ぞの女郎衆を迷はして、多分浮情をお爲なはいヨ、私はこんな浮情者とも知らないで、實を盡したのが不調法だから、詮方がないとあきらめて、獨で死ぬからサ　新「コレサ、何もそんなに腹を立てる筋もあるめへちやアねへか、此身だつて實は大事を抱へた體だから、死にたいことは些もねへけれども、ふとしたことからお前の所へ通ひはじめ、何樣いふ緣だか知らないが、見るかげもねへ此身のやうな者を、信切らしく爲て呉れるから、その心にほだされて、放心〳〵通つて居るうちに、田舍の客とやらが、お前を受出して連れて往くとの事、口惜しくッても殘念でも、金づくでは叶はれず、思案にも工夫にも盡果てたとき、お前がいふにやア、迚も逢はれなくなるやうなら、生きて居ても樂がないから、死んで仕舞ふとつきつめた覺悟の樣子に、そんならばお前ひとりは殺しはしない、二人一處に情死と、親の事をも餘所にして、言交したのが思案のどくづめ、人目の多い廓のうちを連出して來たくらゐだものを、命が惜しくッて出來るものかな　「さうお言ひだとさうかとも思ふけれども、ほんのお附合の情死ちやアあんまり嬉しくもないと思ふからサ　新「馬鹿なことをいふ、附合に命が捨てられて堪るものか　「夫も然だネエ、そして何處まで連れてお出のだか、私やア寒くッて風邪でも引くと困るネエ、是と知つたら思入着込んで來れば宜かつたッけ　新「お前もつまらねへことを言つたものだ、今死ぬのに風邪ぐらゐが何だらう　「オヤホンニ氣が付か

なんだヨ、夫ぢやアお前はんはもう死ぬ氣かへ、淨瑠璃や狂言でする情死は意氣なやうだが、斯やつて見ると、あんまり氣の利いたものでもないねへ　新「どうせ死ぬのだものを、意氣も野暮もいつたものかな、此樣なことを言つて居るうちに、廓の追手にでも見つかつて、死にそこなつては猶恥だ、まだ幸に月も出ず人里はなれた此野中、爰等が丁度場所も宜い、お前覺悟はいゝのだのト言はれて女は泪ぐみ　はま「そんなら新さん、私を先へ殺してお呉れのかへ　新「お前を殺したその脇差で、直に此身も死ぬ覺悟サ　はま「果敢ないことをいふやうだが、來世とやらへ往つたなら、夫婦になつてお呉れだらうネ　新「そりやア言はずと知れた事だ、ひとつ蓮の新世帶、二人和合よく暮さうから、夫をせめての樂にお念佛でも多分唱へな　はま「そんなら新さん、此世では是が互の顏の見をさめ、宜く顏見せてト寄添へば、男も未練に引寄せて、須臾泪にくれけるが、かくては果てじと新之丞は、我と心を取直し、刀をすらりと拔きはなし、既に斯よと見えたるは、最も危きことなりけり。

第五十八回

恁る折しも見え躱れに、跡つけ來りし荒漢子が、四五人一度に顯れ出で　▲「欠落者を見付けたぞ、女は大事の寶物だから、怪我をさせてはならねへ〳〵　●「オ、さうだとも〳〵、何でも女は引つさらつて、野郎は爰で打つちめろ　×「ナニ野郎ぢやアねへ前髮があらア　△「エ、そんなことは何樣でも宜いやア、逃さねへやうに用心しろト大勢一度に取りかこめば、駭きながらも新之丞は、女を後におし隱ひ　新「ア、モシ皆さん、そのお腹立は重々御尤ではございますが、據ない譯で命を捨てるのでございますから、何卒お見逃しなすツて下さいまし　▲「エ、此素丁稚奴が、歳もいかねへ癖をして、顏に似合はねへふてへ若衆だ、大枚の金を出して抱へて置く寶物を、爾等に勝手な玩物にされちやア、這方の腮が干あがらア、四の五のと面倒だ、女を取返したうへで、這奴は思入しめあげろトいふより速く立ちかゝり、おの〳〵棒を掉りあげて、打ちすくめんとする勢に、新之丞も今更に辭を以てなだむるとも、聞入れがたしと思ふにぞ、はや此うへは詮術なし、死物狂と覺悟して、持つたる刀をひらめかし、須臾戰ふその間に、うろ〳〵濱菱を二人の男が引つかつぎ、雲を霞と駈出すにぞ、夫やつてはと新之丞が、あせるを隔てつゝ、前後より打込む棒を受損じ、向臑はらはれ俯伏に撞と倒るゝ新之丞を、遠慮會が、脊中肩先きらひなく、棒も折れよと打つほどに、憐むべし新之丞は、髮はざんばづだに破られて、今姑くにて既にはや打殺されんとせしところへ、通りかゝりし一團とやかに、頭巾に面を包めども、賤しからざる風俗なるが、携へ來りし挑灯にも、思ふ仔細のあればにや　武「惡者俟てと聲かけて、挑灯片手に割つて入り、棒を奪取り、忽地開處へ打居うれば、殘る二人は駭きしが、素よりがむしゃりけん、右左より打つてかゝるを、那武士は物ともせず、須臾あしらふそのれ、敲立てられ堪り得ず、命からゝ逃げゆくにぞ、はじめ打たれし一人の、が、叶ふまじとや思ひけん、俱にその場を馳去りける、件の武士は三人を轉びし新之丞をたすけ起しついたはれば、新之丞は土に手を下げ　新「何國のいところを、お救ひ下さいました、お禮は辭に盡されません、迚も生きては

故、御恩報じは出來ますまいが、せめて貴公のお名前でも承つて置きたうきのことで慮を受くる譯はないが、お前の心の落着くやうに、そんなら名告見の京橋邊で劍術の師匠を渡世に致す、松下二刀齋と呼ばれます大事ない遣をなさらぬが宜いぞヨ、見ればまだお若いのに、大勢を相手に今のしだらだネ　新「ハイ、お聞きに預りましては、寔に面目もないことでございますが、しまうしませう、もと私は四國方の浪人者で袖岡新之丞とまうす者、箇樣にあつてのことでございますが、日外此地に參りまして、ふとしたことから撞木町ひそめたが運の盡、渠が實義の捨てがたく、身の一大事もうち忘れ、貯の金銀も表立ちては、濱菱に逢はれぬやうになりさがりしに、近頃田舍の大藍にて横島紺藏を身受の相談、若も那方へ受出されては生きては居ないと女が覺悟、夫と聞いては跡へ底なら此身も男だ、一處に死なうと約束かため、今宵是まで忍出て、情死を遂げんと致の追手に見付けられ、言甲斐なくも小腕の悲しさ、打殺されんと爲たところを、貴公のお蔭でつは助かりましたが、連歸られた濱菱が、嘸や難儀を致して居らうと、斯言ふうちも心がせきまは辭に盡されませんが、私は此儘に廓へ參つて、今一度濱菱に對面致し、殺されるとも渠と一處、白痴者とも馬鹿ものとも定めて思召しませうが、かならずお禁め下さるなといふより速く身を起し、駈出さんとする程に　二刀齋「ア、コレ姑く、新之丞どのとやら、お前はきつう取逆上てござるやうすだが、此身がお目に懸ける物があるからまア落着いて是を見さッしやいト懷にせし文一通取出しつゝ手に渡し、挑灯の火をさし寄せれば、新之丞も心はせけど、否とも言はれず、その文のまづ上書を讀下せば、紺藏さまま御る、濱菱よりト認めたるに小首をかたぶけ　新「是は濱菱の自筆に相違ございませんが、何樣して貴公の　二刀「ハテまア、何であらうとも中を讀んで御覽じるが宜いト言はれて這方は不審ながら、おし披き讀むその文面、

さし急ぎ候ま、用事ばかり申し上げ候、さてとや先もじ御げんのふし、たらはぬ私を深くもおぼしめし、身まゝにして行末までの御世話をもなされ下され候はんと、御細々との御語らひ、御しんのほど飛立つやうに御うれしく存じ上げ候、さりながらそのふしも申し上げ候新印の事、よんどころなき義理合にてよびつゞけ候客ゆゑ、今さら御前さまの方へ參り候とて突出し候はゞ、氣ちがひのやうにのぼせ居り候人なれば、若やどのやうな事を致し候はんもはかりがたく、夫ゆゑ今宵情死致し候と申しこしらへ、廓のうちを連出され候約束に候ま、、深くさの野中あたりに御待受け、私を御救ひ下され、かの人ばかりをいかやうとも御かたづけ下され候はゞ、行末ながく連添ひ〻にも心の障りもなく、又かの人に未練のないといふ私の心中を、御まへ樣にも御目に懸けたくと箇樣にいたし〻、委細の事は此使にさし上げ候僞助に申しふくめ置き候へば、なほ御相談願ひ上げ候、餘は

御目もじにてゆる〳〵御語らひ中上げ〳〵。　めで度〳〵

横しま　はま菱

且那様

人々御元へ

ト讀むより恟り新之丞は、記えず膝を立直し　新「モシ、この文を貴公は何様して御所持のでございます

二刀「イヤナニ他に仔細もないが、此身が此處へ來る途中で、思はず拾つたその一通、封じが切れて居た故に、心ともなく披いて見れば、深いたくみの其文言、見ず知らずの人ではあるが、扨氣の毒な事ではあると思ひながらに來かゝりて、見ればお前の難儀の御様子、たしかに夫と思ふゆゑ惡者どもを追退けて、仔細を問へば此文の、名前に符合する故に、夫で御覽に入れたのサト聞くより忽地新之丞は、目色を替へて立ちあがり、又駈出さんとする袖を、再びしッかと引きとゞめ　二刀「こりや貴所は何處へ往かしやる　新「ハテ知れた事此身をば、飽まで白痴にせしのみか、殺さんとまで巧みし濱菱、生けて置いては男が立たぬ、禁立なさるは情に似て、かへつて怨に思ひます、コレ見逝してト言ひつゝも、振離さんと身をもがけど、抱きすくめて動かさず　二刀「イヤ〳〵夫は不了簡、腹は立たうがとッくりと、心をしづめて聞かッしやい、素より遊女は賣物買物、客を欺すが渠等の商賣、夫と知りつゝ、放心〳〵と欺されるのは這方の不覺、尤此濱菱とやらは、手管で欺すと事替り、十分憎い仕方だが、今此女を手にかけたら、其腹立は晴れやうが、お前もお若い事だから、定めて親公もあるであらう、人を殺せば身も殺さるゝと、お前に因事でもあつた時には、親公の歎はどのやうであらう、殊に最前承れば何か望のあるとのお咄、然して見れば取りわけて、大事にされねばならぬ體、ハテ大丈夫と呼ばれる者が、一人の女に心を亂し、命を捨てるやうなことでは、男とは言はれまい、女を殺して男を立てると、身を全うして望を愜へ、眞の男を立てるのと、どちらが男が立つであらう、是は男の立てどころが些違ふではあるまいかト言はれて實もと新之丞は、はじめて夢の覺めたるごとく、忙然として居たりける。

（卷の二十九終）

正史實傳 いろは文庫 巻之三十

第五十九回

新之丞は二刀齋の諫にその身をはじめて悔いて、須臾首を垂れたるのみ、辭もあらで居たりしが、記えず泪をはら〳〵とこぼしながらに形容をあらため　新「奈何なる過去の御縁か知らねど、はじめて逢うた私へ、親にも勝つた御教訓、迷の雲も晴れました、實私の父親は人手にかゝつて非業の最期、その讐が討ちたさに箇様に浪々致すうち、寔に若氣のあやまりにてふと色里に通ひそめ、斯言ふ不實な女と知らず、親の無念も餘所にして、路銀斗りか命まで、渠が手管に乘せられて、欺されたのも親の罰、斯までに鈍つた性根では、なか〳〵敵は何として、討ちおほすべきやうもなし、夫のみならず廓から、欺されたにせよ濱菱を、盗み出した咎あれば、迚も遁れぬ此身の汚名、生きて恥辱を重ねんより、せめて最期は武士らしく、切腹なしたき我等が望、こればッかりは見逓してト言ふより速く肌おしくつろげ、既に自害と見ゆるにぞ　二刀「アヽコレ待つた新之丞どの、夫もやッぱり心得違、ハテ何故と言はッしやい、假令女は盗出すとも、拾つた文を證據にして、廓の方を懸合はゞ、お前の身拔の出來るやうに、及ばずながらその時には、此身も口を添へて進じやう、又これまでの非を悔み、切腹せんとは道は武士、そのお心ならば讐も討てやう、今死ぬ命をながらへて、些の恥を忍ばれなば、嬶て敵を討ちおほせ本意を遂げたその時に、今の汚名は忽地消えやう、惡いことは言はぬから、此身が意見に就きなせヘト說諭されて新之丞は、いよ〳〵迷晴れたりけん、土に頭を摺りつけて　新「段々厚い御信切、此うへは何事も貴公の仰にしたがひませう、とは言ふもの、甲斐ない私、力とも便とも此先おもふは貴公ばかり、今はつゝんで詮のなき親の實名敵の家名、寔は箇様と、言はんとするを、二刀齋はおし禁め　二刀「イヤ〳〵夫も心得違、大約大事をかゝへた者が、敵の家名を放心〳〵と、口外するは麁忽千萬、此身は聞いても他言はせぬが、譬にも言ふ壁に耳、若此事が餘所へ洩れて、敵にでも知られた時には、身の禍となるは必定、只夫のみの事ではなく、お前は敵を討つ氣でも、今はなか〳〵及ぶまい、斯白地に言つたなら、心に障るか知らないが、此身は艶が嫌い故、ありのまゝに言ひますが、最前おまへが惡者どもを相手になされた御樣子では、失禮ながらまだ〳〵手弱い、今にも敵に出合はれたとき、若も向に助太刀を致すものがありでもするか、然ない所がその敵が、武術に達した者であると、返討は知れた事、何れにしても危い讐討、入らぬお世話のやうだけれども、此身を力に賴みたいと言はしやッた辭もあれば、今から此身の所へ來て、一年修行を爲て見なせへ、お前も敵を討ちたいといふ一念で精を出し、此身も其氣で敎へたら、天晴手利になるであらう、夫までに爲あげたうへでは、敵の家名も密に聞いて、討たせて進せる時節もあらう、何と然ではあるまいかト言ふにいよ〳〵感伏して、新之丞はその場にて、直さま師弟の約をなし、二刀齋に伴はれて伏見の里へぞ赴きける。

恁て後二刀齋は、撞木街の廓なる、かの八文字屋の主を招き、拾ひし文を證據にして種々と掛合ひつゝ、少しの金さへ取らせしかば、素より今度の騒動は、濱菱が巧なること明白に分りしうへ、渠は

横島紺蔵方へ、那夜よりして連れられ往き、深く躾れて居たりしを、八文字屋より見出して、其身の代を思ひの儘に掛合ひつめて取りたることゆゑ、新之丞には仔細もなく、縛穩便に濟みしとぞ、然ればまた濱菱も、はじめの程は新之丞が若衆姿に心迷ひて、信實呼びたく思ふが故に、眞を盡さゞりしにあらねど、基是多情の淫婦なるにぞ、新之丞に秋風のはやそろ〳〵と立ちし頃、かの紺蔵が苦みばしりて艶冶氣のなき男振の、又憎からず思へるに、渠は聞えし金持にて、既にその身を受出して妻に做さんと言ふにより、新之丞が邪魔になりしが、是まで起請も取りかはして、深く契りし中なれば、今更那方へ受出さるゝとて、突出し者にするならば、奈何なることをなさんも知れずと、女の淺い巧より、斯の如くは做したるなり、然れども新之丞は二刀齋に救はれて、料りしやうに殺し得ず、其身は横島の家にいたり、躾れたりしも見出され、縛皆韮餅にはなりしかど、紺蔵が金を出して身の代金を贖ひしゆゑ、思ふ通りに夫婦となり、新之丞への義理立も入らざるやうになりしかば、須臾は榮耀の上盛して、誰憚らず暮せしが、此紺蔵と言へる者は、放逸不賴の白痴者にて、親の讓りし身代をも早晩の程にか造ひ潰し、首もまはらぬ借金に詮方なくやなりにけん、濱菱ひとりを盗去にして、或夜出奔したりしかば、濱菱は只途方にくれ、做すべきやうもあらざれば、是よりさまよひ出せしに、身うちに宜からぬ腫物の發して、其臭きこと堪へがたければ、誰とて側へも寄せつけねば、終に袖乞となりさがりしが、果は何とかなりにけん、終る所を知らずとなん、這は是後の物語なり。

恁てまた新之丞は伏見の里にいたりしより、日夜稽古に油斷なく、その間には家内の事も、若黨代りに立ちはたらき、或は師匠の供にも出で、又立聞の取次をもして、最まめやかに事へしかば、二刀齋も渠が心の殊勝なるを不便に思ひ、心を盡して教ふる程に、這方も修行に怠なければ、いまだ一端ならざるに、目に立つばかり上達して、今は敵と出會ふとも、おくれは取らじと師匠も思ひ、その身も自ら賴母しく思へる程になりけるが、折しも秋の初旬、二刀齋の武具は素より衣類書物のたぐひまで虫干するとて取りひろげしを、取收めんと做したるとき、書物の間に挾みし手紙の膝の邊に落ちしを見れば、牛尾田主水樣といふ上書のしてあるにぞ、新之丞は心の裡に思ひ合する事やありけん、はッとばかりに駭きしが猶も四邊を見まはせば、這方の器の合紙にも那方の衣服の襟紙にも、件の名前を記せし反古の、幾枚ともなくありしかば、いよ〳〵もつて訝しく、折から側にておなじやうに干したる着物を塩んでゐるお杉といへる下女に對ひ　新「コウお杉どん、藪から棒に物を聞くやうだが、爰に書いてある牛尾田主水といふ人は、何處の人だか知つて居るかへト問はれて下女は吹出し　すぎ「オホ、、、、お前さんその方を御存知ないのかへ呆れた物だネエ、オホ、、、、ホ、、、、、新「コレサ、そんなに笑つちやア譯が分解ない、私やア近頃此お内へ來たものを、知らない筈だらうぢやアないか　すぎ「なる程然だネエ、そんなら教へて進げるから何ぞお驕りか　新「アレ直にあゝ出るから否サ　すぎ「お前さんが否なら、這方もまア否に爲ませう　新「コレサ、そんな意地の惡い事を言はないで、言つてお聞かせヨ、夫ぢやア御親類でゝもあるのかネ　すぎ「なアに　新「アレサ氣を揉せずにさういふが宜いはな、本統を教へてお呉れだと隨分驕るはな　すぎ「ホ、、、、可憐さうだネエ、實の處は是が旦那さまの以前のお名サ　新「エ、、、そんなら那先生が　すぎ「オヤまアひどい　恂り爲やうだネエ　新「ナニ恂りも爲ないが、あんまり今のお名と飛違つて居るからサ、お前はたしか爰のお内に久しく居るといふ事だが、全體先生は基から這處にお在なさるのか、または他から引越してお出なすッたとい

ふやうな譯かネ　すぎ「ナニ旦那も今では御浪人遊ばしたけれども、前かたは古田の御家來で、伊勢の松坂にお在なすッた時分には、三百石御頂戴被成て、立派なお武家さまサ　新「エ　すぎ「アレまた惚りかへ、困るネエ、お前さんが惚りなさるたびに、私の胸までギクリ〳〵としてならないヨ　新「ナニ惚りも爲さうなものだ、あんまり思ひがけないものを　すぎ「何が思ひがけないのだへ　新「エ、ナニ、アノウ夫でも三百石もお取り被成た御身分が、こんなに御浪々なすッたからサ　すぎ「夫でも旦那さまはお劍術がお上手で、お弟子が澤山あるから、今でも御不自由はないノサ、其うへお慈悲深い結構なお方だから、私なんぞも松坂から這處までお供をして來て、いまだにお勤めまうして居るノサ　新「なる程夫ぢやア先生の御身分を宜く知つて居なさる筈だ、其處でまア那先生は劍術においては寔に名人でお在なさるが、あゝいふ仁心の深い方だから、是まで人と爭つたり、眞劍で伐合つたりなすッたことはあるまいネ　すぎ「イヽエありますヨ　新「エ　すぎ「アレサ又惚りは御免だよ　新「ナニモウ惚りする氣遣はないから、咄してお聞かせヨ、そりやアまア、誰と何處でそんなことがあつたのだネ　すぎ「高くは言はれないがネ、まだ御浪人なさらない前かた、有馬の湯治にお出なすッたお歸りがけ、據ない義理合で、宇和島家の御家來とやらを、水口の松原で大さう大勢お殺しなすッたことがありますトサ　新「エ、〳〵〳〵　すぎ「オヤまア何樣なすッたのだへ、惚りが止んだと思つたら、今度は顏の色まで換へたうへに、目に泪を一ぱい持つて、そしてまアその握ッ拳は何の眞似だらうネエ、お前さんに咄をすると何だか氣味が惡くなるヨト言はれて這方は心づき　新「アハヽヽハ、ナニ〳〵私は妙な氣性で、そんな咄を聞くと、自分が斫合ふか、殺されでもするやうな心持になつてならないノサ、とんだことを根問をして、片付物が遲くなつた　すぎ「ホンニ私も咄にうかれて、盤物の手がお留守になつた奴サ、最うかれこれ七ッだらうから、お夜餐の仕度でもせすばなるまい　新「そりやア宜いがお杉さん、私がこんなことを聞いたことは、先生には沙汰なしだヨ　すぎ「ア、〳〵そりやア承知だヨ、旦那さまにしれて御覽、喋つた私が先へ叱られるはネト言ふとき奥にて二刀齋が聲　二刀「新之丞は何處に居る、新之丞〳〵と呼立てらるゝに駭きて、ヘイトばかりに身を起し、その儘奥へ走り往く。

第六十回

新「先生お召しなさいましたが、何ぞ御用でございますかト言はれて這とき二刀齋は、圍の裡にて茶を立て居たりしが　二刀「オ、新之丞か虫干の取收で、嘸氣が蓋きたらう、此身も手傳はうと思つては居るが、急な書物があつて今まで机にかゝつて居たら、殆々退屈爲たところ、倖釜の煮音が爲たから自服で喫んで居る所だ、爾も茶道は好な樣子だ、何と一服やらないか　新「ヘイ、夫は何より有難うございますト言ふうち二刀齋は茶を立て終り　二刀「さア〳〵新之丞　新「イエ、まア先生今一服　二刀「イヤ此身は最う自服で多分喫んだから　新「左樣なら頂戴仕りますが、併しお手前では恐入りますす、ア、結構な御服合でございます　二刀「何樣だ次手に最う一服　新「イエ澤山いただきました　二刀「然かネ、其處で虫干は何樣だ、まだなかなか片付くまい　新「ヘイ御書物とお掛物の類は荒增收めましたが、お武器の方は先生に窺ひませんでは、些知れかねますやうでも御座いますから　二刀「オ、、それは大さう手廻しが宜かつた、翌日は此身も出て片付けるから、今日は最う夫で休むが宜からう　新「ヘイ有難うございます、私なぞの目にはなか〳〵及びませんが、先生は種々珍らしい御本を御所持で被爲入ますネ　二刀「ナニサ、是といふ物もないが、好で買

集めたところで、今では返つて邪魔になるノサ、お前も書物が好なら、どれでも貸すから見るが宜い　新「へイ、私のはほんの旨のかき覗きとやらでございますが、何卒そのうち拜借が致したいものでございます

二刀「ア、〳〵早晩でも出して見なせへ、本の好なのは何より宜い事だ、兎角今の世は武士とさへ言へば武藝にばかり心を入れるが、文學がなくては義理に暗い物サ、何でもさむらひは、子供のうちに讀物を學ばせて、それから武の道を修行させるでなくツては役に立たない、斯言つては失禮だが、お前は全體虚弱な生付で居なさるから、武術より文學の方が得手でお在だらう、併しこの程からの出精で餘程修行がまあつた樣子だから、最う些のくるしみで、此身も安心して那望をも立派に遂げられるやうにして遣りますから、その氣で修行をするが宜いト言はれてハツト新之丞は、何おもひけん平伏して、須臾泪にくるゝのみ、下げたる頭をあげ得ねば　二刀「是はしたり氣の弱い、何も泣く事は決してない、時節さへ來れば本望は遂げられるから、くよ〳〵思ふまいぞヨ　新「イエ〳〵左樣な事は少しもぞんじませんが、何樣いふ深い御緣でか、つひ假初のことからして、箇樣に師弟の盟約を結び、夫程までに思しめして下さいますかと存じますと、實に泪がこぼれます、夫に就けても私のふがひない生付、嘸先生のお心では齒痒いやうに思召しませう　二刀「イヤナニ、假令虚弱な生付でも、修行の功がつんだうへで、不動心がしやんと居れば、どんな大敵に捕りかこまれても恟ともする物ぢやアないノサ、夫だから何でも出精が肝要だ　新「夫では修行がつみますと然いふ物でございますかネエ、そのお咄に就いて序ながら伺ひますが、名人上手になりましても、不意を討たれましては愜ひますまいかと思ひますが、先生なぞのやうに武藝がお手に入切つては、左樣な事もない物でございませうか　二刀「ナニ此身なんぞのは、なか〳〵手に入つた藝といふではないが、其不意といふのが、言はゞ油斷から起る事サ、然かと言つて今にも人が切蒐らうかと、ひや〳〵思つて用心をして居たからといつて、なか〳〵つゞく物ではない、心を臍下に落付けて天地と我とおなじ心になつて居れば、寸分の油斷もないから、なか〳〵不意を討たうとしても討たれる物ではないノサ、是が今言つた不動心の場所だが、其處までに至つて見ないでは判り兼ねるから、何でも修行が肝心だト咄のうちに次の間より、下女のお杉が顔を出し　すぎ「旦那さま御膳が宜しうございます　二刀「オ、仕度が宜いなら直に喰べやう、新之丞も部屋へ往つて休息をするがい、ト言はれて、へイと新之丞は、暇を報知つゝ其儘に勝手の方へと立つて往く、恁て又二刀齋は夜食も既に果てたるに今宵は急ぎの書物の、猶書殘りて居たりしを寫し果てんと思ふにぞ、中夜の程より机にかゝり、折しも殘暑の去りやらぬに、月さへ隈なくさし入るれば、蚤の儘にて雨戸もくらず、緣の邊に仕かけたる蚊遣火もはや絶々に、烟も細く小夜更けて、千草にすだく虫の聲、葉末の露に消殘る、秋の螢も影痩せて、黄蘗寺の鐘の音も、哀を盡す亥の刻過、二刀齋は僅にて書終らんとする程に、筆の運もいと速く、更に餘念もあらざるところへ、庭の切戸をおし開けて、飛石傳ひにひそ〳〵と、忍寄つたる一個の曲者、覆面頭巾に黒裝束、腰に大小たばさみつゝ手に一條の鎗を引提げ、そのさま身輕く打扮ちたるが、緣の傍に徨みて、裡の樣子を窺ひ居しが、折から月は雲に入り、四邊小暗くなりしかば、時分はよしとや思ひけん、獨り竊に點頭きつゝ、一ト間の裡へ拔足さし足、覘ひすまして二刀齋が、机にかゝりて他事もなき、脇腹目がけて突出す鎗先、思ひ寄らざることなれども、道は名にあふ武道の達人、この物音をや聞知りけん、忽地ひらりと身をかはせば、覘狂うて向なる、行燈はツしと突きつらぬきたる、はづみにふッとゆり消す灯火、仕損じたりと曲者は、闇に當途もめつ

た突き、這方は更に動く體なく、穂先の光に右左と、再三回身をひらき、傍に置きし短刀を取るより速く拔合せ、受けつ流しつ戰へど、夜は野羽玉の闇なれば、雲時勝負も判かざりけり。

（卷の三十終）

いろは文庫第十一編序

世を捨て身はなきものとおもへども花の咲く日はうかれこそすれとは、西上人が像に贊せし、例の翁の滑稽なるが、現に花の咲く彌生の頃は、上野飛鳥に魂通ひて、そゞろ心になる程に、適机に對ふ日も、眼に三芳野の山とかすみ、耳は音羽の瀧と鳴りて、氣は有頂天にうかれ出で、筆の立度もおぼえぬを、遙々浪花の書肆より、嗣輯の催促しきりなるにぞ、難波津ならばよしにもあれ、又あしにもあれ綴らずばと、乾く硯に水さし添へて、復かの誠士の列傳を編むも久しきいろは文字、文庫の底のいと淺き、ことゞも並べて覽に備ふ。

清明後十日

四方の花悉くひらくといふ日

爲永春水誌

正史實傳 いろは文庫 巻之三十一

第六十一回

方燈は消えて眞の闇、二刀齋は曲者がめつたやたらに突出す、鎚の穂先を右左と身をかはしつゝ拔合せ、須臾戰ふ程しもあらず、横にはらひし短刀に、繰出す鎚の只中を、はすに伐られて曲者が駭きながらもためらはず、腰なる一刀拔くよりはやく、跳りかゝつて斫りつくるを、間にもきらめく白刃の光に丁とうけたる手練の速業、かへす刀に曲者の肩先ふかく斫りつけたる、此物音に駭きて、下女のお杉が勝手より雪洞片手に駈出る、灯影によりて二刀齋は、今斫仆せし曲者が襟髪とつて引起し、冠りし頭巾を取退くれば、此曲者は別人ならず、又かの新之丞なるにぞ、是はとばかり呆れはて、辭もなくてうち守れば、新之丞は手に携ちし刀を遙に投捨てつゝ、苦しき息をホットつき

新「有難やかたじけなや、今ぞ念願成就して、貴君のおん手にかゝりし事、歡何かこれに過ぎん」ト言ふに這方は訝しく

二刀「我手にかゝるが本望とは新「サア斯ばかりまうしては御合點がまゐりますまい、甚私は伊豫の國宇和島の藩中、沼澤傳五左衞門が怜にて幼名金彌と呼ばれしもの、父は先年水口にて其許さまのおん手にかゝり、あへなき最期を遂げたるよし承りし口惜しさ、そのとき吾身は十五歳、母には幼き頃に別れ、他に親族はあらねども身ひとつにても父の讐、一太刀なりと怨みんと主君に願ひて暇を乞ひうけ、敵は古田の家中にて牛尾田主水と聞きし

を當に、近江の國まで來て聞けば、思ひがけなく古田殿には家斷絶を致されて、敵の行方も知れずとあるに、忽地望を失ひしが、去りとて止むべき事ならねば、所々方々と尋ぬるうちも、敵に我名を知られじと、母方の姓なれば袖岡新之丞と變名せしに、不圖した事から撞木町なるかの濱菱に馴染めしより、渠が伎倆に乘せられて命も落すべきところ、其許さまのお情にてお救ひ下さるのみならず、永らくお家に止宿られて、武術の御指南被りし御恩は海山替へがたく、若もおん身に凶事などあらば、我一命に換へてなりとも、受けたる御恩を報いんと思込みつゝ、居たりしに、最前はからず土用干の片付ものをしたるとき、反古の中より牛尾田主水と敵の名前を見出して、お杉に問へば斯々と、はじめて知つた貴君の御素生、扨は此家の先生が尋ぬる敵でありしかと、胸も潰るゝ、當座の仰天、假令讐でも命の恩人、今更に名告りかけ討つに討たれぬ恩と義理、さればとて現在の父を討たれし敵と知りておめ〳〵としてあらんには、父へ對して不孝なり、孝を立つれば恩に叛き、恩をおもへば子の道を、缺かねばならぬ身のせつば、奈何にやせんと右つ左つ、胸に思案をめぐらせしが、命の恩と生の恩、偖にまつたうなさんには、此身を捐つるにしくはなし、爾ら ば此よし書殘し、切腹せん歟イヤ〳〵、おなじ命を落すなら、一太刀なりと刀を交へ、おん身の手にて討たれんものと、思ひながらも明々地に、敵と呼びかけ斫りかゝるとも、お情深き其許さま、猶我命を助けんとてなか〳〵手にはかけ給はじ、術こそあれと思案を定め、忍姿にいでたちつゝ不意に鎚をば突入れしゆゑ、曲者なりと思はれて、事の爰には及びしなり苦しき息の下よりして、一伍一什を物語れば、二刀齋は歎息して

二刀「寔に見あげた其心底、敵同志が弟子となり師匠となるも過去の因緣、夫に就きても爾の父公沼澤氏を討ちとりしも、節樣〳〵にて、實に餘儀なき事なりしに、その親のみかその子さ

へ、可惜咎の若者を殺すは何の因果ぞや、最前倆の言葉のうちに、縦ひ名人上手にても、不意を討たるゝそのときは、奈何あるやと尋ねしは、我に用心させんといふ心ならんを、今までも思ひもつかで居たりしは、我ながら最愚なり、夫と査らば疲は負はせじに、はやまつた事したりしト言ひかけて眼をしばたゝけば、新之丞は首をもたげ　新「這は先生にも似合はしからぬ女々しき事を宣ふものかな、我此命は過ぎし夜に、失ふべきを今日までも、存命たるはおん身の賜もの、今更思ひおく事なし、言ふべき事も言ひ果てしを何時まで苦痛を見せ給ふぞ、敏々首を刎ねてよト身を摺寄せつゝ覚悟の合掌、不便ながらも二刀齋は、此一言にはげまされ　二刀「實に言はるればさぞあらん、爾らば苦痛をたすくるため、此世のいとまを取らせんト言ひつゝ、後に立ちかゝり、再び刀を取直して、振りかぶるよと見る間もなく、あはれ果敢なや新之丞が、首は前にぞ落ちたりける。

○是より次の物語は三十年餘も過ぎし事と知るべし。

播磨の國赤穂の城より四五里はなれし片在所に、杉の生垣結ひめぐらせし、最さゝやかなる白屋の、戸口に徨む二個の修行者、裡の容子をさし覗き（▲●兩人合印）▲「行暮れた六十六部一夜のお宿を願ひますト言ふ聲奥に聞えてや、此家のあるじとおぼしくて六十許の一個の叟、緣の障子を引明けて、あるじ「ナニ修行者と言はッしやるか、幸今日は此方にも志す佛もあれば、隨分お宿もまゐらさうが見らるゝ如きいぶせき白屋、夜の物とて心に任せぬ、囲爐裏の端で夜と共に語り明すお心なら、卒々這家へ入り給へトいふに二個は歡びて　▲●「我々とても修行の身なれば不自由は厭ひまうさぬ、爾らばお世話に預りませうト寛の水にて足をそゝぎ、偖に一室へうち通れば、主翁は柴を爐に折りくべて、暖みし澁茶を兩人に手づから汲みてすゝめなどせしその間に、こなたの六部は四邊をしば〳〵見廻して　●「扨御風流なお住居、寔にお羨ましうぞんじます、夫に就いて近頃失禮な事を伺ひますが、那に二振の木刀を御所持なされますは、扨は御主人には劔道御丹練とぞんじられて昔ゆかしく思はれます、苦しからずば御姓名をも承りたうございまスト問はれて主翁は額を撫で　あるじ「お尋に預つては赤面いたす事でござるが、我等は松下二刀齋とまうして、壯年の時分には武術が至つて執心ゆゑ、劔術の道場をも出した事がございましたが、段々年が寄るにしたがひ、弟子の世話もわづらはしく世の交も面倒ゆゑ、御覽の通りの佗住居、好の道ゆゑ木刀は以前の儘に所持は致せど、久しく手にもふれませぬが、那木刀にお目の付いたを見ればお前さんがたも只の御修行者とは思はれませぬ、以前はよしあるお身分でゝもございませうネ　▲「イヤモウ、左樣に仰せられては我等も赤面いたす義でございますが、御主人の御姓名を承りながら、此方の名前をまうさぬは失禮、實我我は宇和島の藩中、是なるは太閤品藏、拙者は通和野入平と呼ばれて、いさゝか知行も貰ひました者でございますが、望あつて浪人いたし、凡三十四五年も箇樣に諸國を經巡りますれど、今に望も愜ひませず、そのうち段々年老いまして、只今では若氣の過を後悔致すばかりでございますが、夫には引替へ御主人などは功成り名遂げて身退くとやら、お羨ましい事でございます　二刀「道理こそお二個の御樣子、何でも武家に育つたお方と見受けました、お望とあるは何樣いふ譯かぞんじませんが、兎角時節をお待ちなさるより他はございますまい　●品藏「爾れば其事でございます、只今も是なる入平がまうした通り時節を待つたも三十年、よく〳〵武運に盡果てたものと思はれます、一樹の陰に舍るさへ他生の緣と承るに、一夜の宿を惠まれて斯打解けたお物語を致すといふも深い御緣でございませう、お笑の種になる事ながら、ノウ通和野氏、我

我が身のうへ咄を御主人に致しては何様であらうと咄すもかへつて身の懺悔、さらば我等からお話説まうしませうト語り出せる身のうへ咄は、次の回に具に説くべし。

第六十二回

▲入平「なる程迚も望は愜はぬと思切つたうへからは、偖も宇和島の滞中に、その頃沼澤金彌とて年十五歳になりけるが、花も羞づべき前髪振に、かの入平と品蔵は、互に思を惱しつゝ、心の丈を筆にも言はせあからさまにもかき口説きしに、其頃はおしなべて男色流行の折柄なれば、金彌も二個が赤心あるを憎からずは思へども、入平に身を任すれば品蔵に義理立たず、又品蔵にしたがへは入平に濟まざるゆゑ、此譯をもて双方へ斷りに及びしに、二個はさしも壯氣の短慮、一旦心をかけたるものを、此儘にうち捨ておきては、武士の一分立ちがたし、爾れば双方勝負を決し、刀のうへに て思を遂げんと、或日入平品蔵が果合をば做さんとせしを、金彌は聞くより駭きて、その場所へ駈けつけつゝ二個を種々になだめこしらへ、屑ならぬ此身をば夫程までに思しめすお二個のおこゝろざし、何れに否ともまうされませねば、聊道にはそむけども、此うへはお二個に此身をお任せまうしまするゆゑ、お互に遺恨なく、是より三個兄弟の契を偕に結びたしと、言葉を蕊して言ひしかば、品蔵も入平も爰に忽地心解けて、互に嫉妬の念を去り、共に水魚の中となりて、金彌を寵愛なす程に、金彌が父傳五左衛門、水口の松原にて牛尾田主水といへる者に討たれたるゆゑにより、金彌は父の讐討にとて出立をなす砌、那兩人も力を添へて助太刀做したく思へども、兄弟の義は私事にて、倡に仕官の身のうへなれば、思ふに任せずうち過ぎしに、始金彌を手に入れんとて果合を做さんとせし事、一家中の人々も誰とて知らぬ者もあらねば、命にかけて兄弟の契を結ばんとまでせしものが、今金彌が必死に臨み、餘所に詠めて居るといふは、入平も品蔵もはじめに似合はぬ腰拔武士、義を知り實ある者なら、斯る時こそ命を捨ても渠が力になるべきに流石は命が惜しいと見える、夫に就いても此年頃兄と頼みて身を任せた、金彌は寔に可憐相なと、家中の者の悪口が、早晩二個の耳に入り、最口惜しく思ふにぞ、兩人竊に相談して、主君より身の暇を乞請け、金彌が跡を慕ひつゝ所々方々を經巡る事、既に三十五年に及べど、金彌の行方はいふにおよばず、更に敵は手掛さへ今に知れざる事の趣、入平品蔵兩人が、かはる〴〵に物語るを、つく〴〵と聞いて二刀齋は、一回は驚きしが、大器量の老人ゆゑ、獨莞爾とうち笑ひ　二刀「はじめて聞いたお前がたのお身のうへ、義のために家を捨て此年月の御心勞、爾こそと察しられますが、お歡び被成まし、その讐は知れましたぞ　品「ナニ、あの敵が知れたとは　二刀「さア其牛尾田主水とは　則拙者が前名にて、沼澤氏を手にかけたも、斯まうす二刀齋　入「扨は和殿が牛尾田か　品「主水であるかト兩人が、かねて用意の仕込杖を膝の邊に引きつけて、卒と言はゞ忽地に斫つてかゝらん勢に　二刀「アハヽヽヽヽ、イヤ御兩人お急促なされな、其許達の御存知ないを此方からしてあからさまに讐と名告る程の者が、今更逃げも躱れも致さぬ、その金彌とまうす者の身の成行もぞんじて居れば、夫も委しくお咄しまうさう、兎角いふうち日が昏れた、まづ方燈をつけますから、莫でも呑みながらゆるりとお聞きなさるがいゝト言ひつゝ立つて灯火をともし、扨過ぎし頃伏見の里にて、新之丞が難儀を救ひしその事のはじめより、渠は實名金彌なる事、又かの者が最期のありさま、箇様箇様如此〴〵と、事落もなく物語り　二刀「因縁といふ物は妙なもので、今日がすなはち新之丞が三十三年の祥

月命日、最前こゝろざす佛があるとまうしたのも他ではござらぬ、猶是でも疑はしくば、お目に懸ける物があるト手近にありあふ佛壇より、ひとつの位牌を取出し　二刀「俗名袖岡新之丞、又の名沼澤金彌、箇樣にしるして置きましたも、若や由緒の人にも逢はゞ、これを渡して進せやうと年頃思つて居た處、幸今日の命日に其許達にお目に懸るは、身にとつても大慶至極、我等は箇樣に老朽ちて、翌をも知れぬ露の命、御兩所に進上致さう、位牌と偕に白髮首を、故郷へ持參致されたら三十五年の艱難辛苦も、全く水の泡にはならぬ、去りながら私に爰で勝負を決しては所の者の迷惑ゆゑ、當所の地頭鹽谷殿へ是等のよしを訴出で、免許を受けたそのうへにて、小生も老期の思出、晴の勝負を致して見やう、翌は互に敵なれど、今宵までは客主、うちくつろいで休まれよト落着切つた二刀齋が、樣子に二個も勝負を急がず、其内に二刀齋は手づから茶粥をこしらへて客にも薦め、その身もすゝりて、おの〳〵箸を納むるにぞ　二刀「扨はや何も御馳走を致す事の出來ぬので、お氣の毒にぞんじます、今宵は夜と侶語り明すお約束で泊めましたが、お二個ともに旅のお勞もあらうのに、明日はまた晴の戰、すこしの間もお互に休息いたす方が宜からう、時は秋の中浣なれど、此あたりは蚊もすくなし、枕はそこらに何なりと、ある物で間に合せ、是なと裾に掛けられよト小袖二つを取出し渡すを二個は受取りて　入「何から何までお心づけ辱うぞんじます、併しながら讐を討たうと參つた者が、敵のおん身に宿を貸され、斯念比にお咄を致し、ひとつ所に寐起まで致すといふは、例すくない事でございませう　二刀「いかさま夫もそんな物ぢやが、義の爲にお前がたが、讐を尋ねてまはらるゝと、聞いては何樣も名告らずには居られず、生きて甲斐ない命ひとつ、まゐらせやうとは言つたものゝ、素より互に恨もなければ、翌立合に及ぶまでは、麁略に思ふやうもなし、扨種々の長咄で思ひの他に夜も更けた、老人なれば我等からお先へ御免を被ります、誰殿もお休み〳〵ト言ひつゝ其處へ轉寐の、枕につくと忽地に、心地よげなる高鼾、前後も知らぬ爲體に、入平と品藏は、互に目と目を見合せつゝ、心の裡に思ふやう、よしや互の怨はなくとも、敵と名告りし我々を、現在側へ置きながら、鼾をかいて寐るといふは、大丈夫なる膽と、兩人竊に驚きしが、主翁に寐られて何時までも、起きてあるべきやうもなく、偕に枕につきしかど、何とやらん心に掛かりて、眠らんとすれど寐つかれず、二個は長き秋の夜を、まんじりともせず居る程に、稍明烏の告渡る頃、二刀齋は眼を覺し、朝の炊をなしつゝも、また兩人に箸をとらせ、その身も腹をこしらへて、扨三個がうち連立ち、村長方へ趣きつゝ、敵討の仔細をば箇樣〳〵と物語り、双方より願書をかきしたゝめ差出すにぞ、村長は駭きしが、うち捨ておくべきことならねば、三個を我家に止めて百姓どもにうち守らせ直さま、赤穗の城に馳けつけ事恁々と訴出でしに、鹽谷殿聞しめされ、這は珍らしき讐討なり、城下はづれの松原にて、早速まうしつけよとありて、則檢使の役人に警固の人數をさし出さるれば、その沙汰忽地四方に聞え、是を見んとて遠近より走集る見物は、さながら山をなすまでに、最晴がましき事なりけり、爾れば又村長は是等のよしを立歸り、かの三個に報ぐるにぞ、双方偕に歡びて又村長に伴はれ、城下はづれの松原に既にして到るほどに、入平も品藏も共に五十歳の坂を越えて、はや壯年にはあらねども、二刀齋が老朽ちて腰も斜にかゞみしに競ぶれば猶壯なるに、三十餘年の本望を遂ぐるは今此ときにありと、思ふ心の勇まるれば、縱ひ那者武術すぐれて大丈夫の膽ありとも、丈の知れたる瘦軀、此兩人が立對はんに、何程の事あるべきと、斯る時のためにとて、兼て用意の衣服大小、笈の裡にをさめおきしを取出して身にまとひ、見苦しからず打扮ちつゝ、四

邀をはらうて立出づれば、夫には引替へ二刀齋は、爾のみ身形も取繕はず、僅に大小二振の木刀ばかりを腰に横たへ、三個齊しく檢使に對ひ、名をなのり意趣を演べて、既に勝負に及ばんとするにぞ、檢使をはじめ許多の見物、皆手に汗を握りつゝ首を伸してながめ居る、此段いまだ長けれども、紙員爰に限あれば、その立合の趣は中の卷のはじめに說くべし。

（卷の三十一終）

第六十三回

恁る所へ見物の中を左右におしわけて、二八ばかりの一個の處女が矢來の裡に走入り、警固の武士にうち對ひて　むすめ「私は二刀齋の女兒でございますが、片島の親類の所へ參つて居りまして、今朝あちらから歸道に、此噂を聞きましたから、宙を飛んで駈付けました、相手は二個のそのうへに、まだマア血氣壯の人達、私の親は御覽の通り、とぼ〳〵致して居りますれば、勝負の程が心元なうございます、及ばぬまでも私が助太刀を致したうございますから、何卒おゆるし下さいますやう、何分お願ひまうしますト思ひ入つて賴むにぞ、警固の役人うち聞きて「歳の行かぬ處女にはけなげなる其願、去りながら讐打に助太刀といふ事はゆるしがたき筋なれば、双方得心のうへならでは何とも計らひ難きゆゑ、先二刀齋にまうし聞け、渠が所存をうけたまはれ、そのうへにて時宜によらば相手の者へは我々より申聞かする事もあらん、ト說きさとしつゝ二刀齋に、是等のよしを言聞かするにぞ　二刀「アハ、、、是は〳〵、女兒がよしない事をまうし出で、別段御厄介に預りまして、何ともはや氣の毒千萬、かならずお構ひ下さるなト挨拶なしつゝ、娘に對ひ　二刀「其方が何か願うた趣、親を思ふ志は爾もあるべき事ながら、壯年ときから此歳まで劒道で世を渡つた某、いかに老いさらばひたとてまだ〳〵腕に覺はある、殊更今日の仇討は、互に恨はなけれども、あ

のお二個が義のためとて、三十五年の心盡しを、無にするも氣の毒ゆゑ、事の爰には及びしなれば、素より勝負は時の運、討ち討たるゝも命數なれば、縱ひ爰にて討たるゝとも、いさゝか苦しからねども、勝負に臨み女兒をば、助太刀にせしとあつては、末代までの名の穢、その義においてはかなひがたし、よしなき事に氣を揉まずと、扣へて見物爲て居やれ、ト叱り付けられ今更に、又返すべき言葉もなく、心ならねどすごすごと、警固の人の後に扣へ、勝負いかにと見るうちも、心のうちにて神佛を念するの外他事もなし、そのとき許多の見物が入らぬ世話なるあだ口々　●「コウ、今日の敵討は爺さんばッかりで、些も色氣がねへと思ふ處へ、おつな新嬢が駈付けて來たから、こいつは面白いと思つたら、爺さんが叱つて引込ませて仕舞つたが、那新嬢となら此身も一勝負やらかして見てへものだ　▲「遊ねへ、したがあの爺さんも餘程聞かねへ氣だと見えるせ、何卒親仁さんしッかりお賴んまうしやす、後には新嬢が付いて居りやすヨ　×「斯々、女兒が來たら、てん〳〵に爺さんの肩を持つうちがをかしい　▲「ナニ然でもねへがの、はじめから這方に居る二個の野郎は、氣にくはねへと思つて居たからヨ　●「萬一爺さんの方が負けると、娘はおいらが引取つて世話を爲て遣らア　×「ヘン引取るにも住居もねへ癖に、まさか娘を連れて親方の所の二階に居候もあんまり氣が利くめへ　●「宜いといふ事ヨ、そのときにやア何處ぞ小氣意な内を見付けて、那嬢に茶見世でも出させて見ねへ、其利潤でも隨分懐手を爲て喰つて居られやす　▲「コレサ、お前方もつまらねへ取越苦勞をするぢやアねへか、ソラ〳〵最う勝負がはじまりさうだ、空言をいつて居ねへで、宜く見物をするがいゝやア　●「成程然だな、オヤ〳〵爺さんが眞中へ出掛けた、なか〳〵那して見ると威勢が宜いなア、トおのおの矢來に身を寄せて、脇目も振らず見る程に、矢來の裡には那三個が、ひとしく檢使に會釋して、場合をはかり双方に立別れつゝきッと見て　品藏「いかに松下二刀齋その前名は牛尾田主水、和殿先年水口の松原にて沼澤傳五左衛門を討たれしゆゑ、讐を報はん爲子息金彌が出國せしかば、我々兩人義の爲に金彌に助太刀致さんとて、三十四五年が其間、所々方々を尋ねめぐれど、更に行方も知れざりしにト言へば、入平語をついで　入平「然るに昨夜はからずも、和殿の口より恁々と、沼澤親子二個まで餘儀なき譯にて討たれし趣、素より我々兩人は互に恨はあらねども、義によつて致す所は又捨てがたきことなれば、事の爰には及びしに、見受けしところ帶刀に眞劍を用ゐられず、木刀ばかりをたばさまれしは、相手に足らぬと我々を侮られたるゆゑなるか、相手に木刀を持たせおき、此方眞劍にて立對ひては、よしや和殿を討ちたりとも、我々が本意にはあらず、戲事にはあらざるを、いざ眞劍を所持せられよトいふに二刀齋うち笑みて　二刀「そのお辭も無理ならねど、それがし年頃遊に習いて、久しく手馴れし木刀なれば、せめては一期の思ひでに、この木刀にて晴々しき勝負を做さんとぞんぜしゆゑ、態と是をば携へしが、木刀なりとてそれがしが、拳のうちに覺あれば、その切味はなか〳〵に、眞劍にもやは劣るべき、さらば某二刀をもつてお相手になるべければ、和殿等兩人左右より、一度に討つてかゝられよト言ふより速く二刀齋は、腰なる二本の木刀を兩手にとつて待ちかくれば、這方の二個は大に怒り、憎き爺が高言かな、爾りながら兩人が一度に討つてかゝりては、いよ〳〵もつて卑怯に似たり、我より蒐らん否我からと、互に先をいどみしが、終に品藏爭ひ勝つて、爾らば目に物見せて呉れんと、覺の一刀拔きかざし、斫つてかゝれば二刀齋は、右手に取りたる木刀にて、受けつながしつ戰ふほどに、丈の知れたる痩爺、只ひと討と品藏が侮りしには事かはり、神變不思議の太刀筋に、打立てられてなか〳〵に、斫込む透のあらばこそ、受太刀にのみ打ちなされ、いと

も危く見ゆるにぞ、堪りかねたる入平が、はや外聞も厭はゞこそ、有無をも言はず左より討つてかゝるを物ともせず、左手に持ちし木刀にて、是もおなじくさゝふれば、此助太刀に品藏は、僅に力を得たりけん、色を直して双方より、透もあらせず討込む太刀風、いづれにおろかはあらねども、二刀齋は此年頃鍛ひに錬ひし藝術なれば、刀の中に在りながらも、いさゝか動ずる氣色もなく、右にあたり左に拂ふ飛鳥の如きはたらきは、血氣壯の若者にも劣るべくも見えざるにぞ、品藏も入平も心ばかりはいらだてども、惣身汗を汲流すまで、しだい〳〵に戰ひ勞れて、打つ太刀しどろになりしかば、二刀齋は思ふやう、はじめよりして渠等が手の裡只一打になさん事、難くもあらぬ所爲ながら、三十五年の年月を尋ねめぐりし艱難辛苦を、徒にさせんも本意なからん、爾ればとて渠等が所行、義の爲とは言ひながら、金彌が色香に迷ひたる淫慾よりして事おこり、人の批判のうしろめたさに、助太刀なさんと出國せし、斯るたはけた白痴者に、老いさらばひし命なりとて、求めて失ふべきにあらず、はや是程に戰うたれば、定めて渠等が心にも、及びがたき事を知りて、倶に覺悟も究めつらんを、爾らば此世のいとまを取らせ、迷の夢を覺させ呉れんと、右よりすゝむ品藏が斫込む刀を引つばづし、丁と打つたる木刀の手練の手の裡あやまたず、水もたまらず品藏が、首は遥に飛散つたり、是にぞ駭く入平が、怯むを得たりと附入りて、左劔に拂ひし拳のさえに、腰のつがひを打ちはなされ、二ツになりてぞ倒れける、此ありさまに群集の見物、したりやしたりと譽むる聲、しばしは鳴りも止ざる程に、娘は覺えず駈出て、天を拜し地を拜し、悦びいさむぞ道理なる。

恁て檢使の侍は赤穗の城に立歸り、此旨委に言上なすにぞ、鹽谷殿聞しめされ、名作の切物にても手の裡すぐれし者ならねば、爾程には斫れざるを、況して木刀にて兩人まで斯のごとくにせしと言ふその老人は常人ならじ、目通まうし付けよとあるにぞ、頓て二刀齋は御前に召され、身のうへの事何もかもあからさまに申しあぐれば、爾らば當家に召抱へんとあるを、二刀齋堅く辭みて、只老樂をのみ願へば、然らば和爾に娘の他に男子ありやと尋ねられ、いかにも一個の悴ありて、名を政之丞と呼ばるゝが、當時劍道修行のため都に遣はしありとまうせば、此うへはその政之丞を抱ふべしとて、早速都より召呼ばれ、新知百石たまはりしに、此政之丞も父におとらぬ智勇すぐれし者なれば、追々に登用せられて高百五十石に及びし頃、鹽谷家滅亡は爲たるなり、爾ればにや討入の夜も二刀をもつて敵をなやませ、比類なきはたらきせしも、父二刀齋より授けたる、家傳の妙旨を得しゆゑなりとぞ、猶此外に政之丞のうへには種々の餘談あれども、牛尾田のみの傳にては、看客讀倦き給はんかと、次回は物語他事に及ぶ、

辭世　もの、ふの道とばかりをひとすぢに思ひたちぬる死出の旅路に　牛尾田高教

折から見出しつる儘因に記す、這一首にてもこゝろばへのあらはれて、其人を今見るの心地す。

第六十四回

八百屋の辭　「大東冬菜エ、冬菜の仕廻は宜しうトさもやつれたる商人が、賣行く跡より一個の中間　中間「オイ八百屋さんちよッと待ちねへ　やほや「アイ、冬菜ばかりになりやした、仕廻だからまけて置きやせう　中「ナニそんな物は入らねへが、此身が旦那がお前に何だか逢ひてへと言つて、那方の茶店に待つてござるから、一寸來て呉んなせへ　やほ「夫ぢやァ菜を買つて下さるのぢやアござりやしねへか　中「何樣だか知らねへが、速

く來なせへト引立てられて、不性〳〵に跡につきつゝ、行く程に、かの中間は茶店にいたり、門に八百屋を待たせ置いて、主人に恁と告げしとおぼしく、再び其處へ立出で來り　中「旦那は奥の座敷にござつて、爰へ呼べと言はッしやるから、草鞋を脱いであがんなせへト言はれて、八百屋は合點ゆかねど、否とも言はれず足を洗うて、其儘奥の一ト間にいたれば、五十餘の武士が、這處へ〳〵と呼入れながら、四邊見廻し小聲にて　侍「貴樣は婿の寒助ぢやアないかト問はれて八百屋は膽を潰し、姑く返事にさしつかゆるにぞ　侍「イヤサ、貴樣の惚りより、此身が貴樣の打扮を見て、どんなに惚り爲たか知れなんだが、途中で物を言ひかけては、供の男の聞く前もあると思つたから、此茶店へ呼入れて、家來には外に用事を言付けて先へ歸したから、何も遠慮な事はないが、何にしても貴樣の姿、いかに浪人の所業にせまり、尾羽うち枯したからと言つて夫が鎌谷の家來若村寒助とは、何樣見ても思はれない　かん助「イヤ最う左内さま、貴公にお目に懸りますのも、實に面目次第もない事でございますが、私も當所へ下りましてから、何卒宜い住口もございますなら、主取を致したいものとぞんじ居りますうち、大煩ひを致しまして、既に命も危いところを、漸う逝れまして、此通り體は大丈夫になりましたが、僅ばかりは貯へて居りました金子も、其物入に遣ひ果しまして、とう〳〵こんなつまらない者になつて仕舞ひましたが、只今の所では、決句是も氣樂で宜いかとぞんじます、夫に就けても不思議なは左内樣、貴公は播州三日月の御城内で、郡役所をお勤めなさるとの事でございましたから、なか〳〵此鎌倉などへお下りなさる事はあるまいと思つて居りさしたに、計らぬ事にて御目に懸りました　左内「然れば寒助殿聞いて下され、先達て貴樣が赤穂を立退かるゝとき、三日月の城中の此身が所へ立寄つて言はッしやるには、俄の事にて浪人いたし、さし當り身の落着もあらねば、是より鎌倉へ參り、主取の口を尋ねて住込むまで、妻をばしばらくお賴みまうすとあるゆゑ、素より此身が娘なれば、預る事は仔細なし、貴殿吾妻へ下られて、住居でも持たるゝやうになつたら、早速に知らせ給へ、我等かたより送らせてなりとも娘を遣はしまうさうと堅くお約束を致したところ、其後何の音信もなく、我等夫婦が案じるより、別けて娘は氣を揉んで居るうち、妙な僥倖もあるもので、我等は急に役替を致して、鎌倉勝手をまうしつけられたから、是では寒助殿に逢つて、直々安否も聞かるゝ事と、家内の者を殘らず引連れ、當所へ引越し參るに就けては、先達て娘に添へて預け置かれた貴殿の家財諸道具も、我等が荷物といつしよにして、偖鎌倉へ着くとその儘、人をも賴み自身にも歩行て、貴殿の行方を尋ねても、一向在家が知れなんだから、大に心配を致して居たが、まア〳〵無事の對面を爲たので、安心は爲たものゝ、貴樣は常々筆道に達して居る事も聞いて居れば、仕官に住込む口は遠いにもしろ、大都會の事だから、醫へば手習師匠をするとも、然ないところが、筆先で何か今日を送る丈の事は出來さうなものだのに、青菜小菜を賣つて歩行くとは、あんまり零落やうがひどいので、先刻途中で見掛けたときも、實に見違へるやうだかん「然思召すも御尤でございます、私もせめて若黨奉公でも致したいとぞんじましたが、さし當つて口もなく、そのうちに喰方に困るやうな譯でございましたから、據なくこんな身のうへになりまして、寔にはや面目次第もない事でございます　左「なる程餘儀ない譯でもあらうが、途はぬうちは知らぬ事、斯對面を爲たからでは、獨の婿をそのやうなさもしい風俗をさせても置かれない、幸此身が方に預つた貴樣の家財も持越してある事ゆゑ、何方になりとも相應に内を持たせ、娘も送遣はして、主取の出來る迄は、浪人暮にても細い煙を立てゆかれる樣に爲て進せたいものだが、何にしろ爰で何時までも相談をしても居られ

す、早速斯といふ事にもなりかねやうから、何れの道此身が貴殿の所へ近日參つて御相談も致さうが、今のお住居は何處の何といふ所だか一寸書付けて置きたいものだが　かん「へイ其義は何様も只今は些申上げかねますやうでございます　左「何故又夫が言ひにくいのだネ　かん「イエ實は私の住居と申してはございませんから其處で何様も　左「エ、夫ぢやア宿なしとでも言ふやうな　かん「イエナニまさかに宿なしと申す程でもございませんが、當分は先づ心易い者の方に居候を致して居りますから　左「ナニ居候とは何様いふ事だか、拙者などは御當地不案内故とんと左様な事は　かん「何さま是はお分りなされぬ筈でございます、居候とは食客の事でございます　左「いかさま左様かな、夫では其家に尋ねて參つて對面を致しては、不遠慮だと申されるのか　かん「左様でございます、貴公方がお出なさいましては御外聞にもかゝはる事もございませうが、何れにも私が近日お尋ね申しあげますやうに致しませう、其うへ懇意の者がいろ〳〵信切に世話を致し呉れますので、品に寄りますと遠からず主取を致すやうにもなりませうかと存じますから、必ず深くお案じ下さいませぬ様にお願ひ申します　左「なにさま貴公が來ると言ふ事なら、此身から尋ねて往くにも及ばないが、是は言はずと如才もあるまいけれども、此身も當時は役柄も勤めて居れば、婿だと言つて表向其姿でござつては世間の聞もいかゞ故、屋敷の門も四ツ迄は明いて居るから人の目に立たぬやう、夜分こつそり來るやうにして貰ひたいものだト言ひながら、懐中より金子三歩取出し　左「さし當る所どうかして進せたいが、今日は色々買物などを致して持合がすくないから先是を取つて置かッしやい　かん「是は〳〵有難う存じます、四五日のうちにはお禮かた〳〵上りまして、積る御挨拶をも申上げませうト件の金を受けいたゞき、暇を告げて退くにぞ、左内も頓て茶店を立出で我家をさしてぞ立歸りける。（卷の三十二終）

正史実傳

いろは文庫　卷之三十三

第六十五回

播州朋の城主たる何某侯の御内人、當時鎌倉の上屋敷に住居なす荻野左内といふ者あり、折しも非番のつれ〳〵にや、獨り一間の裡にありて、物の本など打詠めても、心にかゝる事ありけん、廣げし本にも心とまらず、溜息のみついて居るところへ、女房のお種といへるが、娘お冬といふを連れて、夫の側へ找み寄り　たれ「モシ貴公、昨日婿の寒助どのに逢つたと被仰つたばかりで、委しい事は追つて咄さうとお言ひなさるから、今日も種々お聞きさうして見ても、この事を言出すと、咄を他のことに紛らしてお仕舞ひなさいますが、何ぞ私どもに被仰つて悪い事でもあるのかは存じませんけれども、お冬には現在夫で見ますと、此嬢が氣を揉んで、樣子を聞きたがるのも無理とは思はれませんのに、貴公はまた何だか物思はしさうなお顔付で、溜息ばかりついてお在なさるから、猶心掛りでなりませんヨ、婿どのにお逢ひなすッた時には、どんな身なりをして居りましたへ、大かた形風俗でも樣子は知れるものでございますが、貴公お逢ひなすッたとき、辭でもお掛けなすッたのか、お隠しなさる程氣になりますヨト言はれて左内は吐息をつき　左「何も貴樣達に隠す譯もないのだが、あんまり馬鹿〳〵しくッて、咄すにも咄されないからヨ　娘冬「オヤ、夫ぢやア他に女房でも持つて、私には暇を遣るとでも申しましたのかへ　左「女房でも持つやうなら

まだしもだが、イヤハヤひどい零落やうで　冬「そんならまだ主取も爲ないで、浪人をして居るのでございますかネエト言ひながら目に涙を浮める　左「イヤサ假令浪人でも、腰の物でもさして居れば聞えるが、此寒空に荒布を見たやうな腰ッきりの物をひとつ着て、大束冬菜と言つて賣歩行て居るのを見かけたときは、此身もぎよッと爲たが、どんな身分にならうとも婿に違ないから、茶店の裡へ呼込んで、段々樣子を聞いたところが、大煩ひをして持つて居た金も遣ひ果し、詮方なしに八百屋と迄なり下つたと言ふノサ、ト聞くうちお冬はしく〳〵泣出し　冬「夫では嘸難儀を爲ましたらうネエ、いかに暮に困るからと言つて、そんな者にならないでも、他に爲やうもありさうな物ぢやアございませんかネエ　左「此身も然思つたから、何ぞ筆の先でゞも、喰ふ丈のことは出來さうなものだにと言つたけれども、今では決句氣樂で宜いなんぞと言ふ所を見ると、元の侍になる氣はないのではあるまいか、とも思はれるやうだ　たれ「夫御覽じまし、私ははじめから、那人は何だかはたらきの無ささうな仁だとまうして居りましたら、貴公が、イヤ〳〵あの婿は見どころのある男だから、鎌倉へ下れば隨分相應な知行で、急度抱へられると被仰いましたが、何樣して今時は、目から鼻へ抜けるやうな者でも、めつたに抱へられる事には、往かないさうでございますものを、あんなむつ〳〵した人を、誰が知行を出しますものかネ、夫にしても可憐相なのはお冬でございます、たつた獨の女兒を、八百屋なんぞをする者に、連添はせては置かれますまい、泪金でも先へ渡して、這方から離縁をして、些も此孃の年を取らないうちに、何處ぞ相應なところへ緣付ける方が宜うございますヨ、あんな者に添はせて置いて御覽じまし、一生此孃が苦勞をするばかりでございますハネ　左「イヤイヤ、夫は貴樣の了簡違だ、貞女兩夫にまみえずといふ事は知つて居るだらう、假令どのやうに零落やうとも、夫はその者の運不運で是非もないことだ、今殆から離縁を爲ようと言つて來ても、此身は承知を爲ない積りだのを、這方からそんな事を言ひ向けるなどとは思ひも寄らない事だ、婿といへば子も同樣だから、あの儘に見捨ては置かれぬ故、急に主取の口もなくば、浪人相應な家でも持たせて、細い煙も立てる位な事は爲て遣らうと思つたから、其事も寒助に咄して置いたのだヨ　たれ「そりやア最う私だッて、倦きもあかれもしない夫婦中を引裂きたい事はございませんけれども、世間體をぞんじて、今のやうには申しましたが、貴公が夫程までに思召して下されば、私も此孃もどんなにか嬉しうございますヨ、そして今居る所もお聞きなさいましたか　左「夫も聞いたが、當時他の處に掛人になつて居るゆゑ、尋ねて來ては遠慮な事もあるから、何れ這方よりお屋敷へ上りますと言つて、何分自分の居る所を隱して言はないには困つたが、推しても聞かれないから其儘別れたノサ　たれ「オヤ夫ぢやア爰へ尋ねて來ると言ひましたかへ　冬「萬一その時、あんまり見苦しい形でも爲て來ましたら、お爺さんの御外聞にでもなりは爲まいかと思ふと、夫も又苦勞でございますネエ　左「ナニ其事は寒助にも呑込ませて置いたから、夜に入つて目立たないやうに來る筈だが、何にしろ來さへすれば、咄が何樣とも速くついて宜いけれども、又つく〳〵と考へて見るのに、常からあんな物堅い風の男だから、主取でも爲て身形りでも拵へないうちは、手前達に逢ふのも外聞が惡いとでも思つて、其處で自分の居る處も深く隱して言はないのではなかつたかと、今更思へば那とき推しても居る所を聞いて置けば宜かつたに、殘念な事を爲たと、種々思案をすればする程、何だか物が手につかないやうで考へてばかり居たが、假令あの男が來ないまでが、手紙をよこすと言ふものか、何か二三日のうちにはいづれの道、樣子は知れるであらうから、深く案じる事もあるまいはなト言はれて女兒も女

厄も、心ならねど詮方なく、是より日毎に寒助がその音信を待つ程に、四五日立てども便もなく、餘りの事に思ひかねて、左内は妻と娘に對ひ　左「近日上ると言つてから、まだ格別日間もないけれども、萬一自分の身に恥ぢて來ないやうな事だと、いつ迄待つても詮のない譯だから、内で物を思はうより、今日は折から非番でもあるし、ぶら〳〵出掛けて尋ねたら何樣だらうノウ　たれ「夫でも貴公、居處がしッかり知れないでは、雲をつかむやうな尋物ではございませんかへ　左「イヤ、何でも此間逢つた所から、そんなに遠い處に居るのとも思はれない樣子だッたから、那近所へ往つて聞合せたら、大體手掛を聞出さない事はあるまいと思ふから、まアむだと爲て出掛けて見やうヨ　冬「夫だと寔に御苦勞さまでございますけれども、心ゆかしにもなりますから、お願ひまうしませうか、ネエお母公さん　たれ「然サ、そんならまアお出なすッて御覽じましなト言ふに、左内は點頭きて仕度なさんとする所へ、草履取の中間があわたゞし氣に座敷に來り　中「モシ旦那さま、八百屋さんが參りました　左「馬鹿な奴ではないか、八百屋が來たからと言つて此身に言ふ事はない、婆々どん用があるなら言付けて遣らッしやい　たれ「ア、まア何も宜いと言つて遣んな　中「イエサ、不斷來るのではございません、此間途中で茶店へお呼込みなすッた八百屋さんでございます　左「ナニ、あの八百屋が來た、寔に困つた男ぢやアないか、來るなら夜でもこッそり來いと、那程言含めて置いたのに、夫ぢやア勝手口からでもこッそり來たのか　中「イエ御玄關から大風に出掛けて參りました　左「イヤハヤ呆れた者だ、定めし荒布のやうなぼろ〳〵の形を爲て來たであらうな　中「イエ〳〵大違でございます、只今御玄關から物申と言ふ聲が致しましたから、出て見ますと立派なお侍が供を一個連れて、拙者は若村寒助とまうす者だが、左内殿御在宿ならお目に掛りたいと申しますから、ひよいと仰向いて顏を見ますと、此間の大東冬柴でございましたので、寔に恂り致しました　左「ハテ何樣も合點が往かねへ、此身が此間別れるとき金を三歩遣つては置いたが、なか〳〵其位な事で供まで連れて來るやうな身形の出來る筈がないが、萬一夫は人違ではなかつたか　中「ヘイ、人違か何か、其處は何ともまうされませんが、若村寒助といふ者だとまうして、ソレ〳〵しかも手札を出しました、ト懷をかきさぐりて名札一枚さし出すを、左内は取つて打詠め　左「何さま是では間違もあるまい、尤此程の咄に、主取をする心當もあると言つたから、そんな僥倖でもあつたのか、何にしろ逢つて聞けば分る事だから、先々客間へ案内をするが宜いト言はれて件の中間は又玄關へと急ぎゆく。

第六十六回

跡に左内はいそ〳〵と　左「コレ婆アどの、寒助が八百屋の形で來れば何樣でも宜いが、立派になつて來たと聞いては此形でも逢はれまい、其處の不斷袴を出して下せへ、お冬も久し振で夫に逢ふのだから、髪でも速く撫付けて、垢のつかない着物でも着替へるが宜い、そして肴屋を見せに遣んなせへ、何も別に氣張つた事をするにも及ばないが、珍らしく來たのだから、些は馳走もするが宜からう、たしか寒助は蕎麥が好だと言つたッけ、そして酒は宜いのと言つて遣らないと、此間のやうな惡いのをよこすから、宜く斷つて遣んなせへト獨で彼是氣を揉むは、餘程世話やき親仁と見えたり、恁て左内は袴を身につけ、短刀一本携へて、客間の裡にいたりて見るに、いかにも婿の寒助が、大東冬柴を貰つて居た、ぼろ〳〵爲たる、すがたに引替へ、黑の羽織に茶宇の袴、腰の物の拵まで、一寸見ても直うちの知れぬ、出來合ものにあらざれ

ば、何様してこんな工面をしたかと、訝りながらも立派な打扮に、自と辭もあらたまりて　左「是は〳〵寒助どの、宜くこそお尋ね下すッた、實は這方でも此身をはじめ妻も女兒も、今日は來られるか翌は見えられるかと、毎日お噂ばかりして待つて居ました　かん「夫ははや恐入りました義でございます、先以て皆々様お揃ひなさいまして御壯健の御様子、何より大慶にぞんじます、扨先日は途中でふとお目に懸りまして、其節は種々御深切に仰下さいますのみならず、金子までお恵みに預りまして、有難い仕合にそんじ上げました、早速にもお禮かたぐ〳〵上ります筈でございましたが、種々身分の事に就きまして手引のなりかねます事がございましたから、ぞんじながら大に御無沙汰を致しました　左「アイ〳〵、定めて何かそんな譯でもあらうかと思つて居ましたト言ひながら後を見かへり　左「お種や女兒を連れて速く來ないか、ナニ、お茶をこしらへて居る、宜いはサ、他のお客ではなし、粲花はゆるりとでも、まア古花でもお茶を持つて來て、速く顔を見たり見せたりするが何よりの御馳走だ、ハ、、、、ト言ふうちお種お冬も出て、みなそれぞれの挨拶あり、別けてお冬は久しぶりにて夫に對面する事ゆゑ、積る咄も聞きたからんが、兩親の居る前といひ、親も夫も物堅き氣質とかねて知る故に、側へさし寄りうち解けたる物語さへ遠慮して、辭ずくなに安否を問ふなど、ふかき意味ある趣は、筆にもなか〳〵述べがたく、よし又書取りたればとて、只くだ〳〵しくなるのみなれば、夫等は爰にはぶきて言はず、看官宜しく察し給へ、此うちにお種は勝手にて用意せし酒肴を、お冬に運ばせその身も持つて、追々に座敷に出せば、左内は盃を取りあげて、寒助にすむる程に、客も主も呑む口ゆゑ、さしつさ、れつ酒盛に、座もおのづからくつろげば、左内はいと〻笑まし氣に　左「遥遥のお客に何も御馳走はないが、何卒今日はゆるりと爲て貰ひたい、夫はさうと寒助どの、異な事を聞くやうだが、先日貴様に逢つた時は此身も悩りするやうな零落やうだッたから、薄々は家族にも咄して、陰ながら心配を爲て居たが、夫には引替へ今日は又、見違へる程な立派な打扮、纔四五日の間に何様してそんな結構な身のうへになんなすッたのか、一向此身には合點が往かない　かん「なる程御不審に思召すも御尤でございますが、先お悦び下さいまし、此程もちらりとまうし上げましたかとも存じますが、深切に世話を致し呉れます者がございまして、此度思ひがけなく、西國方のさるお大名へ、新知百石にお抱になりまして、其うへ仕度金まで下さいましたから、此通り衣服大小まで假なりに調へましてございます　左「ヤ、夫ははや結構な事だ、婆アどの聞かしッたか、此身が見處があると言つたのは爰だが、何様だ、なか〳〵此身の眼力はきつからう、寒助どの、器量では百石では安いものだ、其處でそのお屋敷へ住込むやうになつたら、から、縫物その外遠慮なく、娘に言付けさッしやるが宜い、其處でそのお屋敷へ住込むやうになつたら、定めてお長屋でも下さるやうになるだらうから、其節には預つて居る家財は素より、娘にも小女の一個も付けて遣るやうに爲ませうから、夫等も都合の宜いやうに相談をなさるが宜い　かん「段々厚い思召有難うぞんじますが、その御屋敷の殿様が、近々お國へお立に成りますさうでございますから、品に寄りますと私も直にお供にお連れなさるやうな噂も聞きましたから、若さうなると來年お歸りまで又一年、お冬を御厄介ながらお願ひまうす事になりますかも知れません　左「そりやア最う、一年が三年でも這方は構はないが、住込が出來たうへでは、一刻も速くお冬をもいつしよにして安心が爲たい譯だ、夫に就いてもお冬も久しぶりの事だから、兎も角も今夜は這方へ泊つて、ゆるりと何かの相談を爲るが宜からう　かん「へイ有難うございますが、明朝其殿様へはめじて御目見を仰付けられますので、今晩は是非世話を致して呉れます人の

所まで參りませねばなりませんから、いづれ明日首尾よく目見が相濟みましたうへ、明晩又出まして御厄介になりますでございませう　左「なにさま然いふ譯なら無理にも止められないが、併し日一ばいは爰で咄して往つても宜からう　かん「イヽエ、日短の時分でもございますし、彼是心もせきますれば、最うお暇に致しませう、存寄らず種々御馳走になりまして有難うございましたト言ひつゝ、懐より、紫の服紗に包みし物を取出し　かん「お冬、是を翌の晩來るまでおぬしに預けて置くから、仕舞つて置いて呉んな　冬「ハイ、夫ぢやア明晩は急度お出でなさいますかへト小聲で言へば頷くばかり、左内夫婦に別を告げて、玄關さして立出づる、此時を是いつぞと言ふに、元祿十五年午の十二月十四日、今宵ぞ亡君のおん爲に、大星由良之助をはじめ四十餘人、高野の館に亂入して、怨を報はんと盟約せし、心は爾ながら金鐵に異なるべくもあらねども、流石岩木にあらざれば、今宵かぎりの名殘ぞと思へば胸も張裂くばかり、夫と辭に出さねど、心の裡に暇乞、涙かくして出往くを、神ならぬ身の左内夫婦も、お冬もそれとは悟らねど、むしが知らすか何とやら、しきりに別の惜まれて、端近くまで立出でつゝ、今歸りゆく寒助が、影見ゆるまで見送りける。

是よりお冬が預りし服紗包を解くにいたりて、はじめて寒助が本心を知るの一段より、猶寒助がうへの物語を、第十二編の卷首に綴り、續いて自餘の義士等が傳の、最哀にして情合深く、義あり節ある實傳を、猶花やかに筆を加へ、引きつゞき出版なすべし。

（卷の三十三終）

いろは文庫第十二編叙

所謂四十七士の輩、大星をはじめとして、かの寺岡にいたるまで、必死を究めて讐を報せし、そのこゝろざしに甲乙なく、いづれも眞の英勇なれども、そが中に幸不幸ありて、諸書及俚俗の話談にも、普く美名を知られしもあり、又その事跡の傳らざるは、名をだに、よくも知らぬもあり、尤名利を貪らんとする、輩にてはあるまじけれど、おなじ忠死を遂げながら、むなしく美名の埋れん事遺憾に絶えざる事なれば、一個〳〵の傳を考へ、猶その妻子一族等が、うへさへ泄さず綴らんと思ふも老婆心ながら、短き才に長物語、只いたづらに編數の、嵩むばかりを奈何せん、いかにせんとて今更に、止むべきならねば、ことしも又第十二編の稿を発す。

去稔の雪漸く解けて
南庭の梅はじめて開く日

爲永春水記

正史實傳 いろは文庫 巻之三十四

第六十七回

左内「オイ〳〵婆アどん、お冬が大さううなされて居るやうすだから、起して遣らッしやいな　たれ「オヤほんにネエ、此嬢は夢でも見て居るのかノウ、コレサお冬や、何をそんなにうなされるのだヨ、目を覚して寐返を爲な、大かた胸へ手でも乘せて居るのぢやアないか、コレサ〳〵ト ゆり起され、お冬は目を覚して起直り　冬「オヤ爰はやッぱり住居でございますネエ、アヽ、怖かつたト溜息をホット吐く　たれ「アレサ氣味のわるい否な事を言ふ嬢だノウ、何ぞ怖い夢でも見たのかへ　長「ハイ、寔に否アな夢を見たのでございますかネ、まだしも夢で宜うございましたが、若も實正にあんな事があつたのなら、何様だらうと思ふと、いまだに胸がドッキリ爲ますヨト鳩尾のあたりを手でおさへながら、顔をしかめていふ　左「ハヽヽヽ、たかが夢だは、そんなに覚めた跡まで思ふ事があるものか、そしてまアどんな夢を見たのだエ　冬「アノッ、所は何處だか分りませんがネ、何でも立派なお屋敷で御ざいましたが、あれが軍とでもいふのか知りませんけれど、其お屋敷へ大勢でおしかけて往つて、切合がはじまりますとネ、その中に内の寒助が交つて居まして、自分も何處か斬られたさうで、血だらけになつて居ますから、アヽあぶない、今に殺されるだらうに、最う此後の方へ下つてお出なさいと、聲を掛けやうと思つても咽がつまつて

物が言へませず、氣が揉めてなりませんうちに、何だか強さうなのが向から出て來ると、直に刈切合ひはじめる樣子でございますから、危くッて見て居られませず、寧の事に側へ往つて加勢を爲やうと思つても、體がすくんだやうで動く事も出來ませんから、氣を揉みぬいて居る處をお母公さんに呼ばれて、漸う氣が付いて目が覚めたのでございますヨ　たれ「オヤまア、とんだ夢を見たものだノウ、夫でも切られた夢を見ると體へ金がはいるのだから、大さう宜いといふヨ、寒助が切られて血だらけになつた處を見たのは、那人が主取をして、是から段々身に金がはいるといふ知らせだらうから宜いぢやアないか　冬「然だと宜うございますけれども、何だか氣にかゝつてなりませんヨ、ト此内左内は手を組んで、つく〴〵と聞いて居しが　左「ハテナ、何樣も氣になる事だはい　たれ「オヤ貴公、何が氣になりますエ　左「然ればサ、此身も先刻から言出さうかとは思つたけれども、おぬし達に餘計な苦勞をさせるでもないと、獨で胸を痛めて居たが、先刻寒助が歸る時の顔を見たか　たれ「ハイ、何だか氣が付きましなんだが、變つた事でもございましたか　左「然サ、那男が今度主取を爲て、翌は主人に目見をすると言ふのなら、心嬉しくッて浮うきとして出て往く筈だのに、暇乞をして別れる時、ホロリと涙をこぼしながら、急いであつちを向いた顔が、何樣も合點が往かないと思つたが、イヤ〳〵、是も年寄の僻目かと、思ひ捨て夫なりに、今夜寐床へ這入つた處が、頻に胸さわぎがするのに、窓の戸へさら〳〵雪がふりかゝる音が耳に障つて些も寐られないから、また思出してつく〴〵と寒助の樣子を考へて見るのに、此間途中で逢つた時には零落果て居た者が、なんぼ深切に世話をして呉れる者があると言つて、然四五日の内に主取が出來て、身のまはりまで立派になられるものでもあるまいが、若夫程に世話をする人があるものなら、繼ひ長々の病氣で貯の金を遣ひ果したにも爲

ろ、青菜小菜を賣らないでも、何様かその人の世話でゝも、最う些と憾の宜い世渡りは出來さうなものだに、零落れやうもひどすぎるが、立派になりやうもあんまり速過ぎると、寐られないにつけて思案を爲て見るに、日外赤穂の城を召上げられた時分には、顯谷浪人が主人の讐討をするに違ないと言ふ評判で、高野の屋敷でもひどく用心が嚴しいといふ咄だッたが、其後は一向讐討の樣子もなく、流石に命は惜しいものか、揃ひも揃つた腰拔と、惡口をいふ者もあつたが、近頃ぢやアそんな噂をするものさへなくなつて仕廻つたが、一體那寒助は義の堅い男だから、何處までも主人の怨を報はうといふ了簡で、敵の樣子をさぐらんために、零落れた體に身をやつし、偖いよ〳〵讐討と覺悟を爲たゆゑ、今日暇乞に來たのではあるまいか、然かと思ふ證據は、先刻咄のうちに、主取を爲たならば何處の何某樣へ奉公住を致したと言ひさうな處を、さる西國の諸侯方とばかり言つたから、夫は何方と問返さうと思ふうち、色々聞く事や言ふ事が多いのに、那男が歸りを急ぐので、翌の晩來た時に聞いても解ると、つひ夫なりにわかれたが、西國方と言つたのは、西方淨土といふ事かと、よしない事まで胸に浮んで、自己ア宵からまんじりともせずに居たが、今又お冬の夢の咄で思合せて見れば、今日は極月十四日、月こそかはれ顯谷殿の御命日、たしかに今夜高野の屋敷へ主人の怨を報はうと、討入を爲たのかと思はれる、お冬は此身達の前では案事ないやうな顏を爲て居るけれども、心のうちでは寒助の事を、些の間も忘れは爲まい、その眞實が自然と通じて、不思議にその夢を見たのではあるまいか、尤夢といふ物は當にもならないものだけれども、夢の告といふ事もあり、正夢といふ事も昔からある物だから、段々考へれば考へる程、何樣も然ではあるまいかと思はれるやうだ、ト言はれて一個は惚りせしが、中にもお冬は涙ぐみ　冬「お爺さん、夫が萬一實正なら、私やア何樣いたしませうネエ　左「ハテサ、若もそれが實正の事ならば、此身は百石に抱へられたのより嬉しはサたれ「貴公もまアとんだ事を被仰るぢやアございませんか、若實正で御覽じまし、寒助が此場で切殺されるか、又殺されない處が、そんな事を爲出したら、只で濟む事ではございますまいに、婿の命にかゝはる事が嬉しいとは、貴公どうぞ被成たのではございませんか　左「馬鹿を言はッしやい、忠臣は二君に事へず貞女兩夫にまみえずといふことは、和女も本が好だから、讀んで知つて居さッしやるだらう、那男が百石で外の大名へ抱へられるといふのは、此身も本望には思はないが、なか〳〵並の敵でないから、これを討たうといふ事は出來る事ではあるまい、然して見れば何時までも浪人をして居られる物でもないから、見苦しい形を爲て居やうよりまア〳〵主取をして、百石にでも在付いたのは結構な事だと歡んで居たが、萬一此身の考へ通り、敵の屋敷へ討入を爲たので見ろ、其處で討死を爲やうとも、又は本望を遂げたうへで切腹を爲やうとも、永世武士の鑑と言はれるのだから、此うへの事はありやア爲ない、ホンニ忘れて居たが、お冬お主に先刻、寒助が何だか預けて往つたぢやアないか　冬「ハイちひさな服紗包を　左「たしか此身も然かと思つた、夫を一寸持つて來て見せなト言はれてお冬は身を起し、用簞笥の引出に入れて置きし小包を取出し來り　冬「オヤ何か大事なものが這入つて居るかして、結へめに紙縒で封が爲てございますヨ　左「ドレ見せなせへト手に取りつゝ、　左「なる程、そして金でも這入つて居るか大さう重い包だト言ひながら、少し考へしが　左「ム、解つた事がある、假令大切な物が這入つて居るにも爲ろ、現在の女房に預けて行くのに封をするにも及ぶまいに、封を結んだのはみだりに明けて見ないやうにしたのだらう、さうして見ると此うちに何か仔細のある事と思はれるから、開いて見たら樣子が知れるだらうト件の服紗包を解きにかゝるゆゑ、　たね「ア

レまア貴公、假令婿の物だからと言つて封じの爲てある物をほどいて、若も然でない時には、預つた此嬢が寒助の前へ濟むまいぢやアございませんか　左「ハテ宜いハサ、若も間違つて見て惡い物でも這入つて居たら、此身が寒助に言譯をするから、お冬の迷惑にもおぬしの樁にもなる事ではない、此身に任せて置いたが宜いト言ひつゝ封をおし切つて、包みし服紗を開き見れば、一封の書狀あり、その上書に荻野左内様へ、若村寒助と認めあるに扨こそと、左内をはじめ女房もお冬も倶におどろくのみ、なほその様子の知れざれば、安き心はなかりけり。

第六十八回

たれ「オヤ、夫ぢやア貴公の處へ書遺して置いた手紙でございましたかネエ、何にしろ速く讀んで聞かせて下さいまし、お冬の心はどんなだらうと思ふと、寔に氣が痛んでなりませんからト言ひながら手燭に灯をともせば、左内は莫盆の引出より、眼鏡を出してかける間も、急がはしげに手紙を開き、讀下す其文章には、

一筆申上殘し候、しかれば今日拜顔の砌には心中の秘事うち明け申上がたく、假に西國方の諸侯へ率公住いたし候やう申しいつはり候へども、實は今晩同盟の者ども申合せ、必死の覺悟仕候、尤も他聞を相憚り候ことゆゑ、委細には申上ず候とも、心底荒増は御推察も下さるべき歟、只ひと筋に思立候うへは、只管最期の場所をのみ相急ぎ候折柄、多筆相認めまうし得ず、日頃の御懇情をも報じがたく、今を御名殘と相成申候、此金子些少ながら、是までは用意にとて相貯へ置候へども、最早身にとつて入用も御座なく候間、拙者亡跡にて冬が身の在附の助とも被成下されたく賴上存候、

此書狀死後に御一覽被下候はゞ、いさゝか形見とも思召被下べく候、以上

ト筆短には書きたれども、赤心其處にあらはれて、いとも哀れに聞ゆるにぞ、お冬はもとよりお種さへおぼえず、ワアッと泣出せば、左内も堪へぬ老の涙せき來るを呑込んで　左「エ、めろ〳〵と泣きをるな、こんな日出たい事はないぞ　たれ「夫だッて是が泣かないで居られますものか、寒助は覺悟のうへでもございませうが、私やアお冬の心根が可憐相でなりません、口では立派に被仰るけれども、貴公も泣いてお在なさるぢやアございませんか　左「エ、馬鹿ア言へ、此身のは嬉し涙がこぼれるのだ、お冬も泣くなヨ、ヨ、おぬしは年の行かない了簡では嘸悲しいとも思ふだらう、夫を無理とは思はないが、能く此身のいふところを考へて見ろ、現在主人の敵を安穩にして置きながら討ちもせず、生涯腰拔武士と人に後指をさゝれても、男の命を大事に思つて連添つて居るのが宜いか、又先刻も言つた通り、此敵はなか〳〵並々の事で討てるのではないのを、千辛萬苦して首尾よく本意を遂げて見たが宜い、夫こそ末代まで美名を殘す大忠臣、然いふ男を良夫に持つたおぬしは、公家高家の奥方になつたよりも仕合者、夫を選んで婿にした此身までが、武士の冥加に叶つたといふものだが、おぬしはやッぱり腰拔でも夫婦になつて居たいのか、よもや良夫を腰拔にするのを本望にも思ふまい、假令生きながらへて、夫婦になつて居た處が、此先長くッて三十年か四十年、いづれも一度は死別をせねばならぬ、只速いと遲いの違ばかりで、おなじ別れないではならない事なら、死んだ跡まで名の殘るやうに爲たいものだ、盤のうへで死ぬばかりが侍士の本意ではない、此身なんぞも義のためか御主人のおためなら、今でも命を捨てるのは物の數とも思つては居ない、寒

助のけなげな志に恥ぢても、未練な涙をこぼすまいぞト勵まされたる父の辭に　冬「ハイ、段々との厚いお辭有難うございます、最う〳〵泣きは致しませんが、然いふ良夫の了簡なら、何故うち明けて一言でも、言つて聞かせて呉れましなんだらう、私のやうな者だからといつて、忠義のために死に往くとまうすのを無理に止めも致しますまい、得心をしたそのうへでは、せめて別の盃でもとり交しませうものに、翌の晩は來るなんぞと、まざ〳〵欺して往かれたのが、それが本意なうございますトいひかけて又伏ししづめば　左「ハテサ、それは愚痴といふものだ、是程の一大事だものを、親子夫婦の中でも口ばしつて、萬一その咄が世間へ泄れては大變だから、本望を遂げるまでは決して口外を爲まいと言ふ盟を立てゝ爲た事に違はない、夫だものを假染にもそんなそぶりを見せてなるものか、まだしも跡々まで心殘のないやうにと、此書置におぬしの身の在附をも書いて、金まで添へて殘して往つたのは、餘程爲にくい事であらうのに、行屆いた寒助の仕方、誠に甘心な男だ、夫だものを假にも恨らしい事を思つては濟まないぞト言ひながら四邊を見まはし　左「オ、兎角いふうち夜が明けた、大かた夜のうちに本望を遂げたであらうか、駈出して往つても見たいやうだが、流石にそんな事もならず、いづれ最う些爲たら、世間の評判でも樣子が知れるだらう、まア何にしろ市助（これは下男の名なるべし）を起して飯でも焚かせるが宜いはな　たれ「ホンニ忘れて居ましたが、市助は昨日の夕方、お中屋敷へ左太郎の夜のお辨當を持たせて遣りましたが、夫ッきりまだ歸りませんヨ（此左太郎とは左内の躬にてお冬の兄なるが、中屋敷なる隱居のかたへつとめて、此夜は泊りばんにてありしと見えたり）　左「困つたものだ、大かた部屋へでも這入つて歸る事を忘れたのだらう、那男も外に惡いことはないが、酒を呑むとしだらのないので度々聞をかゝせてならないト噂なかばへ門の戸をドン〳〵と叩きながら　市「モシ、爰をお明けなすッて下さいまし、大變な騒動が出來ましたト大な聲にてわめくゆゑ、お種は出て戸を明けながら　たれ「何だ此男は仰山らしいトいふをも構はず、其儘内へ駈けあがりて　市「モシ、旦那さまあわてちやアなりません、氣を落付けてお在なさいましゃ眼の色を替へていふにぞ　左「コレサ、此身は些も周章ては居ないが、手前何をあわて、來たのだか、泥足も洗はないでどうしたものだ　市「ナニ泥足ぐらゐを厭つて居られますものか、向は拔鉤の鑓の先へ首をさして其人數が五十人ばかりト半分聞くより左内ははッと思ふにぞ　左「コレ市助、手前のやうに言つては何の事だか譯が解らない、何も周章ることはないから、氣を落付けてとツくりと咄して聞かせるが宜いト言はれて漸う心をしづめ　市「なる程斯ばかり言つては分解りますまい、實は昨日の夕方若旦那のお辨當を持つてお中屋敷へ往きましたら、部屋に居る國者が、雪が降出して寒いに、ちよいと一盃やつて往かないかと言はれたのが喰付で、とう〳〵其處へ腰が拔け醉潰れて仕廻ひまして、ふいと目が覺めて見ると夜が明けて居ますから、南無三しくじつたと思つて急ぎあわてゝ歸りかゝると、途中に大勢人立がして居て、敵討だ〳〵と口々に騒ぎ廻りますから、何の敵討だらうと、段々人のいふのを聞くと、鹽谷家の浪人が高野の屋敷へ討入つて敵の首を取つて、今此道へ引上げて來るといふ騒だから、假令遲くなつて旦那に叱られるまでも、是を見ないでは歸られないと、人立の中へ這入つて待つて居ると、頓ての事に向から來ましたがネ、どうも威勢の宜い事といふものは、一番に大鼓を肩に引つかけた奴が來ると、夫から段々行列を立てゝ來るのが、體中血だらけになつて居るのもあれば、拔鉤の鑓をかついだのもあつて、強勢でございましたが、其中に八百屋さんが交つて居たから、膽を潰しました　左「何だ八百屋とは　市「アノ、昨日來た大束冬菜の旦那の事でございます

左「エ、夫ちやア寒助がいよ〳〵その仲間に交つて居たのだな　市「ハイサ、下奴もあんまり恟り爲たから速くお知らせまうさうと思つて、雪を掴んでは喰ひながら、息を限りに駈けて歸つて來ましたトいふをうち聞く人々が、偖はとばかり駭きて須臾辭もなかりける。

（卷の三十四終）

正史實傳

いろは文庫　卷之三十五

第六十九回

左内は若やとおもひし處へ、今市助の咄を聞きて、さてはいよ〳〵寒助が首尾よく本意を遂げたるかと、駭くばかり嬉しさは飛立つやうに思ふにぞ　左「コレ市助、那男は若村寒助と言つて此身の聟だが、鹽谷家の大忠臣だから、敵を討たうといふ計畧に、八百屋とまで零落た振をしたけれども、なか〳〵實正に青菜小菜を賣るやうな者ではないから、此後は八百屋だの大束冬菜だのと言ふではないぞ、第一人聞が宜くないから　市「へ、エ、そんなら那旦那の本名が若村寒助で、八百屋といふのが世を忍ぶ假の名かネ、何だか芝居にでもありさうで强勢でございますネ、下奴は一體そんな事が好だから、速く知つたらあの旦那のお供をして、一番敵討に出るのだものを、惜しい事をしやした　左「コレサそんなむだは言ふには及ばない、其處で寒助を一寸見掛けたばかりか、又は手前の顏を知つて居て、向から物でも言ひかけたのか　市「ナニ、向では氣の付いた樣子はございません、下奴も聲でもかけて見やうかと思ひましたが、拔鉤の鏈なんぞを提げて大勢で來るのでございますから、萬一物でも言つたらどんな目に合はうかも知れず、夫よりも些も速くお知らせまうす方が宜からうと、急ぎあわて丶歸つて參りやした　冬「そしてどんな樣子だつたへ、餘程大さう疵でも請けて居たやうかへ　市「ハイサ、下奴にも宜くは見えやしなんだが、血だらけになつて居さッしたか

ら、疵もありやせうが、何だか連の衆と莞爾〳〵笑ひながら、咄を爲い〳〵歩行ッしやる樣子が、下奴の眼眉目か知らないが、他の衆より勢が宜く見えやしたから、ナニきつい疵もありやすまい　冬「お爺さん何樣致しませうネエ、私やア道までも往つて、餘所ながらでも最う一度逢ひたうございますヨ　左「なる程然思ふのは道理至極だが、今から女の足で跡を追つて往つた所が、此大雪だものを迎も追付かれるもので もなし、假令また追付いてなまなか夫婦の顔を見合せたら、其處は恩愛に引かされて、金鐵のやうに凝固まつて居る寒助も、不覺の涙でもこぼすやうな事があつては、朋輩の見る前で、良夫に恥をあたへる同前、若し又涙もこぼさないやうな寒助の了簡なら、おぬしの事を未練な奴だと嘸さげすんで思ふであらう、どの道おぬしが往つては寒助のためにもならず、其うへいよ〳〵名殘が惜まれて、別れられるものではあるまい、實は此身も駈出して往つて、一ト目逢つたうへでは、おぬしの心をも那男に知らせて遣りたいと、足がむづ〳〵して堪らないけれども、重い役目もきいて居る此身だのに、倘殿樣のお名にもかゝはる事があつては濟まないと、此身でさへこらへて居る、只此うへは良夫の名前を汚すまいと心掛けて、悲しい所を辛抱せねば、武士の妻とは言はれぬト辭を盡して諭せしは、なか〳〵に此親父も義强き生質とぞ見えける、兎角するうち、此讐討の事世間に聞えて、大評判になるほどに、又かの下僕市助は、その身は臆病者なれど、强い事が好なるにや、下奴が所の聟さまで若村寒助といふ人が、四十七人の其中でも一番たんと働いて、敵討を爲たなぞと自慢心で尾に尾をつけ、屋敷中を言觸らすにぞ、義に勇む人ごころ、夫と聞くより家中の面々、追々左内が方へ來りて、寒助が身のうへの樣子を尋ね問ふもあり、又は宜い聟を持たれしとて譽める者など多かりしかば、左内は覺えず鼻ひこつかせて、來る人毎におなじやうなる挨拶ばかり爲て居るほどに、其當分は早蠅飛まで客の絶間のあらざれば、お冬も流石に我良夫を譽めそやさる、嬉しさに、自と歎を思ひ直して、少しは憂を忘れしとぞ、爾れば此事何時となく主君の耳にも入りたりけん、あるとき左内を召させられ、那鹽谷家の義士の一個若村寒助といふものは其方の聟なるよし、かの者公遏の御沙汰により、若存命の叶ひなば、其方の緣によりて何卒當家に抱へたしと、思込んで居たりしに、此程四十七士の面々切腹仰付けられしよし、倘にも定めて愁傷ならん、我も力を落したり、就いては寒助が妻冬とやらん、倘が方に在るよしなるが、最早再緣の心もあるまじ、せめては渠が妻をなりとも、當家において扶持をあたへ、奥が手元へ召仕はゞ予においても本意なるべし、其方が娘の事ゆゑ、心の儘になる事なら、曲げても奉公致させよとある、思ひがけなき主君の仰に、有難涙にむせびつゝ、畏りし段おん受して立歸りつつ、恁々と女兒と妻に言聞かするにぞ、夫より先にお冬は又、兼て覺悟のうへながら、倘も良夫の存命へて逢はるゝ事もあらんかと、思ひし甲斐のあらばこそ、このほど同志の面々と、倶に切腹せしといふ便を聞きしその時は、その身もともに刄に伏し、おなじ道にもと思ひしを、二親に止められ、爾あらば尼とも姿をかへ、良夫の後世を弔はんと、浮世の事は思ひ捨てしに、今また主君の仰により、お奉仕を做さんこと、いさゝか本意にあらねども、冥加に餘りて有難き、君の恵に背かんやうなく、このうへは一生涯奉公なさんと思案をさだめ、夫より當家の奥方の腰元に召出されしが、歳八十に及ぶまで更に怠る心なく、終に勤死をなせしかば、その功により命のうちに、新知百石の株を賜はり、兄左太郎の次男をもつて此家の養子となし、是を中村寒助と名告らせしより、その家代々中村氏にて、今猶繁昌したりとぞ。

作者曰く、這一段のうち、お冬が寒助の夜討の狀を夢見し體に綴りしは、最附會の說に似たりと看

官難じ給はんが、思裡にあるときは其趣を夢に見る、是をば思夢といふとなん、爾ればお冬が心の裡に、若我が良夫が讐討を做しもやするかと、日頃より竊に思ひ居たりしを、其夜の夢に見しものか、又渠が忠貞節義を天も感ずるところありて、其夜にいたり其狀を、正しく夢見し物ならんか、爾すれば思夢にあらずして、是を正夢と言ふべきか、鬼神不思議の場にいたりては、必ず理外の理もあるを、看官宜しく推すべし、就きてひとつの物語あり、さる大諸侯の御内人にて何某とやらん名告れる者、かの討入の夜にいたり、正しく夜討の形狀を、あり〳〵と夢に見しかば、その身も餘りの不思議さに、同宿の者を呼起し、箇樣〳〵と咄せしに、果してその夜義士の面々討入りたりと言ふことの、次の日にいたり聞えしかば、同宿の者は素より、傳へ聞く者までも奇異の思を爲たりとぞ、此何某は義士の中に聊由緣ある者ならねど、素より義氣ある武士ゆゑ、兼て鹽谷の浪人が、主人の讐を報ずるならんと思ひつゞけて居たるより、斯る夢をば見しものか、爾すれば又是思夢なるべけれど、さるにても其夜その時その場の體をあり〳〵見しとは、這は夢にてはあらずして、若や件の何某は飛頭蠻にはあらるざかと其頃噂せしよしを、さる家の書に記しありしを、僕竊に見し事あり、什麼轆轤首といへるもの、又是ひとつの不思議にて、其身心神勞果たし、前後も知らず眠る時に、夢ともなく現ともなく、その首自然と脫出て、空中にうかれ飛ぶとぞ、是にて思へば那何某が、我首遙に脫出て現に夜討を見たりしを、その身は夢とのみ思ひて、同宿をさへ呼覺し、夫等のよしを語りしものか、這は文中に言はでもあるべき餘談には似たれども、お冬が夢の因によりて、筆の序に記せしのみ、是にて寒助の傳終り、次の回にいたりては又物語新に起れり。

第七十回

茲に義黨の一個なる相原江介と喚ばるゝは、赤穗を退散したる後、大星の内意を受け直に關東に走下り、敵の屋敷に程遠からぬ本庄逢老町の片邊に、呉服小切類の店を出し、その身は松屋五兵衛と變名なし、同じ義士の一個たる倉橋全助といふ者を、假に和七と名告らせて、その店の手代となし、男世帶で暮すほどに、五兵衛は何時も店を守り、和七は又荷を脊負ひて、高野の屋敷の近邊を得意をもとめて賣歩き、敵の樣子をうかゞへども、猶宜き手づるも得ざりしに、ある日歳比三十八九の艶姿たらしく見ゆる女が、小僧一個を供に連れて此店先へ入來れば、五兵衛は帳場から駈出して　五「是はお内儀さん、宜う被爲入ました、何ぞ御覽に入れませうか（女の名お蘭）莞爾しながら店の裡を見廻して　らん「オヤ、今日は和七どんはお留守かへ　五「ヘイ、今何處か其處等へト言ふとき和七は、横町の井戸より水を一手桶汲み來り、店先へ蒔きにかゝるをお蘭は見て　らん「オヤ和七どん、大さうお働きだネ、私が來たのを見かけて、そんなに鬧がし振つて、水を蒔かないでも宜いぢやアないかへ、然だが、まだしも度々來てうるさいと言つて鹽花を蒔かれるより宜いがネエ、ホ、、、、ト言はれて和七は振返り　和「イヤ、是は美鳥町のお内儀さん、むねきに被仰るぢやアございませんか、私やア貴公がお出なさるだらうと思つたから、砂の立たないやうに、今水を蒔きはじめた所でございます　らん「アレまア、あんな味い事ばッかり言つてサ憎らしいノウ、夫はさうと此間お前に賴んだ物を、何故持つて來てお呉れでないのだト言ふうち和七は、水を蒔き仕舞うて、店へ這入りながら　和「ヘイ、那品は宿に宜い所を切らしましたから、大に遲なはりましたが、漸う問屋から取寄せま

した、何なら一寸御覽に入れませうか　らん「ナニ今日は些と急ぐから見ては居られないヨ、ずるいことを言はないで、持つて來てお呉れなねへト甘えたれた口の利きやうにて、おつな目をして和七の顔をじろりと見ながら、五兵衛の方を向き　らん「私の處では前方は大丸からばかり取つたけれども、お前の所のは直段が恰好で物が宜いうへに、和七どんが甘い事を言つて賣付けるのが上手だから、つひ此お店の物ばかり取るやうになつたがネ、近頃では此人が寔に不性になつていけないから、宜く言付けてお呉んなさいヨ、ホ、ホ　五「へ、、、畏りまりました、イエモウ毎度御贔屓に預りまして、有難い事でございます、御註文のお品は何でございますか、早速後程にでも和七に持たせて進げますでございませう　らん「オヤ夫は嬉しいネエ、だが今日は私も色々用があつて、歸りが遲くなるから、何卒翌日のお晝後によこしてお呉んなさいな、和七どん又お前間違へると聞かないヨ、そして其時外に賴んで置いたツけ、ネ、ソレ此間お出のとき、那を也急度忘れないでヨ　和「へイ〳〵畏りました　らん「アレサお前は返事ばかり爲て、直にお忘れだからいけないヨ、何でも何處にか情人があつて其事ばかり思つて居て、私等の言ふ事は鼻であしらつて居るのだものを憎らしい、ドレ參りませう、親方大にお囂しうトおつな身振りをしながら出てゆく、和七は後を見送りながら　和「チヨツ、いめへましい好色婆アだア　五「コレサ、そんな聲をして萬一聞えると宜くないはな、何でも那内儀さんは、おぬしに餘程氣があるらしいぜ　和「氣があるか竹があるか知りませんが、あすこの内へ往くたんびに異變なしよぢツぶりをして、氣障で〳〵なりやせんから、此頃ちやア成丈はづして往かないやうにして居りやす、其うへ口ぢやア大さうな事を言ひやすけれども、おいねへ客嗇で、目ぼしい物は買やア爲ませんから、あんな得意は一軒ぐらゐしくじつたツて困りやア爲やせん　五「イヤ然でないヨ、成らう事なら、お前那内儀さんと情曲になつちやア何樣だらう　和「コレサ親方、戯言を言つちやア いけませんぜ、あんな艶姿ッたらしい、一寸見ても小胸の惡くなるやうな女が　五「然ればサ、那女のじやらけた風俗を見ちやア此身でも否だと思ふから、年の若いおぬしの了簡ぢやア、見向いて見る氣もあるまいが、爰にひとつの咀があるト四邊見まはし小聲になり　五「おぬしに爲ろ此身にしろ、親方の手代のと言つて居るやうなもの、實はと言へば互に朋輩、大星殿の内意を受けて、敵の樣子をさぐらうと、千々に心はくだいても、高野の屋敷は用心嚴しく、出入をする事も叶はないので、徒に月日を送るのは、お互に本意でない事だから、何卒宜い手づるが欲しい物だと思ふ折柄、幸なのは今の内儀さん、おぬしも聞いて知つて居るだらう、那亭主といふのは高野の屋敷のお金の御用達で、其亭主が死去つた跡では、那内儀さんが後家で居ながら御用を聞いて、師直公のお側まで酒のお相手なんぞに出るといふ噂だから、あの女を手に入れて見なせへ、夫こそ奥向の樣子まで手に取るやうにも知れやうし、間が宜くば那屋敷の出入の叶ふやうにもなるまいものでもねへぜ、然さへなれば屋敷の勝手は殘らず見ぬかれるといふ物だが、何と一思案爲て見ちやアどうだらう　和「なる程然言はれて見ればそんな物だが、何分あの樣子ぢやアおそれる譯だネ、併し夫も忠義の爲なら病犬に喰付かれたと思つて、眼をふさいで見ねへやうにもして居やせうが、あんな多淫ッたらしい女にひよつと掛合つたら、夫こそ直に顆で蠅を追ふやうな目に合ふかも知れやせん、こればッかりやア何ともどうも　五「ハテサ、おぬしも馬鹿を言つたものだ、假令先はどんな者だらうが、其處は此方の了簡にある事だから、體に障る程の事を爲ないでも、言はゞ口先であやなして居ても濟むだらうぢやアあるまいか、尤是は眞直な事ではないが、敵は名におふ歴々で見れば、いづれ反間の計策でなくッちやア本望は遂げられまい、那

女だッて主のある身ではなし、後家で見れば何も爾程の不義といふでもあるまいから、こりやア何でも此身の了簡に附くと爲なせへ、此身がおぬしだと敏に然いふ段取にして、今頃は那屋敷の出入でも出來るやうにするのだけれども、其處が歳の若い所だらうが、只一途に本意を遂げれば宜いと思つたら、どんな事でも出來やうぢやアないか　和「然サネエ、こりやア私が過つた、そんなら其氣になつて何樣にもすると爲やせうが、併し此方は其了簡でも、大に先の心が然でなかつたら可笑なものでありませう　五「ナニ、そりやア此身が一寸一目見ても、向の腹は知切つて居るから大丈夫だが、言はずと如才もあるめへけれど、屋敷の樣子を探らうとして、此方の身元を知られねへやうにするが宜いぜ　和「其處は私も呑込んで居るから氣遣つてお呉んなさるな、夫は宜いが今日は色々な事で商に出るのが大に遲くなりやした、昨日註文のあつた所へ一寸往つて參りやせう　五「そりやア御苦勞な譯だノウ、何なら今日は休んで翌日の事とすれば宜い　和「イエ、今の身分では是が世渡で見れば、當分の事ながらも得意先は大事にして置かにやアなりやすめへ　五「夫も言へばそんな物かノウ、夫ぢやア序に少し賴みてへ事があるが、青柳橋の方へは往かねへかへ　和「丁度彼方を通りやすが、青柳橋なら小雛さんの所かネ　五「然サ、那女に些と言つて遣りてへ用があるから、ちよいと一筆書くうち、仕度をして居てお呉んなせへ　和「エ、、ゆるりとお書きなせへ、私も色々代物の爲わけをして、荷ごしらへを爲にやアなりやせんから」と言ひつゝ和七は跳ねの品々を自分の手帳に引合せて、反物或は小切の類を行李の裡へ入れ合せ、その身も仕度などするうちに、五兵衛は一通の手紙を認め　五「夫ぢやアお世話ながら那女に手渡しに屆けてお呉んなせへ、萬一また座敷でもあつて内に居ねへやうなら、急ぐ用でもないから、手紙をその儘持つて歸つても宜いノサ　和「ナニ、假令お客でも近い所の座敷なら、呼出して手渡しをするくらゐな都合は出來やせうから、お案じなさいますな」と言ひつゝ手紙を請取つて、和七はそこ〳〵出行きけり。

什麼此小雛は何者ぞ、基これ五兵衛の妹なるが、仔細ありて幼少より浪速にて成長、絲竹の業に妙を得たるに、その容色のうるはしければ、五兵衛が關東に下るとき渠をも伴ひ來りつゝ、敵の樣子を探るべき方便の種にもならんかと、青柳橋の唄女とせしに、思の外に評判よく、終には五兵衛の計りし如く、此小雛より高野の屋敷へ手づるを得るの事にいたる、猶委しくは次の卷に解きあらはすを閲て知らん。

（卷の三十五終）

正史實傳 いろは文庫 巻之三十六

第七十一回

川を見はらす料理茶屋の、二階にざゞめく客の聲　客「ヤンヤ〳〵、小雛の松葩し、何時も替らぬえらい物えらいもの、一寸一盞飲み給へ　小ひな「オヤ又私でありますかへ、こりやアひとつお手元を拜見がしたいぢやアありませんか　客「イヤ〳〵、此身は今なみ〳〵と、しかも爰に居る小糸の酌で、ノウ小糸、おぬしが慥な證人であらうがの　豆げいしや小いと「オヤ、私やア何様だか忘れて仕舞ひましたヨ　客「這女めが、小雛の肩を持ちをるな　いと「アレサ、夫でも私やア物覺が惡いんでありますものを　客「オット然は拔けさせない、夫では此猪口は、小糸おぬしに遣るぞ　いと「オヤ、そんなまごついたお盃は否でありますネエ、何れ旦那がお改めなはらないぢやア、何處へ往つても治りませんハネ　客「イヤサ、合を賴むのだから宜いではないか　いと「オヤ、夫ぢやア旦那のお合でありますネ　ひな「是は小糸さん、ひとつ飲まなくッてはなるまいネエ、さア〳〵私がお酌をして進げやうト言ひながら猪口に一ぱい酌ぐ　いと「アレさ貴孃さん、（これは小雛をさしていふことばなり、すべて豆げいしやは本しよくのげいしやをあねといふこと、かゝる場所の風俗と知るべし）ひどいぢやアありませんか、私やアお前はんの贔屓をして進げて居るのに、こんなに一盃酌いでサ　ひな「ホ、、、、夫でもお合はお手本だから、半分では濟まないハネ　いと「夫だッて私にやアこんなに飲まれないんでありますものをト少し困つた顏をせしが、隣に居つてゐたる今一個の客に對ひ　いと「モシお前はん、何卒たすけてお呉んなはいましな　客「オットけんのん〳〵、其盃をすけて見たが宜い、直に這方へお鉢がまはつて、どんな目に合ふか知れやア爲ねへ、兎角そんな六ケ敷い事には、手を出さないのが大丈夫だ、ハ、、、、　いぜんの客「全體呑めねへくらゐなら、お合を致しませうと言はないが宜いのに、さア〳〵受けたからには飲んだり〳〵　いと「いけないねへ、衆人で私ひとりをおいじめなはるンだものをト溜息をホット吐き、猪口の酒を見つめて居る故　みな〳〵「アハ、、、、ホ、、、、ト一座が殘らず大笑となる、此うちに又外の藝者なども來りて、いよ〳〵座中が賑かになり、客も大機嫌となりし頃、茶屋の女が小雛の袖をちよいと引くゆゑ、小雛は夫と心得て、着替に行く振をして、折よき所でその座を立てば、かの茶屋女もついて來て　女「モシ小雛さん、ト言ひながら耳の側へ口を寄せ、何かひそ〳〵呵けば、小雛は覺えず莞爾して　ひな「オヤ然でありますかへ、だが座敷の都合が何様でありませうネエ　女「なアに、そりやア私が呑込んで居るから宜うございますがネ、餘り咄に實が入過ぎて、お客のことを忘れないやうにお爲なはいヨ、そしてネ、ほかの物の目に懸ると面倒でありますヨ　ひな「宜にお前の御深切は死んでも忘れないヨ　女「アレサ餘計な事を言はないで、速く顏を見てお出でヨト背中をちよいと敲く眞似をすれば、小雛は嬉しさうに莞爾笑ひながら、いそ〳〵階子を下りて往く、其時這方の庭先なる生垣の小蔭に忍びし和七は、四邊を見まはしながら　和「何だか急に寒くなつて來たやうだ、那丈頼んで遣つたのだから、何様か都合をして呼出して呉れさうな物だが、何にしろ人を待つといふやつは氣の揉める物だト獨言を言つて居る所へ、奥の座敷の緣側より、飛石傳ひに忍足、小雛は四邊を伺ひ〳〵側へさし寄り、小聲にて　ひな「和七さん、宜く來てお呉れ

だネヘ、嘸待遠でお在だッたらうけれども、何分座敷が　和「そりやア此身も察して居るノサ、今お清に（これは茶屋の女の名なるべし）内證で呼んで呉れろと頼んぢやア遣つたけれども、萬一座敷が外しにくかアあるまいかと氣を揉んで居たが、宜く夫でも出て來られたのウ、何だか大さう二階が賑かなやうだが、何處のお客だ　ひな「お聞きなはい、高野樣の御家中でネ、たしか一個はお留守居だといふ事でありますヨ、夫に高利屋のお内儀さんが來て居るんでありますは　和「高利屋とは美鳥町のぢやアねへか　ひな「ア、　和「そいつはとんだやつが居るなア　ひな「オヤ、夫ぢやア那お内儀さんを知つてお在なはるのかへ、油斷がならないネエ　和「何故〳〵　ひな「それだッて、あのお内儀さんは寔に男好だといふ評判だのに、しかも後家さまだといふ事だから、お前はん何樣かしてお在のぢやアないかへ　和「馬鹿ア言つた物だ、あんなやつが何樣なものか　ひな「イヽエ、何とも言はれないヨ、男といふ者は寔に浮氣なものだから、口あたりの宜い女があると、直に手を出して見たがるものを、然でないものが、とんだやつが來て居るとお言ひの譯がなからうぢやアないか　和「ナニ那女の事では、實はおぬしの兄貴から、些言はれた事があつて、困り拔いて居る處だから、其處でとんだやつが居ると言つたのヨ、他の事ばかり穿鑿をするけれども、おぬしもこんな浮氣な商賣を爲て、毎日種々な客に出るのだものを、どんな事を爲て居るか知れた物ぢやアねへト言はれて小雛は眼尻の所へきりゝとした筋を出し、さも口惜しさうな思入にて　ひな「オヤ、お前はんもてへげへでありますヨ、私をやッぱり唄女だと思つてお在か、今改めて言ふでもないが、互にお國に居た時分、兄さんが私をお前はんの所へ遣らうといふ薄々相談があると聞いて、歳のいかない心にも嬉しい事だと思つて居るうち、お屋敷の那騒動、ちりぢりばら〳〵になる中にも、お前はんと兄さんが同居に落してお在なはるのみか、私と斯いふ譯になつたのも、やッぱり盡きない緣かと思へば、あつかましい事のやうだが私やア お前はんの女房の氣で居るものを、浮氣な酒にまぎらして、お客の前は程を合せて居るやうなものゝ、他に心が移らうか移るまいか、積りでも知れさうな物ぢやアありませんか、私の氣ぢやアお前はんや兄さんに、何卒首尾好く本望を　和「コレサ、放心〳〵とそんな事を言つて、萬一他に聞かれるとならねへぜ、壁に耳があるめへとも言はれねへから、氣を付ける事だ　ひな「ホンニ然でありましたネエ、夫だけれどもお前はんにあんな事を言はれると、眞から腹が立つので、ツイ愚痴も言ふんでありまさアネ　和「馬鹿ア言つたものだ、おぬしを浮氣者と思へば、此身より兄貴がそんな商賣をさせちやア置かねへはな　ひな「ホヽヽ、然思つておゐれだと、苦勞を爲ても甲斐があるけれども、戯談にも今のやうな事を言はれると口惜しくなりますヨ、夫は然と何だか急に逢ひたい事があるから呼出して呉れろと、今お清どんに言つてよこしたが、何ぞ別に用でもありますのかへ　和「遣へねへ、おぬしの顏を見たら肝心の用をさッぱり忘れて仕舞つた奴サト言ひながら懷より手紙を一通取出して　和「實は兄貴が此手紙を、おぬしにしッかり手渡しをして呉れろ、夫とも若お客でもあつて内に居ねへやうなら、急の用でもねへから其儘持つて歸つて呉れろと言付けられたから、おぬしの所に往つて聞くと、這處の座敷だと言ふだらう、夫ぢやア直に歸らうかと種々考へたが、斯いふ序に一寸でも顏が見て往きてへと思つたから、無理な都合をして呼出して貰つた譯サ、些と薄恍惚やうだけれども、此身の心意氣はまアこんな物だから、察して呉れるが宜いぢやアねへかト件の手紙を手に渡せば　ひな「啌にも然言つてお呉れだと嬉しいヨ、是が晴れて逢はれるのなら、どんなに宜からうか知れまいけれども、こんなに隱れ忍んでちよいと顏を見るのをば、此うへもない樂のやうに思つて居るとは、ホンニ果

敢ない事ぢやアないかネエ、夫をおもふとしみ〴〵座敷を勤めるのが否になりますヨト言ひつゝひッたり寄添うて、男の顔をじッと見つめる　和「なる程女の了簡では、愚痴の出るのも無理はねへが、其處が時世時節だとあきらめて、商賣を大事にするといふ中にも、今夜の屋敷の客人は、別して氣をつけて勤めるやうに爲ないぢやアならねへゼ、彼是いふうち餘程ひまがとれた、又座敷の都合が惡いといけねへから、速く那方へ往くが宜い、此身もそろ〳〵歸る事と爲やう　ひな「ホンニ夫も然でありますネエ、それぢやア兄さんは私の方から、返事をあげると言つて置いてお呉んなはいヨ、したがネ、お前はん何だか寒さうでありますネエ、お待ちなはいヨト言ひながら、帶の間より紙に捻りし物を取出し　ひな「こりやア餘り些でありますけれども、道で何ぞ溫かい物でも食べて往つてお呉んなさいな　和「金だの、そりやア有難へが、併し是を貰つたら跡でおぬしが　ひな「なアに困るやうなら進げやア爲ないけれども、夫は御祝儀に貰つた餘計な物だからネ、其位な物はお前はんの懐にもありませうけれども、夫で食べてお呉んなはると、私の念が屆いて嬉しいからサ　和「なる程然いふ譯で呉れるのなら、折角のこゝろざしだから貰つて往くゼ、ト言ひつゝ件の捻りし金をちよいと頂いて懐へ入れる、小雛はつく〴〵見て居たりしが、覺えず涙をはら〳〵と溢し　ひな「いかに世が世とは言ひながら、私が進げた僅ばかりのお金を、頂いてお取りのお前はんの心の裡が思ひやられて悲しい、ト再び側へ寄添うて抱き付かんとする折しも、誰かは知らねど彼方より、エヘント一聲咳拂に、二個は恟り飛退いて、暇乞さへ言ひあへず、奥と表へ別れける。

僕此場を綴れるとき、傍に人ありて曰く、此趣にて見る時は、本名倉橋全助と喚ばるゝ和七が體たらく、小雛の色香に引かされて現をぬかす白痴者なり、斯ては難を報はん事、甚だもつて覺束なしと、僕答へて、然にあらず、義士なればとて木の膝より産れ出でたる者にあらず、宜く人情に渡らずば、千辛萬苦を堪忍びて、なか〳〵本意は遂げがたからん、扨人情を知る者ならば、又色情のなかるべき、素より小雛は本國にて内約束をせしとあれば、夫婦にひとしき中にして、又是不義といふにもあらず、互に思ひおもはれては、假令忠義のためなりとて、なか〳〵離れがたからんを、先討入といふに及びて、愛着の念更になく、必死の覺悟を究めし事、眞の豪傑といふべきか、猶下の段を讀み給はゞ、和七小雛が節義を知るべし、○羨ましおもひ切るとき猫の戀、古人の一句奇なるかなト一笑して筆を擱く。

第七十二回

美鳥町なる高利屋のお蘭は、獨火鉢の側へ居りて、貸方の帳面を調べて居る所へ、次の間の障子を明けて　八百屋傳八「ハイ御免なさいまし、　傳八でございます　らん「オヤ傳八どんかへ、宜くお在だネエ、さア火鉢の側へお出で、なんだか時雨たせへか寒くなつたぢやアないか　傳「左樣でございます、大にお加減が遲つて參りました、日短で嘸おいそがしうございませう　らん「アイ何にもする間がないヨ、お前なんぞは別して世話しい店だから嘸ネエ　傳「イヤモウ毎日追掛ッくらを爲るやうでございます　らん「道理で此間ぢやアさッぱりお出でないと思つたが、今日は又何と思つて出かけて來たのだへ　傳「ヘイ用がないと御不沙汰を致して居りましたが、今日は高野樣のお屋敷へ參りましたら松原左仲さまから貴女へとまうして、お手紙をおことづかり申しましたト言ひながら、鼻紙袋の間より一通の書簡を出して渡せば、お蘭は取つて一通り讀下

し　らん「オヤ此様子では、何かお前に別にお傳言でもあるやうに書いてあるが、然かへ　傳「ヘイ左様でございます、一體先達ての事がございましてから爾來へとまうすものは、倘鹽谷浪人が師直様を讐と言つて附けねらはうかといふ御用心で、御門の通路が嚴しくなりましたから、是までお出入の者さへ身元のたしかでないものは、出入をお差止になつた程でございますけれども、私は基松原さまに中間奉公を久しく致して居つて、氣心も御存知のうへに、直御門前に店を出して居りますので、左仲さまの御取計ひで、御出入の出來るやうになりましたのだが、然いふ譯柄でございますから、左仲さまも内外の事までお咄がございまして、實はいまもまうした鹽谷浪人の事に就いて、是まで追々上方筋へも問者を遣はされてございます所が、其浪人の中で一番氣掛だといふ大星由良之助といふ者が、京都山科に大さう立派な普請をして、藏なんぞまで建込み、田地を買込んだり、金貸なんぞをはじめた鹽梅、何でも永く住込む了簡のやうに思はれる、所で近頃では又祇園町や伏見の撞木町あたりの娼妓遊に現をぬかして、晝夜酒びたしになつて居るのを、女房が意見を爲たといふので腹を立つて、子の三人もある女房を追出して、自分の氣に入つた娼女を受出して妾にしたとか何とか言ふ、イヤハヤ論にも評定にも絶果てた不行跡、あの様子ではなか〳〵讐討の所存なぞはありは爲まいと、上方へ遣つてある問者の所から内々知らせてよこしましたから、まア安心といふやうなもの丶、まだ〳〵油斷の出來ることでないから、貴様は幸御門前にも居るし、其うへ世間も廣い樣子だから、何でも此鎌倉へ下つて居る鹽谷浪人に心を付けて、倘も不審な事でもあつたら、早速にしらせるやうにするが宜い、尤此事は兼て高利屋の内儀にも、内々含んで置いた譯もあるから、那人と宜く相談をして事をはかるが宜い、浪人共も、此方の屋敷から隱し目附を出してある事は、大體考へて承知して居やうから、那方も油斷をしては居まいけれども、貴樣達までがこんな事を言付けられて居やうとは思ふまいから、其處で密々まうし含めて置くのだ、隨分心をつけて、倘一大事を聞出し注進を爲た時には、一廉の御褒美も下さるのだから、等閑に思ふなと被仰付けられましたが、定めて貴女のお手紙にも　らん「ハイ、私の所へも、お前に其お咄があつたといふ事は、荒增書いておよこしなすッて在るヨ　傳「何卒首尾よく見つけ出して、しッかり御褒美にありつきたい物でございますが、貴女は何ぞ宜いお心當でもございますか、

らん「私もまだ是ぞと見留めた事もないがネ、女の狙智恵のやうだけれども、今お言ひの大星といふ人が、内心にどんな深い了簡があらうか、夫も知れないから、お屋敷からも大勢手分をして隱し目附も出してあるうへだけれども、私はまた他から手をまはして大星の樣子を探つて呉れるやうにと、上方の心易い人の所へ内々頼んでやつて置いたこともあるし、又鎌倉に來て居る浪人者にも、若やと思ふ心當のないでもないから、何にしても私が見留めた事があつたら、直にお前に知らせるから、お前も心付いた事でもお在りなら、私に相談をしてお呉れ、さうすればお互に御褒美が頂かれると言ふものだから　傳「なる程是は宜いお咄でございます、何をするのも、兎角丸印の手に這入る事を先へ考へて掛るのが當世でございませう、イヤ夫にまだ最うひとつ左仲さまから御傳言のあつたのを忘れて居りました、昨晩阿波長とやらの二階でお咄のあつた小雛とかいふ唄女の事は、何樣か些も速く事のわかるやうに爲たいのだから、其積でやつてお呉んなさるやうに、然まうして呉れろと被仰いました　らん「アイ〳〵、夫も心得て居ますから、お前又お屋敷へお出なら、いづれ近々私が松原さまへ上つて、何かのお返事はまうしあげませうと言つて置いてお呉れ、ト咄の折から勝手より、召仕の小女が出來り　小女「お内儀さん、アノウ切屋の和七さんが、

御註文の品を持つて參りましたと言つて來ましたヨ　らん「オヤ然か、待ちかねて居た所だから、速く這方へお上りと言ひな、そしてのト言ひながら小女を側へ呼寄せ、耳の側へ口を寄せて何かこそ〳〵言付ければ

小女「ハイ〳〵畏りましたト立つて往く　傳「お客さまなら私は最うお暇に致しませう　らん「ナニお客ではないがネ、お前もいそがしい體を、むだに引留められたら迷惑をお爲だらうから、勝手にお歸りヨ、かの咄はいづれ追々御相談を爲ませう　傳「ヘイ左樣なら、何分宜しくお願ひまうします、トそこ〳〵にして立歸れば、入り違つて來るかの和七が、お聞に對面なすに及びて、又いかなる物語かある、开は十三編のはじめに綴らん。

（卷の三十六終）

いろは文庫第十三編序

四十有餘の誠忠義士、或は妻を去り子を棄て、おの〳〵苦中の苦を喫し、唯一筋に讐を覘ふに、ひと日も安き心はあるまじ、その趣を冊子に述べ、筆に綴りて童蒙幼稚の、耳にふれなばおのづから、義を見て勇む倭魂、老姥が夜話の舌切雀、兎の讐討聞かんより、少しは益すよしあらんかと、思ひ起して假名文字の、いろは文庫は著しつれど、狸汁ほど味もなく、怯き作者が筆頭の、重い葛籠で果敢さへゆかぬを、例の書房に促されて、かち〳〵山の名にしおふ、口拍子をば木のかしらに、十三編の幕を開きぬ。

東都戯作者　爲永春水記

正史實傳 いろは文庫 巻之三十七

第七十三回

お蘭は和七が來しと聞くより、心そゞろにときめけば、挨拶さへもうはの空にて傳八を追歸し、俄に鬢のほつれを撫であげ、衣紋を繕ひなどする處へ、和七は既に入來たるにぞ、お蘭は膝の片脇に取廣げつゝ置きたりし、かの松原よりおくりし處の手紙ありしに心付きて、あわてふためき推丸め、手速く懐に隠しつつ、爾あらぬ體にて莞爾笑ひ　らん「オヤ和七さん、今日も又お欺しかと思つたら、宜々風の吹廻しでも能かつたと見えてお出だネ　和「モシ、來い〳〵早々直にそんないやみを被仰るから何樣もなりません、私やア昨日のお言葉に、翌日の費すぎが都合が宜いから來いとございましたから、時をも遂へず御註文のお品を持つて參つたのでございますが、併し何かお客さまのある所へ上つて、お邪魔になりましたのではお氣の毒さまでございますから、何なら又出直して上りませうか　らん「アレサ、そんな意地の惡いことを言つて、私に氣を揉ませてお呉れでなくツても宜いではないか、お前が眞正にさう思つて來てお呉れのだと寔に嬉しいから、腹を立てお呉でないヨ、そして私が賴んだ品は殘らず揃へて持つて來てお呉れのかへ　和「ヘイ、持つては參りましたが、縞柄や色合の所が御意に入りますれば宜うございますが、ト言ひながら、荷の中より種種なる反物を出す、お蘭は一々手に取つて見て　らん「オヤ〳〵、是はみんな私の氣に入つたのばかりだヨ、

そして直段も寔に恰好だネエ　和「ヘイ、毎度御贔屓に仰付けられますから、貴女へさし上げますのは他々より、餘程はたらいてございます　らん「アレまア、あんな味い事を言つて人を嬉しがらせてサ、其口前だものを、方々の娘や唄女が惚れるのも無理はないネエ、ホ、、、、、夫ぢやア此内を是丈取つて置くヨト言ひながら、自分の氣に入りし反物を、四五反見分けて脇へ取退け　らん「アノウ和七どん、是で買物は濟んだがネ、お前今日はもう些と遊んでお在でも宜いだらうネエ　和「ヘイ有難うございますが、まだ些と他へサ、まだ些と他へとお言ひでも、最う今に日が暮れるものを、何所へ往かれるものかネ、まア今日は遊んでお在ヨト言ふ時、最前小女に言ひつけて遣りし酒肴を持つて來て　小女「御酒は樽のまんまで持つて參りました　らん「アイよし〳〵、夫でおぬしには用はないから、其處をゝて勝手へ往つて居や　小女「ハイト言ひながら立つて往く、此内和七は殘りたる反物を行李の中へ片付ければ、お蘭は手自酒の燗をつけて　らん「さア何にもないけれども、寒いからお燗の熱い所をひとつお飲な、アレサ、そんなに尻をもじ〳〵爲ながら、中腰をして居ないでも宜いぢやアないかへ、まア這方へお寄りと言へばサ　和「こりやアとんだ譯でございましたネ、何時の間にかこんな御用意が有つて居りますのだものを、どうも恐入つた譯でございます　らん「ナニサ用意といふ程の御馳走はないのだけれども、私もひとつ飲まうと思ふ處だから、附合つてお呉れなト一盃はじめて猪口をさせば、和七も素より呑口ゆゑ、振切られぬが上戸の癖、覺えずうか〳〵飲む程に、客も主もほろ酔機げん、和七は額に手を當て　和「是はとう〳〵尻が落付いて仕舞ひました　らん「宜いはネエ、而も賢用で何處へかお出のを止めてはわるいけれども、お前のは惰人の所を、方々排いでお歩行のだものを、些とは邪魔をして進げないと體の毒になるヨ　和「こりやア大笑だ、私がそんな事でも爲てあるくやうな

働がございますれば、何様までも他のうちの奉公人をして、こんな重荷を脊負て歩行は致しませんけれども、何を爲ても不器用な生質だから詮方がございません　らん「喧々、人が知るまいと思つて、そんな事を言つてとぼけてお在だけれども、私やア些し見て置いた事があるヨ　和「エ、夫は何でございますか、人違にもしろ、そんな洒落た事でもあるやうに言はれるのは嬉しい譯でございますけれども、丸でその方はお間違のでございますから咄せやせんノサ　らん「そんなにお隠しなら、まア其事は言ふまいがネ、此間私が別に頼んで進げた事は何様だエ　和「ヘイ、御註文のお品は今日持つて上つた丈とぞんじましたが、まだ何か他に　らん「アレサ、反物の事ぢやアないヨ、ソレ、ネ、此間お出のとき内證で書いた物を進げたらうネ、あの事は何様してお呉れだと言ふのサ　和「何の事かと思へば、あんな事をして人を困らせて遊ばうとおぼし召して、悪い戯言でございますせ　らん「アレサ、何でお前を困らせたり遊んだりするものかネ　和「オット然味くは欺されやすまい、何ぼ私が薄鈍いと言つたッて、てへげへ積つて見ても知れたものだらうぢやアございませんか、こんな見る陰もねへものに、何様してお前さんなんぞが、唾も仕ッ掛けて下さる譯がありやすものか　らん「イ、エサ、お前が然いふ氣でお聞きだからいけないヨ、そりやア最う私がこんな老媼を爲て居ながら、あつかましい女だとお前に積られる處は恥かしいけれども、よく〳〵思込まないで、あんな書いたものが進げられるものかネ、喧だらうか、私の身になつて考へて見てお呉れな　和「夫ぢやアお前さん、眞實でございますかへ　らん「アヽト言ひながら些し顔を赤らめる　和「夫が實情のことなら私も正直なお咄を致しやせうが、實は此間上つたとき、私の袂へ書いた物をお入れなすッたから、何だらうかと内へ歸つて明けて見ますと、細々としたお文でございましたから、飛立つやうにも嬉しうございましたが、又考へて見ると、こんな青野郎にお前さんのやうなお方が惚れたいにれたいといふ筈がない、こりやア何でも眉毛に唾を付けねへで放心本氣にならうものなら、宜い遊ばれ者になるのだと思つて居やしたが、夫ぢやアまんざら喧でもないのでございますかネ、トサ、眞譯にうけさせて置いて、跡で笑はうと言ふのぢやアありませんかエ　らん「アレモウお前も疑深いネエ、女の口から戯談にこんな事が言はれるものかネ、言出したうへでお前が承知しておくれでないと、私やア直に死ぬ氣だから、その積りで返事を爲ておくれ　和「お前さんが夫だけに腹を極めて居てお呉んなさりやア、私も命も入らねへ氣になりやすが、又つく〳〵考へて見ると、中年婦盛のお前さんが、今まで後家を立て居やうと被成たからと言つて、端から人が立てさせて置くものぢやアございませんから、是まで何處にか味いお樂があるに違ないと思ふと、なまなかな事をして氣を揉む種をこしらへるやうな者でございますノサネエ　らん「オヤまアとんだ事をお言ひだネエ、私やア是でも堅いものサ、その堅い私をこんなに迷はせたお前は寔に罪だヨ　和「オット然味く被仰つても、私やア見て置いたことがございますせ　らん「オヤ、見たとは何をお見だ、私なんぞは口廣い事だが、そんな事は塵ほどもないのだヨ、さア何時の何刻何處でお見のだヘト言ひながら和七の膝へしがみ付いて、顔をじッと見つめる　和「ハヽヽヽ、何もそんなに腹を立つて被仰る事はございません、是が情曲になつたうへと言ふではなし、萬一然でもなつたらばと思ふ處から、先ッくぐりな事をさうすのでございます　らん「さア、夫だから見たことがあるなら何所で見たか然お言ひといふのだハネ　和「そんならまうしませうが、お前さん先刻私が參つたとき、うろたへて懐へお隠しなすッた物は何でございます　らん「エト恟りする樣子ゆゑ　和「ソレ御覽じまし、何でも何所のかお樂の所から來たお文でございませう、夫でないも

のを、あんなに周章てお隠しなさる筈がございませんトおつな所の辭賀から、鷺の秘事を聞出す事は次の回を見て知るべし。

第七十四回

お蘭は和七を義黨の一個倉橋金助ならんとは、神ならぬ身の知らねども、松原左仲が許よりして一大事をば言送りし密書であるを、なか〳〵に他人に見すべきやうもあらねば、返言に困りて口ごもるにぞ、和七は態と氣を持たせんと莫入を腰にさし、歸り仕度をなす程に、お蘭はあわて、引き止め　らん「和七どん、お前腹をお立ちのかへ　和「イエ、ナニ腹も脊も立ちませんが、居れば居るほど宜い慰みものになるのでございますから、足元の明るいうちお暇に致しませう　らん「アレサ、お前が此儘歸つてお呉れだと、何様も私の心が濟まないものを　和「なる程お前さんのお心ぢやア、まだ嬲り足りないと思つてもお在なさいませうが、夫ぢやア私の立身はございません、是が否だから、はじめから放心眞請になると恥をかくやうなことがあるだらうと思つて居ましたが、按のじやう、お文の取りかはしをなさるやうな深い色男がお在なさるのに、自惚らしい事を言つたのが我ながら馬鹿氣きつて居りやす　らん「アレ、もう何故そんな事をお言ひのだらうネエ、此手紙はそんな物ではないのだヨ　和「イエ、然でないものなら、お隠しなさる筈があるまいぢやアございませんか　らん「ナニサ、然いふ譯で隠すのではございませんハネ、是は些と譯があつて弱るお屋敷から極内々で頼まれた事があつて、其用が書いてあるのだから、めつたに人に見せられないと言ふばかり、何もそんないやらしい事ではないのだから、本統に然思つてお呉れヨ　和「ヘイ〳〵、左様なら宜しうございますから、たんと其お屋敷とやらの御用をなさるが宜しうございます、私も彼是と言はれて見ると、おつな心持もするやうなもの〻、聞かねへ前だと思へば宜うございますから、其氣でドレ〳〵参りませうト又歸りかかれば　らん「オヤ、夫ぢやアまだ疑ぐツてお在のかへ　和「疑ぐッた所が詮方はございませんが、私やア馬鹿な性で、是迄薄情らしい情曲は爲たことがございませんが、倘萬一この女ならばと思込むときは、飽まで先の腹の中をさぐつて、些でも先に薄情な様子でもございますと、跡で口惜しい事があるからとせぐり詰めますから、何時でも出來ずに仕舞ふのでございます、お前さんがお屋敷の御用だと被仰るのに間違は有りますまいから、夫を私が何もあらひだてをするにも及びません、其處で私は御用のお邪魔にならない樣に、お暇に致さうと言すのでございますト言はれてお蘭は堪り得ず　らん「アレサお待ちヨ、お前がそんなにまでお思ひなら此手紙を見せるから、それで私の心の中を察してお呉れな　和「エ、そりやア本統でこざいますか、併しお前さんのお隠しなさる物を無理に見ては　らん「サア、見てもならず見せても濟まない大事の手紙だけれども、お前の疑が晴したいばッかりでお目に懸けるがネ、是を見せたうへでは最う否應はだヨ　和「そりやアもう、お前さんが見せにくい物をお見せなさる程になすツて下さるのだものを、私の心に是ならと得心がゆきさへすりやア、此方から願つても何卒然なりたいのでございますが、何樣でございませう　らん「おまへが然さへ思つてお呉れだと寔に嬉しいヨ、そんなら大事の手紙だけれども、極内々で見せて進げるのだから、決して此中に書いてある事を他に咄してはならないヨト言ひながら、懷に隠したる以前の文を出して見すれば、和七は取つて開き見るに、松原左仲が許よりして、鷺谷浪人の樣子をば、八百屋

傳八と示合せ、探出して呉れよとある頼の手紙でありしかば、はツとばかりに駭きしが、腹の裡に思ふやう、偖は是なるお蘭事は、高野の屋敷へ出入をのみなせる者と思ひしに、我々が身のうへをも竊に探出さんとする隠し目附でありけるか、爾もあらばあれ某を鹽谷の家來と知らざるは、いまだ武運に盡きざる處歟、渠と枕をかはさん事本意には思はねども、斯いふ譯さへあるからは、那女に心をゆるさせて、敵の様子も探るべく、又ふたつには味方の大事を聾へ泄さぬ防にもなるべき事もあらんかと、速くも思案を定めしかば　和「なる程こりやア色文かと思つたら、何だか私が讀んでは譯のわからないやうな事が書いてありますネ　らん「ソレ御見な、夫だからあんまり人ばかり疑ふものではないヨ　和「是は大にあやまりやした、夫にしても此お手紙に書いてある鹽谷の浪人が、何ぞ惡いことでも爲て、こんなに嚴しくお尋ねなさるのでございますかネエ　らん「ナニ惡い事を爲たと言ふのではないけれども、其浪人が萬一師直さまを主人の敵だと言つて、途中なんぞで切つてかゝりでもする事がありては爲まいかといふ御用心で、師直さまは御門の外へお出なさる事もなく、お屋敷の内も昼夜の立廻りで、それは〳〵大さうな事サ、夫に就いては上方までも聞者が遣つてあつて、其浪人の様子を氣を付けてあるけれども、尚私等にまで心を付けて、若も怪しい事でも聞出したら速く知らせろ、知らせ次第御褒美を下さるといふのだから、女のいらざる事とは思ひながら内々目角を付けて居るのだがネ、これは寔に内證の事だから、忘れても餘所へ泄れるやうなことを爲て、お呉れだと、私の株じまひだから、然思つてお呉れヨ　和「へゝエ夫でこのお手紙の様子が解りやした、御褒美になるやうなことなら、私も些と其浪人の在家を尋ねて歩行たいものでございます、重荷を脊負て商賣をするより、其方が利方かも知れやせんから　らん「そりやア お前が本統に私と心を合せてお爲なら、隨分ネエ　和「イエ、夫はもう金にさへなる事なら、どんな事でも致しやせうが、そして其浪人の隠れて居る所を、お前さん御存知のでございますかネ　らん「アゝ、そりやア些たア心當もあるがネ、まだお前の氣が本統に知れないのに、放心〳〵海口られるものかネエ、まアそんな事は跡にして、お前私に疑はあるまいネ　和「イヤ最う些もございません　らん「ないならもツと此方へ寄つても宜いぢやアないかエ　和「何だか大さう酔つてわからなくなりやした　らん「私も酔つたヨ、夫ぢやア些と炬燵へ這入つて横におなりな　和「イエイエいくら酔つても其様な事をして萬一誰ぞに　らん「なアに今日はお前が來てお呉れの約束だから、内の者はみんな用を言付けて出して仕舞つたから、何にも遠慮はないヨ、私もあたるからさアお這入りヨト無理に炬燵の側へおし遣れば　和「そんなら少しお當てなすツて下さいまし、アゝ寔に宜い火でございます　らん「オヤまア堅ツくるしい、足を出してお當りでなくツてはあつたかくないはネ　和「それでもお前さんのおみあしへ障りでもすると惡うございますから　らん「何故惡いのだへ、お前が障らないやうにお爲だと、私の方から障つて進げるヨ　和「それぢやア斯爲ますが宜うございますか　らん「アゝレ冷たい足だネエ、ホゝゝゝト此とき入江町の七時にや、時雨を誘ふ鐘の聲、最肌寒くぞ聞えける。

（巻の三十七終）

正史實傳 いろは文庫 巻之三十八

第七十五回

面白い狂言炬燵櫓下とは、川柳點にて穿ちし可笑み、お蘭はさながら煤られたやうになり、亂れし鬢のべた〳〵と汗にて顔へひツつくを、早蛔さうに撫上げながら　らん「ア、暑い、私をこんなにいじめながら、お前は平氣な顔を爲てお在だから憎らしい　和「ナニ平氣な物でございますものか、大汗になりやした、らん「夫ぢやア些と綠側の障子を明けやうかネエト障子を片手で明けて　らん「オヤ早晩の間にか雨が降出したヨ　和「エ、そりやア大變だト綠側へ出て空を詠めながら　和「ドレ小降のうち速く歸る事と致しませう　らん「アレサ何だらうネエ、張子の體ぢやアあるまいし、雨が取つて喰はうとも言はないのに、そんなに怖がつて騷ぐこともないはネ、若大降になつたらお泊りな　和「何樣いたしてそんな事が出來ますものか、一晩でも内を明けやうものなら、直に暇にでもなるかも知れません　らん「オヤ夫でも稀には女郎買にもお出だらうし、然ないところが他にお樂な所へお出の時は、隨分泊つてお歸りの事があるだらう　和「イエ〳〵あゝ見えましても宿の主人は餘程氣の六ケ敷人でございますから、なか〳〵そんな事は致されません　らん「宜いはネ、そんな解らない主人なら、暇を貰つて私の所へお出でな、幸手代が一個ほしいと思つて居る所だから、然でもなると何樣に嬉しいか知れないヨ　和「私も夫だと願つたり叶つたりでございますけれども、是まで世話になつた主人で見ますと、然義理を惡く出られも致しませんから、マアもう些と日和を見てからの事に致しやせう、何にしろ日の暮れねへうちに參りませう　らん「そんなに歸りたがつてお言ひのを、無理にとも留めまいがネ、些とお前に聞いて見たい事があるんだから、少し待つて居てお呉れヨト火鉢の側へ居りて、煙草を和七に吸付けて遣りながら　らん「アノウ聞きたい事といふのも他ぢやアないがネ、お前實正に隱さないで言つてお聞かせなト言はれて和七は、我身の上を鹽谷浪人と察せしゆゑ、夫を言へといふ事かと浮世を忍ぶ心から、はツと思へば胸うち騷ぎて　和「エ、隱さずに言へとは何の事でございますへト覺えず膝を立直せば　らん「ホ、、、そんなに眞面におなりでは聞きにくいがネ、お前は那小雛といふ唄女を知つてお在だらうネエト思懸けない事を聞かれて、扨は小雛と情曲ある事まで知つて聞くかと又咳きしが、身分の大事であらざるゆゑ、少しは心の落付いて　和「ヘイ、青柳橋の小雛なら知つて居ります　らん「オヤ夫ぢやア深い情合だとお言ひのかへト忽地に顔色が變れば　和「ナニサ、そんな事は些もございません　らん「イエ〳〵お隱しでない、私が先刻見たことがあると言つたのは、其小雛の事だがネ、お前此間阿波長の庭で何かこそ〳〵咄を爲てお在だッたらう　和「エ　らん「それ御覽、覺のある事だから返事が出來まい、私も薄ッ暗い晩だから、しッかりお前とは知れなんだけれども、何でも怪しいと思つたから、エヘンと咳拂を爲たら、周章て逃げてお仕舞ひだッたネ　和「ヘ、エ、夫ぢやア那とき咳拂をなすッたのは貴女でございましたか、夫は大笑な咄でございました、實は那小雛と申す者は、宿の主人の妹でございますから、主人から手紙を遣つて呉れろと言付けられて使に參りました處が、座敷だとまうす事だから、鳥渡呼出して貰つて手紙を渡した上で、主人の傳言をまうして居ると、いきなり咳拂が聞えましたから膽を潰して逃出しました　らん「オヤ〳〵、そ

んなら那小雛はお前の所の旦那の妹だとかへ、夫ぢやア猶々怪しいヨ、口では堅いことを言つてお在でも、猫に鰹節だものを油斷がなるものかネ、其證據は只手紙を渡すばかりなら、あんなに周章て逃げる譯もあるまいぢやアないか　和「イエサ、夫が貴女と知つて居れば、逃げも爲ませんが、萬一お客の旦那がたで叱られでもするとつまらないと思つて逃出しましたノサ、積つても御覽じまし、主人の妹でございますものを、假令私の方で何とか思つたとまうして、先で承知を致しますものか、其うへあんな商賣は爲て居ますが、とんだ野暮人で、男嫌といふ名を取つて居ると言ふことでございます、是においてはどんな神さまを證人にしても大丈夫お疑はございませんら「夫が眞實なら、改めてひとつお賴があるが聞いてお呉れか　和「ヘイ何でございますか、私に出來ます事なら隨分　らん「あのネ、こりやア私も據ない人から賴まれたことだが、實は高野樣のお屋敷で、顏の美い藝のある女を抱へたいと尋ねてお在なさる處で、松村さまといふお役人樣が、那小雛を御覽じてあれなら急度お上の御意に叶ふには違ないと、薄々樣子をお聞きなさるとお前が今お言ひの通り、男嫌といふ評判を取るやうな堅い氣質だといふので、猶々お望が掛つて何でも抱へたいから、私に身元を聞糺して、大體な身分の者なら相談をして呉れろ、尤極内々の譯だから世間へ知らせないために、屋敷から掛合ふ處を私に世話をさせるのだ、其心得で賴むといふ譯サ、併がお前と萬一情曲のあるやうな事だと面倒だと思つたから聞いたら、然いふ身分體の者なら寔に僥倖な事だから、何卒お前から五兵衛どんへ此咄を爲て、早速高野樣へ上がるやうに爲てお呉れな、斯言つちやア不躾らしいけれども、お仕度金も相應には下さる樣子、其上那嬢が御意にさへ入れば、隨分お宿のお爲にもなる事だから、其處等はお前の胸に治めて居て、側から勸めて得心させるやうに咄をつけてお呉れな、お賴と言ふは此譯サト言はれて和七は腹の裡に、つく〳〵思案をめぐらすに、我女房とも思ふ小雛を敵の屋敷へ遣はして、なぐさみ物にされん事は、殘念至極のことなれど、首尾好く渠を入込ますれば、敵地の案内は忽地知れなん、今此事を相談なすとも五兵衛は直に得心せんが、小雛が承知をすればよいがと、あやぶみながらも點頭きて　和「成程御尤のお咄でございます、主人の了簡は何樣でございますか知れませんが、何にしろ那嬢のためにも唄女をさせて置くより僥倖でございますから、出來るか出來ないかお請合はなりませんが、まア咄を致して見ると爲ませう　らん「そりやア嬉しいネエ、併がお請合が出來ないではいけないヨ、何でも是非承知をして貰ひたいのだから、其處は何樣かお前のはたらきで言ひこしらへてお呉れな、然なると私もお屋敷の向がよし、お前にもお骨折だけの事はするから、ヨ、ヨ和七さん、夫で那嬢が上れば寔に宜いし、若不承知を言ふやうだと、お前がやツぱり情曲があるから、身に染みて世話をお爲でないのだと疑ふヨ、ホ、、、、　和「イヤこれは迷惑なお咄でございますネ　らん「夫でも私の氣ぢやア、惡推か知らないけれども、此間ちらりと見た樣子が、急度然に違ないやうにばかり察はれてならないものを　和「イヤハヤ呆れた嫉妬やきだ、お前さんのやうな人は、御亭主があつたら門から外へ手放してお出しなさりやア爲ますめへ　らん「ア、夫だからお前をも餘所に離して置くのが氣が揉めるから、内へ呼びたいと言ふのサ　和「夫こそ十日も續かねへト口の裡にて言ふを聞咎め　らん「オヤ何だとへ　和「ナアニ何樣もつゞかねへ天氣だとまうしたのサ、とう〳〵本降になつて來やした、お暇に致しませう　らん「夫ぢやア何樣でもお歸りか、今賴んだ事は急度だヨ、そして其樣子をお前又來て知らせてお呉れヨ、ト言ふうち和七はそこ〳〵に、仕度をして立上るを、お蘭は送つて出ながら、後から顏をさし覗き　らん「何故こんなに迷はせてお呉れのだ憎い人だノウ

ト莞爾笑つて春中を叩けば、屎でも喰へと腹の裡では思ひながらも、さりげなく倶に笑うて別れ往く。

第七十六回

逢老町なる五兵衛が宅に、小雛は何か物思はし氣にさし俯向いて、言葉もなく打ちしをれつゝ居る側から、和七は膝をすり寄せて　和「コレサ小雛さん、お前の心は此身も宜ウく察して居るけれども、是程事をわけて言ふのだから、お前もとツくり勘辨をして、なる程と思つたら承知だと言ふ返事を聞かせて、安堵させて呉れるが宜いぢやアねへか　小「夫だつてあんまり無理ぢやア有りませんか、お前はんは那後家様と好なことをして、私にやア妾奉公を爲ろとお言ひだつて、そんな眞似が出來ますものかネ　和「さア然聞くから惡いはな、此身だつてすき好んであんな狸漢アと、色の戀のと言ふ譯が出來るものかな　小「ハイサ、冷して置いて澤山おあがんなはい、年增は格別だと言ひますから、隨分お樂みなはるが宜いノサ、どうせ私やア捨てられたから　和「コウ、どうも然言つちやア咄も何も出來やア爲ねへ、まア氣を落付けて此身の言ふ事を聞いたうへで、夫とも胸に落ちざア又其樣に相談もあらうぢやアねへか、一體那お關のことは、私ア甚から嫌で〳〵ならねへのだ、けれどもお前の兄貴の言ふ處も成程尤だと思つたから、敵に近寄りたいばツかりに、仕方なしに那いふ譯になつた處で、又お前のことを言出して、是非屋敷へ上げるやうに兄貴へ相談を爲ろと言ふから、直に歸つて其咄をすると、兄貴が言ふにやア、夫は願つても出來ねへ上首尾だ、一體妹を那いふ兩賣をさせて置くのも、何卒して敵の樣子を聞出す便にもならうかと、思ふばかりの事だのに、屋敷へ住込が出來るからにやア此上の事はない、併が此事は此身の口から言つちやア、兄妹の義理にからまれて承知は爲やうが、又他にどんなか義理合があつて、肌まで任す奉公はされないと無分別な心を出して、突詰めた事でもするやうでは何にもならないから、こりやア貴樣が此身になりかはつて、那嬢の得心の往くやうに咄を爲て呉れまいか、然すれば此身の留守へ妹を呼ぶやうな都合にするからと言ふ、兄貴の腹を察して見ると、お前と此身が情曲のある事を敵から知つて居るから、他の義理合なんぞと言つて、二個でとツくり相談を爲ろと言ふ事だらうと考へたから、宜しうございます私が小雛さんの腹をも聞いたうへで、得心の往くやうに咄しませうと言つて、今日お前を呼に遣つたのだアな、此身が那後家に突合つて居るのも、お前が屋敷へ往つて師直の機嫌氣づまを取るのも、落ちる所は同じ事で、兄貴にしろ此身にしろ、首尾よく本意が遂げたいばツかりだらうぢやアねへか、女とは言ひながらお前は男魂があつて、まさかの時には物の用にも立つ者と兄貴が見拔いたればこそ、遙々吾妻へ連れて來て、卑しい兩賣をも殿樣への御恩報じと思つてさせるのだものを、お前が何ぞ一ツの功を立てねへぢやア、那妹は何のために連れて來たらうと、同盟の人達にまで言はれぐさになつちやア、兄貴も立たずお前も濟まず、緣につながる此身迄が口惜しい譯ぢやアあるめへか、妾をとツくり考へたら、どんな奉公も忠義のため出來さうな物かと思はれるが何樣だらう　小「なる程然聞いて見ると無理とは思はれませんけれども、お前はんと斯なつたのも色や浮氣な譯ではなし、總角結といへば夫婦も同じ事と、あつかましいやうだが私の氣ぢやア女房の積りで居ますものを、假令忠義のためだと言つて、他のことなら命を落すも厭ひませんが、女の道を外す事ばツかりは何樣も私の心が　和「ハテサ、其處が御主人さまへの御奉公だはな、操を捨て操を立てると言ふ事もあつて、誰も知つて居る事だが、常磐御前でも知れた物ぢやアないかト言はれて須臾うち案じしが　小「ホ

ンニ然でありますネエ、夫ぢやア私が屋敷へ往つて成るべきだけはあやなしても居ませうが、萬一叶はないで身を任すやうな事があつたら堪忍してお呉んなはいヨ、トポロリとこぼす涙の誠、這方も不便と思ふにぞ、俱に涙を催せしを、態と笑に紛らして　和「ハ、、、、つまらねへ事を言つたものだ、此身が得心でさせるのだものを、堪忍も糸瓜も入るものか、其替りに那後家の事も今言つた譯で實に仕方なしの當座の方便だから、然思つて呉んなヨ　小「アイ然事が分解れば私だッて何と思ひますものかネ、結句先刻のやうに嫉妬らしい事を言つたのが面目ないヨ　和「何のそんな事は何樣でも宜いはな、そんならお前いよいよ承知して呉れたのだネ　小「アヽ否でも否とは言はれないものを　和「それで兄貴もどんなに安堵爲なさるか知れやア爲ねへ、此身も言甲斐があつて嬉しいが、夫にしても可憐さうに泣かせずともいゝものに、涙をこぼさせて惡かつたけノウ、さア〳〵機嫌を直す事だ、今更惡痴に考へた處が仕方がねへはなト脊中を徐に撫でられて　小「アレ最うそんな仁愛い事を言つてお呉んなさると、猶々別れて往くことが否になりますはネ、私やアお國を出る時に兄さんに言聞かされた事がありますから、覺悟は極めて居るんでありますけれども、つひお前はんに引されて未練な氣が出てならないんで有りますヨ、其上那いふ物堅い兄さんだからお前はんとの譯が知れでも爲たら、假令前かた約束をした事はあるにもしろ其樣な了簡では賴母しくないと、腹でもお立ちなはらうかと夫も苦勞でありましたが、そんなら敵から二個の中を知つて知らない顏でお在のかネエ　和「まア先刻の口振ではさう見えるのサ、此身も何だか間が惡くッて少し返辭に困つたが、今日の仕方を見ると兄貴もなか〳〵通者だアな　小「夫にしても何所へお出のだか最う歸つてお在なはりさうな物だネエ　和「然サ些も速くお前が得心をした事を喋して安堵させてへものだがト言ふ時思ひがけもなき、納戸の裏からあるじ五兵衛、跡手に拱りて徐々として立出るに、二個は慄り見かへれば　五「コレサ能も驚くことはない、和七さんに言含めて留守にはして見たが、二個の心に來練はあるまいけれども、其處が若い同志のことで思案の外と言ふ事もあるから、大事をとる方が上分別だと、罪なやうだけれども裏口から這入つて納戸の裡から樣子を聞いて居たが、寔に節なる二個のこゝろざし、大事を取つて疑つたのが今ぢやア反つて恥かしいやうだト言はれて二人は今の問答、流石に兄に聞かれては俱に恥入る事さへあれば、顏赤らめてさし俯向きしが　小「兄さん面目ないがお前叱つてお呉れぢやアないかへ　五「ナニ叱るものか、おぬし達二個はお國に居た時に言約束を爲た中だものを、世が世なら敵に祝言もさせて、今頃は子の一個も出來て居る時分だものを、互に思合つての事なら兄が何と言ふものか、夫ほど深い中を引別れて、敵の屋敷へ奉公に往くことを得心するも貞節なら、勸めて得心させるのも忠義、揃ひも揃つた心ばへと、感心の餘に兄が許して祝言の盞をさせるから、是を寧もの思出にして奉公に往つて呉れろ、幸酒があつたから其心で持つて來た、おぬしがひとつはじめて獻すが宜い、男媒人待女郎も此身が一個で兼ねてすれば、是が寔の水入らずと言ふものだハ、、、ト打解けたる兄の辭に歡ぶ小雛　小「兄さん何にも申しませんト手を合せつゝ伏拜み、頓て盃を取上ぐれば、和七も今更否むによしなく、形ばかりなる婚姻の盃を取交せば　五「オ、〳〵夫で孝出度〳〵、併し夫婦といふのも今夜一晩、此身は今から後家樣の所へ往つて、承知の樣子を返答を爲たうへ歸足に青柳橋へも廻つて、座敷を引せる相談をもつけて來るから、小雛は此所へ泊つて、寐物語にゆるゆると一晩名殘を惜むが宜いト既に其日も暮るゝ頃、二個を殘して仕度を調へ、そこ〳〵にして出往く五兵衛、義に堅き心にも流石に情の道も知りたる、寔に粹なる兄なりけり。

（卷の三十八終）

正史實傳 いろは文庫 巻之三十九

第七十七回

（姑且話説他事に移る）宇喜さまお供で氣も浮々、心も浮けば酒も浮く、浮いたは〳〵宇喜大盡トそやし立てつゝ唄女幇間が、大勢取巻く駕の裡には、例の大星由良之助が、三日以來祇園町にて飲みつゞけたる酒にも倦き、今日は嵯峨に菌狩せんとて、皆うち連れつゝ往來をざはめき立ちて往きかゝる、折も折とて向より五六個の武士連、何れも一盞機嫌と見ゆるが、態と先から大星の乘りたる駕へ理不盡に、突當つて眼を怒らし ▲「ヤイ、此廣い大道で武士たる者に突當るとは、揃ひも揃つて盲目でもあるめへ、さア此儘では濟されねへぞト一人が言へば殘の者ども、然だ〳〵ト口を添へ、おの〳〵刀をひけらかし、腕まくりして立ちかゝれば、是はト驚く其中にも、事に馴れたる幇間或は揚屋の男などが、喧嘩買ぞと見てとりしかば、皆手を下げて前に立出で みな〳〵「是ははやお腹立の處は、恐入りますが、這方から求めて突當つたとまうす譯でもございませず、言はゞ途中の行違、お互の往來でござりますれば、何卒御不勝なさつて下さいまし ▲「何だ、互の往來だ、コレ武士たる者に挨拶をするなら、言ひやうもあつたものだに、其言分からして氣に喰はねへ、此駕に乘つて居るのは一體何處の何と言ふ奴だ みな〳〵「へイ、是は宇喜さまとまうすお大盡様でございます ▲「ムヽ、其宇喜とか言ふ奴は武士だか町人だか知られへが、此騒を知られへ顔をして駕に乘つて居るとは不禮な奴だ、駕から引きずり出して面を見たうへで、汗奴が挨拶によつたら、なアおの〳〵ト見かへれば ●「左樣〳〵、何に致せ此儘で濟せては、刀の手前も立ちますまい、卒我々がト言ひながらおの〳〵一度に競ひかゝるを、猶も止むる幇間等が みな〳〵「モシ〳〵、何と被仰つても、宇喜樣は此間から夜昼となく呑みつゞけ、たわいはお在被成ますまい、私共が此樣におわびをまうして居りますから、何卒御勘辨をお願ひまうしますト言ふをも聞かず立ちかゝり、駕の垂をば刎上ぐれば、裡には眠れる大星が前後も知らぬ體なれど、何とやらん備はる威光に、流石側へも寄兼ねて、尻込爲ながら聲ふり立て ▲「生酔本性違はずと言へば、我々が言ふ事の耳に這入らぬこともあるまい、言分あつて仕掛けた出入、さア其處へ出て、言ふ筋があるならば言つて見ろ、若夫ともにあやまり入るなら、駕から下りて三拜しろ、挨拶の爲やうに仍つたら又了簡のして遣りやうも有らうが、是では濟まぬぞ〳〵ト皆口々にわめき立つれば、由良之助は眼の覺めたるか、細目に明いて那人々の顔を徐に打見廻し 由「何やら我等は醉潰れて一向に仔細は知らぬが、詫言つて損は往かぬもの、眞平御用捨〳〵ト其儘駕から這出て、土に額を摺付ければ、夫と見るより侍共は、肩いからせし張合拔けて大口明いてうち笑ひ ▲「斯見た處が刀を差せば、まんざら町人とも思はれぬが、大つくばひになつて詫びる體、見かけに寄らない大腰拔だ、一體其方は何處の者で名は何とまうすのだ 由「ヤ、我等は山科邊に住居をいたす浪人者、名前の義はまうさずとも御勘辨を下さるまいか ▲「イヤ〳〵斯言ひ懸つたからにやア、承らねば承知はならぬ、夫ともたツて隱さッしやるには、何か其方にも心あつての事だらうから、卒我々が相手になつて、思ふ存分の勝負を致さうかト又もや 各ひしめけば、這方は周章ておし禁め 由「イヤ、全く別に所存あつてお隱しまうすではないが、名前

をまうしては些面目ない譯がらゆゑ、今のやうには言うたもの、、夫で御勘辨がならぬとならば、是非に及ばぬ卒お相手にとまうしたいが、左樣な事は拙者大きらひゆゑ、内々名告つてお聞かせまうすが、必ず御他言下さるな、實は鹽谷の浪人にて大星由良之助とまうす者、箇樣な體で古主の名まで明すのは赤面のいたりだが、斯打明けてまうすからは、何ごとも御用捨あつて、是から我等は嵯峨へ菌狩に參るが、各方も何と御機嫌を直されて、御同道なされまいかト思掛なき勸に預り、那武士どもは案に相違し、互に袖を引合うて、何か姑く喃き合ひしが、覺えず莞爾とうち笑みながら、俄に面を和げて「扨は貴殿が聞き及ぶ大星氏でござつたか、夫とも知らず先刻よりの不禮、眞平〳〵、我々は西國筋の諸侯に奉公いたす者ども、此度吾妻へ下る序に都見物に立寄り、箇樣に所々を遊覽いたせど、まだ峨嵯までは見物致さず、菌狩とは珍らしき御催し、國許への土産のため、お勸に隨つて御同道いたさうか　由「ヤ、是は早速の御同意にて千萬かたじけない、然らばそろ〳〵歩行ませう　㊟「イヤ、貴殿は矢張乘物にお樽ひなくお召しなせへ　由「ナニ反つて醉醒には歩行方が氣が晴れて宜い物サ、ハ、、、、、さア〳〵皆の者も參れ〳〵ト先に立てば、歌妓幇間も心では、とんだ奴等と一所になり、何ぞ事でも起らねば宜いがと、互にあやぶみながらも流石に人をそらさぬが、斯るやからの商賣なれば、彼人々をもそやし立て、機嫌とり〴〵打連立ちて、頻にふらつく大星を、右左より介抱などしつ、程なく嵯峨に赴けば、廣々とせし芝のうへに、傘て準備の毛氈を幾枚となく敷並べ、持參の小竹筒提重を所狹きまで取廣げ、そのうち得物の菌をば早速に調理して、器に盛りつゝさし出しなどする、花街の遊と事替りて又一入の興あるに、歌妓どもは三絃彈けば、是に合せて幇間末者が踊り狂うてひたすらに盃をすゝむるにぞ、彼武士どもは引受け〳〵、頻に酒肴を呑喰ひして、酔に乘せし體にもてなし、歌妓幇間の差別なく、酔へ張合せ掛合ひて、酒りがはしき事に及べば、はじめは座興と笑ひ居たるも、餘りの事にうち腹立ちて、突放しては逃廻るを、爰へ追つかけ那處へ追詰め、組んづ轉んづする騒に、或は衣服を引破られ、櫛簪をうち折らるれば、況て珍味を盛並べたる器を蹴かへし踏みくだく、狼藉言はん方もあらねば、幇間末者は最初より思はぬことか此樣なよしなき者を同道して、かゝる騒に及びしと、腹の裡には憤れど、猶も機嫌をそこねじと戯言交りにさゝへ止むれば、かの武士どもは不禮と怒りて、柱ゆる者を突退け投退け、猶も手込に做さんとするにぞ、大事の歌妓に怪我させては濟まぬと思へば男どもも、はや斟酌を爲て居られず、不法をはたらく武士を力に任せて引放せば、此間に女們は漸う摺抜け逃出すにぞ、幇間末者も倡倶に各遠く逃退きて、近寄る者もあらざれば、武士們は不興氣に大星の側へ找み寄り　▲「イヤナニ大星氏、折角お勸ゆゑ、いさゝか氣鬱を散せんと致せしに、召連れられた奴ばらが我々へ對して無禮千萬、夫を貴殿が見てありながら、おし無言つてござるとは如何のお心得やら、餘り客を馬鹿にさツしやるも程があるト一個が言へば五人三人、おの〳〵眼を張り肩をいからし、再び左右へ詰めかくれば　山「アハ、、、、是は又野暮を言ふお人達だ、其樣にぎしばつてござつては、女には可愛がられぬ、今日の席は不禮講、何事も四角な咄は打遣つて、唯酒の事〳〵ト言へば、一個の武士が　▲「ム、不禮講面白い、そんなら此身の盃を大星喰へト言ひながら、傍に在合ふ盃を足の指のまたに挾み、眼先へ其儘さし出せば、夫と見るより今一個が　×「其盃の者には肛門でも舐めろト言ひつゝも、尻引きまくりて是も又、鼻の先へ突出したる傍若無人の體たらくをすれども、更に由良之助は些もこれに取合はず　山「イヤモウ、我等は此程から、夜畫なしに呑んだゆゑか、頻に眠氣を催した、尻

なりと足なりと、御自分達は御勝手な眞似をなされてお遊びなさい、拙者は這所で一寐入、これが則ち不禮講、御免〳〵ト言ひながら、かの武士の居る眞中へ會釋もなさで、仰向に倒れて忽地高鼾、正體もなく見ゆるにぞ、諸人呆れて辭もなく顔見合せて居たりしが ❷「爭のことに手短くト刀の柄に手を懸くるを這方の一個がおし禁め ▲「イヤコレ短氣をなされたら、後日に這方の身分が危い、幸な物がある、我等に任せて置かれよト大星がしだらなく打廣げたる懐より、鼻紙袋の落ちかゝりしを、四邊見廻し奪取り ▲「何れもござれト先に立てば、なる程然だト皆點頭きて、そこ〳〵にして立去るを、歌妓幇間は最前の無法に恐れて近くは寄らず、遠く離れて居たるゆゑ、懐中物を奪去りしを、誰とて見止むる者はあらねど、退きたるに安堵して、おの〳〵其所へ寄集りしが、大星は昨倒れて、ゆり起せどもたわいのなければ、兎角するうち那奴等が又もや來やうも計られず、長居はおそれと由良之助を乘物に助け乘せ、跡片付けて早早にうち連れ花街へ歸りしとぞ。

第七十八回

入相の鐘に人散りて、最物淋しき北山陰、折しも來かゝる以前の武士、跡さき見廻し立止まり ❸「トキニ、今日は餘程うまい都合ぢやアなかつたかへ ▲「イヤ最うまことに大出來〳〵、此身達も折角關東から遙遙の所を來たからにやア、大星の腹の中をすッぱり見拔いて歸らないぢやア、役目も立たないと言ふものだから、是まで種々と探つては見たが、今日の喧嘩仕懸は實に上出來サ ×「夫にしても那程無法なことを爲たら、些たア腹でも立つだらうと思へば、平氣で寐て仕舞つた所は腹の大きいのだらうか、酔潰れて譯がわからなくなつたのだらうか ❹「光刻鐘から這出して、譯言を言た狀は、也さ腰拔同然サネ ×「あれでも主人の怨を報はうと言ふ了簡があるだらうか ❺「まア那分ぢやア大丈夫そんな氣は何所へかなくなつて仕舞つたらしい ❻「ナニサ、人の心と言ふ物は上からは見えねへから、そんな評議評定を爲やうより、おし片付けて仕舞ふのが近道だと思つたから、先刻那奴が寐たのを幸、手短に遣らうと刀へ手を懸けたら、止められたから其儘に見遁したが、今で思へば殘念だ ▲「コレサ何樣も貴公は兎角荒ッぽいからならねへ、那處で大星を首尾よく爲とげれば、そりやア根を伐つて葉を枯すやうな者だけれども、那奴大望を企つる心があれば、酔つた振はするとも、おめ〳〵斬られるやうなことは爲まい、若又貴殿に殺される程の者なら、斬らずとも大事を引出す氣遣はない、そんな腰拔を斬つたところが役に立たない計でなく、後日事があらはれればお互の爲にもならぬ譯だから、其處でお禁めまうしたのサ、夫より何か證據になる物も有らうかと鼻紙入をさらつて來たが、併し懐中物を取られるのも知らないとは、何れ本性とは思はれない ×「マア何にしろ中を改めて見るが宜い、萬一是はと言ふ書物か、一大事の密書でも入れてあるまいものでもないトおの〳〵寄つて鼻紙入を開けば、果して數通の書物あるゆゑ片端からひらき見るに、

一銀貳百四拾匁　藝子十人揚代
一同　七拾貳匁　舞子三人揚代

×「何だこりやア揚屋の書付だト次をひらけば、
餘りとや御なつかしさに文して　申上〳〵、御歸りのちも御宿の御しゆびいかゞおはしまし候や、
▲「馬鹿〳〵しい、是は太夫の文だト是より段々開き見るに、何れも遊所の書付或は文の類にて、取る方

もなき物のみなりしが、其中に大星様、鉄寺十内と上書をせし手紙一通見付出し ▲「そりやこそ爰にこんな物があつた、是には何か密書でも書いてありさうだ ×「なる程、此十内といふ奴は鹽谷の浪人の内でも、京都の留守居役を爲て居た者で、大星とは至極懇心だと云ふ噂も聞いて居れば、内密の相談の手紙に違はあるまい、まア何にしろ讀んでお聞せなせへト言ふに一個がおし開き讀出すその文章には、

昨今秋冷相催し候へども、いよ〳〵御壯健御座被成、欣喜斜ならず存じたてまつり候、然れば今日兼而申合せし同志の面々、拙宅へ會合致し候約束にて、最早大半相集り、尊大人の御光來を先刻より相待申候、

▲「何様だネ此文面は ◎「なる程、兼て申合せ候同志の面々拙宅へ會合するとは、何か浪人どもが讐討の企でも致すに就いて、其相談を爲やうといふ會合と思はれますな ●「何にしろ跡を讀んで見るが宜いぢやアないか、然すると譯が解ることだからト言ふに再び讀む文言は、

尤いづれも御存知の初心にて、御慰にも相成りまうす間敷候へども、

×「オヤ〳〵おつな文句だせ ◎「まア構はず讀みなせへ、

折から幸大鷲子葉上京のよしにて參合せ候へば、那者に文臺を相頼み、今日は日短の事にも候故、歌仙一順にて、跡は麁酒一献呈し度、別に取設は御座なく候へ共、折節庭前の菊半開致し候間是のみの御肴に御座候、依て先日菊の兼題さし出し置き候、是又今席にて開卷の心得に候へば、何卒早々御入來被下度、餘は拝顔を期し候、以上。

●「何の事だ、こりやア俳諧の催しをするから來いと言ふ手紙だ ◎「人を馬鹿にした、面白くもねへ ×「此身ア何だか變な文句だからこんな事ぢやアあるめへかと思つたヨ ▲「夫でもはじめの書出しが、同志の面々なんぞとかたくやらかしてあつたから、何か密事の手紙と思はうぢやアないか ◎「最う其外には何もないかネ ▲「跡は楊枝入と薬の這入つた包、イヤ待つたり爰に金入があるト中を探り見て舌を出し ▲「イヤハヤ呆れた物だ、大星とも言はれる者の金入に、小粒がたッた二ッ這入つて居た、是で大盞もすさまじい、宜いは詮方がない、此金で一盃呑直して、夫を骨折賃とするサ ▲「チョッいめましい、併し是で大星の腹も知れたと言ふ物だから、先關東でも御安堵のわけだ ×「つまらねへ事で、酔が醒めたら急に寒く成つて來た、飲むと咄が極つたら、何處でも構はねへから、酒屋へ飛込む事と爲やうぢやアねへか ◎「いかさま其事其事ト果は互に苦笑して、何處ともなく立去りけり。

什麼此武士は何者ぞ、兼て關東より遣はし置く師直の間者にて、由良之助の心底を探らんとする方便とは、文體にても推し給はん、大星速くも其機を察してかの菌狩に同道なし、態と紙入を奪はせて、いよ〳〵眞の放埒者と巣等に推量させんと言ふ、裏をかいたる計畧なるべし、然ればこそ其裡に得知れぬ文ども彩入れおき、又俳諧の催しの手紙なんども加へしならめ、尤義士の面々の密談ありて寄合ふ時は、他の疑を防がんために、或は俳諧茶の湯などに事をよそへて集會せしよし、爾らば夫等の手紙なれども、他見されても障なければ、是をも入れて置きたるならんか、兎にも角にも大星の深智遠謀の量り難きを、抽き筆にてなか〳〵に述ぶるは烏滸の所爲ながら、猶後輯には大星が敵は素より一味の者にも、眞の放埒と見するより、義士の裡にも思慮深からぬは、大星を討つて捨てんと憤を發する趣、由良も又一味の者の心底を探るの譯より、續いて前卷にあらはしたる和七小雛等の後の物

語は、十四十五の編に綴り、引きつゞきて出版なすべし。

いろは文庫第十四編序

きのふと過ぎ、けふと暮して飛鳥川、流れてはやき時行變化、それが中にも別きてなほ、目前の替るを旨とするは、斯る圖の草紙なれど、這は三歳の童子も知る、誠忠義士の實傳に、いさゝか枝葉を加へつゝ、時代を世話に寫せしのみ、新規に設けし脚色もあらぬを、僥倖にして看官の、愛顧蒙る事やありけん、只管書肆の續輯を、編めよと言へば書くよといふ、間に合せなる相槌も、紺屋の明後日言霊して、だら〳〵急の筆の早染、夜なべをかけてつゞくりあげ、春の晴着に備ふるのみ。

恵方にむかふ文机に
若水させし硯を開きて

東都作者　爲永春水記

正史實傳 いろは文庫 巻之四十

第七十九回

窓に人の心程量りがたき物はあらじ、外向は正義と見えたるも、口と心は表裡にて、まさかの時にいたりては、命を惜むも尠からず、尤四十七士の他は、何れも九太夫親子が如き臆病未練の者にはあるまじ、先や籠城といふ時には、さすがに主君の御鬱憤を思はざるにあらざれば、多くの人に競ひ立てられ、城を枕に討死と、百人にして五六十人は覚悟究めし者もあらんが、幷は一旦の勇にして、赤城を退散せしより次第〳〵に勇氣も折けて、或は妻子の愛にひかされ、又は去りがたき譯などありて盟義を叛くやからも多かり、然れば大星が深智なるも、許多の人の心底を只一向には見分るまじ、始赤城にありし日より、今浪々の身となる迄も變心あらず見ゆる者を、先義黨とは思ひながら、猶も試して見ん物と心にひとつの密策を設け、然もなき體にて居る所へ、ある日原郷右衛門、鉞寺十内の兩人來りしかば、宜き折からと一間へ通して　山「イヤ、是は御兩所お揃で、扨は原氏には先日の碁に敗北いたされたから、會稽の恥辱をすゝぐ積で今日は鉞寺を雇つてお出と見えるネ　郷「へ、、、、イヤ左様でもございません、此間から兩三度上りましたがお留守ゆゑ、今日もいかゞとぞんじましたら、宜く御在宿で被爲入ました　山「ナニサ、私も此間うちは、祇園町の色酒が身にしみて、宿にもろ〳〵居ましなんだ所、一二日跡にとんだ面いめに逢つたから、先當分は遊び歩行も見合せて居るノサ　郷「へ、ヱ、夫はまた何様いふことでネ　山「何様と言つて咄にもならない事だが、實は揚屋の酒にも呑倦きたから、一番氣を替へて嵯峨へ茸狩と出かけた處が、途中で四五個の武士に出合つて、斯々如斯〳〵の仕合サトありし次第を物語り　山「其時取られた紙入に、金でも澤山ある事か、割間等に花金を遣つた殘が纔ばかりと、揚屋の背出や妓女の處から來た文なんぞが這入つて居るのだから、是が鹽谷の御家老様の鼻紙袋かと思はれては、何分面目次第もない譯サ、併しあれが盗賊なら夫でも宜かつたが、何様も物取をするやうな人體とは察はれなんだ、何に爲ろ其時は醉つて居たから　然のみとも思はなかつたが、酒が醒めたら急に怖くなつて、其處で遊び歩行を止めて見たら、妙な物で段々馬鹿遣をした金が惜しくなつて、那丈の金を貸附けたら、今比は餘程多分の利足になつたらうと思ふ所から考へて、遣殘してある貯で金貨を致さうと、御覽の通り裏の明地へ土藏を建てはじめました、是は下賤なぞとまうして、品物などを預る節の用心でござる、私も其通り急に斉衆者になりましたから御馳走は致さぬが、珍らしいお出だから有合で一盃さし出さうト言ひつゝ手を鳴して若黨を呼ばんとするを、二個は急におし禁め　郷「イヤ、御酒の儀なら先今日はお斷りまうします、扨も〳〵大星殿には、まだ我々の心底をお疑ひなさると見えて、けしからぬ今のお咄、郷右衛門においては眞の儀とは思はれぬが、鉞寺、貴公は何と思はッしやる　十「左様〳〵、先拙者が存ずるには、敵とまうすも最早老年のお人故、何時老病が差起りて死なれまい物でもない、左様な事があつた時には千辛萬苦も水の泡、假令また然ない處が、盟義を守つて居る者も段々年月が立つにつれて、張合抜のするもあれば、脇へ心の移る者もあるまいとは言はれません、此位の事は私がまうさずともお心のつかぬ大星殿でもございますまいが、近比では

一向に仇討などの御内評議もなく、如何の譯かと伺へば、まだ時節が來らぬとばかり、箇樣に延々になされますには、何か御所存でもあつての事か、只今原氏もまうされます通り、餘人は知らず我々に何もおつゝみなさる事はございますまいから、何卒思召の極意の所を仰聞けられて下さいますまいか　由「是は又改つたお言葉、何として御兩所を疑ひませうか、今鉄寺の申された張合抜がするとは至極の高論、箇樣まうす手前抔が大に張合が抜けたやうで、了簡が種々に變つて來ました、其譯は最初は一旦の怒によつて是非に仇討と思案も定めましたが、今となつて考へて見れば、なか〳〵容易に討てる敵ではなし、若仕損じた其時には、世の物笑に相成つて、いよ〳〵亡君の御名を下すと申すもの、其討ちにくい敵を討たうより、おなじ忠義を致すなら、鹽谷のお家を細くとも再興いたすのが、却つて忠節かと思はれます　郷「イヤ、夫は元老のお詞ともぞんじません、お家再興の事は最初から御相談もあつた事で、若も然いふ御沙汰でもあらうかと、仇討の時日をも延しましても、今において何の御樣子もないのは、最早其望も絶果てましたのと思はれますれば、此上は師直殿のお首をまうし受け、亡君の御鬱憤を晴すの他はございますまい　由「然ればサ、初から再興の事は御相談をも致した事だが、今において御沙汰のないのを熟〻考へて見る所が、仇討の盟約を致した人々から神文を受取つて居ります、是は尤極内々で致した事とは言ひながら、夫に就いては色々と内評定なぞをするのが何時となく關東へ聞えて、然いふ企のある譯では、なか〳〵家再興抔は仰付けられぬといふお惡しみを受けたのではござるまいか、何にしろお上の御疑念を晴すには、一旦仇討の所存は思絶えるより他はござるまい、夫には兼ておの〳〵がたから預つた神文もその儘置くは如何ゆゑ、先お返し申す積りだが、私から一々呼付けて返すも餘り仰々しいやうにも思はれるから、御面倒ながら序に任せ御兩所へ御渡しまうし置くによつて、是等の次第をお咄しなすッて、最寄〳〵に御配分を願ひたい物だト言ひながら、手文庫の裡より數十枚ある誓紙をばひとつに集めて兩個の前にさし出せば、流石の兩個も興覺顔に呆れて言葉もなかりしが、郷右衛門は勃起として　郷「最前からして承る處、全く我々の心をばお探りなさるばかりとも思はれず、何樣やら元老の御心底が些訝しく思はれます、拙者においては戯に神文は認めませぬ、一命を抛つて亡君の仇を報ふの外に所存はござらぬを、今更貴殿が左樣の事を仰せられては、最初の盟約に相違致す、夫とも貴殿が今となつて臆病未練な御所存ならば、元老とて用捨は致さぬ、彌仇討の一義は思止まられた事か、又は我々の心底を試し見んといふ一時の方便か、さア御返答が承りたいト指副の一刀を小脇に引きつけ、顔色變へて詰寄れば　由「ハ、、、、イヤコレ郷右衛門、そのやうに腹を立たれな、お家再興と申すのも全くは忠義を存ずるゆゑ、只一向に臆病とは近比迷惑至極のいたり、夫とも拙者が申す事を各方が不承知なら、止事を得ないからお手前達は仇討でも何でも御勝手に被成て、我等一人はお除き下さい、拙者は又拙者の存念通りに致すから、何は兎もあれ此神文は御返し申す事と致さう　郷「イヤ、其神文請取ります、まい、出來もせぬお家再興、夫を言立に臆病を塗隠し、身を遁れやうと致さるゝは、日比の貴殿の御氣質にも似合はぬ情なき御一言、何はしかれ盟約の通り是非とも仇討をお進め申す、若此うへにも御承知がなく、未練の振廻あるにおいては、敵討の血祭に貴所のお首を討落し、正義の者の魂を堅めさせるより他はござらぬ、元老へ對し過言なれど艶を申さぬが我等の性質、有無の間の御返答を今一應承らうト仡と睨みし眼中尖く、否と言はゞ一討に切つて捨つべき郷右衛門が、氣色に十内駭きて　十「コレ〳〵原氏、御自分の申される處は重々尤至極だが、元老の思召を

つくづくと考へるに、何か深い御所存のある事かとも察はれるから、出過ぎたやうだが大星殿の仰に任せ、此神文は先々我等がお預り申して、今日はお暇致さうではあるまいか　郷「夫ではお手前も臆病者の

十「イヤサ、拙者が心底を知らぬ其許でもござるまいから、先何事も我等にお任せなさい、悪いやうには取計らはぬからト郷右衛門を押しなだめ、山良之助にも暇を告げて手を引立てつゝ立出れば、心ならねど郷右衛門もしぶ〳〵ながら歸りける。

第八十回

什麽鉄寺十内は、鹽谷家盛なる比は京都の留守居を勤めしかば、浪々の身となりても都の裡にて爾る町家に借宅なし、好む道ゆゑ歌あるひは俳諧などを人に教へて世渡の助にしたりとぞ、十内が妻を阿丹と呼び、女兒をお以與といひつゝも、猶年老いたる母一個あり、悴孝右衛門は大鷲文吾等と先達て東都に下れば、今花洛には老母を入れて家内四人の暮なるが、其妻お丹といへる者心ざま貞烈にして、倘男子にてあらんには、四十七士の面々にもをさ〳〵劣らぬ魂あれど、常には柔和を面にあらはし、宜く老姑につかへて孝を盡し、夫の心にいさゝか悖らず、女の道を深く守りて家を治むるのみならず、漢に倭の史を也學びて、和歌の道にもくらからず、然れば十内が仇を討たんと東都に下りたる後も、折々歌など詠送りて文の往復數通あり、丹は次の卷に委しく綴りて、夫婦の間に信ある趣をなん分解くべし、爾れば或日の事なるが、お丹は老母を伴ひて寺參に往きたる留守に、十内は奥の間にて歌の本など取りひろげ一個詠めて居る處へ、女兒お以與が急はしく勝手元より立出て　いよ「アノウお鈴さん、扇屋が參りましたヨ　十「ナニ扇屋が來たとかへ、先何もさし當つて地紙も入らず、まア用はないと言つて歸して遣んな　いよ「アレサお鈴さん、常例來る人ではございません、此間二三度來て、ネ、ソレ決して實正の名を言ふなと被仰つた那御方でございますヨ　十「フウ然か、夫ぢやア丁度在宿だから、此方へお揚んなさいと言つてお通し申すが宜い　いよ「ハイ〳〵ト言ひながら立つて往く、程なく地紙の箱を手に提げて、身粧も宜からぬ扇賈が次の間から顔を出し　扇屋「是は旦那さま、お宿でございましたか　十「イヤ扇屋さん宜處へ來て呉れた、實は少し咄のしたい事もあつて、お前のお出を心待に待つて居た所サ、さア〳〵ずッと此方へ這入んなせへト言はれて、扇賈は一間へ這入りながら四邊を見廻して　扇屋「今日は御新造樣は　十「アイサ、老母に附けて寺參に遣つたから、跡には私と娘ばかり、他に氣遣な者も來て居ぬから遠慮はない、時に千崎、餘程お手前は商人馴れたと見えて、何樣見ても鹽谷の御家中千崎彌五郎とは思はれない　彌「へ、、、、私も先達て東都へ下り、樣々な形をして樣子を窺ひましたが、何分敵の用心が嚴しく、段々月日が立つにつれて、東都に居る義士の内には、氣の短い者は癇癪を起して無法な事でも爲さうな樣子もあり、何でも是は大星殿が急にお下りが出來ずば、霞田氏か原氏かお前さんか、何れ老分のお方が東都へお在で、お取締がなくッては、とんだ行違が出來やうかと思ひましたから、目立たないやうにこんな風俗で登つて參りましたが、イヤモウ宜い眞似は爲にくい物だが、悪い眞似は速く馴安いもので、今では此通り丸腰で歩行ても何ともない心持になりました　十「いかさま、東都の樣子も此間お出のとき薄々お咄を聞いたが、京地迚も同樣の譯で、兎角時日が延びるに連れて同志の面々も退屈が見えるから、原氏と相談をして、四五日前に大星殿の宅へ往つて、東行の内談をして見た處が、思ひの外な元老の御所存で、同志の者から預つた神文を返し、

仇討を思禁つて御家再興を料ると言ふ譯サ、郷右衛は那通りの正直者だから、何が腹を立つて既に元老を一討に、爲かねさうもない形勢だから、私がやはらを入れて、先神文を殘らず預つて歸つたが、千崎お前の了簡ではまア、何樣爲たら宜からうと思ひなさる　彌「なる程、元老の思召、深い意味合のある事と思はれて感心致します、夫を又御承知で神文を殘らず預つてお歸りなすッたとは、流石は鉞寺氏のお取計ひ恐入りました、最早其樣子では仇討も遠からぬ事と見えますネ　十「コレサ、貴公も妙な事を言はッしやる、お家再興仕樣と言つて神文を返すのが、何故また仇討が近寄つたやうに見えるのだネ　彌「アハ、、、是は鉞寺氏のお辭とも思はれません、愚昧な私さへいか樣と思ひます事を、貴公樣程のお方が御承知のない筈はございますまいが、併し私の推量の致し遊ひかぞんじませんから、先愚存の處を申出して見ませうが、今元老の思召では、迚も再興なぞといふ事は出來ない譯は素より御承知でございますから、此上は仇討と御決定はなすッても、同志のうちに表面は正義のやうに見えても、内心の處は量りにくい徒も萬一あるまいには限りませんから、先仇討を禁めるといふので神文を返せば、二心ある者は能い幸にして連中を拔けて仕廻ふ者もあり、又何處迄も亡君のお爲に一命を捨てやうといふ了簡の者は、丁度原氏のやうに立腹をしていよ〳〵本心が顯れると申すもの、又神文まで返したといふ事が敵方の間者の耳へ這入れば、直さま關東へ注進があつて、用心の薄くなつた敵の油斷へ附込んで一時に事を爲てとらうといふ、反間の御計策かと思はれますが如何な物でございませうト言ふに十内横手を打つて　十「イヤ天晴の御明察、斯言ふと何樣やらお手前を疑つて、口うらを引いて見たやうに聞えて甚だ赤面致すが、實は私も然ではあるまいかと推量したから、神文をも殘らず預つて歸りがけに原を此住居へ連れて來て、扨元老の言はれた處は内實は斯々如此ではあるまいかと、今お前が言はしッた通りの事を段々咄した處が、郷右衛も一圖に腹の立つたので、然いふ深い譯までは氣が付かなんだと大に後悔をして、直に大星殿へ言過しをした詫言に往くと言つて出かけたが、誠にあの人は少しも腹に邪氣のない正直な人サネエ　彌「大方お前さんも然いふ御所存とはぞんじましたが、先私の愚案をも申出したのでございます　十「扨夫は宜いが、爰に少し困るのは彼神文サネ、私の手から同志の面々へ返す積で請取つては來たが、然すると其所に何樣か節をつけた咄でも爲ないでは、衆人が得心も爲まいと思ふが、御迷惑でも是はお前から返す咄をして被下つては何樣だらうネト言はれて少し考へしが　彌「なる程御道理でございます、夫には宜事がございます、那早水藤左衛門といふ男は大星殿の腹心で、元老の胸中をも荒增察して居りますから、私が早水に相談をして返させるやうに致しませう、併し然致したら定めて同志の面々が動立ちませうから、其時には又其樣に御相談を致しませうト言へば十内歡びて、件の誓紙を渡すにぞ、彌五郎は受納め此日は別れて歸りしとぞ。

按ずるに、最初赤穗にて殉死と決定せしときは一紙に連判なしけるが、いよ〳〵必死といへる日に約を逆きし者多ければ、其後改めて正義の者より銘々一枚づゝの起請文を大星に渡せしものと見えたり、扨を又此度返さんとする遠慮深計爾もありなん。

斯て千崎は早水と示合せ、藤左衛門をもつて同志の者へ彼起請文を返させしに、中には是を幸として故なく誓紙を受取るもあり、その中に義氣金鐵のごとき　翟は憤に堪へかねて、使に立ちし早水をさへ不義士と思ひ、種々に惡口做せる者もありしが、思慮深き藤左衛門ゆゑ、各左樣に思はれなば、鉞寺方へ會合して今一度評議あるべしとて、色々に言ひこしらへ、終に十内方に寄集り、扨是迄は忠義一途と頼切